

教会学校教案誌

2013.4.5.6月号

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、
わたしのところに来なさい。わたしがあなた
がたを休ませてあげます。 マタイ11章28節



No.49

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2013年4～6月カリキュラム（第49号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
4月7日 進級式	復活のときの祝福	問36	ウ小37, 38、ウ大84-90
		コリントー15:12-21	コリントー15:13
キリストに結ばれて、再臨の日に朽ちない体によみがえる幸いを待ち望もう			
14日	第三部生活の道 感謝の生活	問37	ウ小39、ハイデ86, 87
		ローマ6:12-14	ローマ6:13
主が救いの道を与えてくださった。主の恵みに感謝して生きる道を歩もう			
21日	感謝としての服従	問38	ウ小39、ウ大91、ハイデ91
		サムエル上15:1-23	サムエル上15:22
神の救いの恵みに感謝して、神の御言葉に聞き従う人生を歩もう			
28日	十戒—感謝の道しるべ	問39	ウ小40, 41、ウ大95, 97, 98
		出エジプト19:1-6	申命記10:4
十戒は神から神の民への愛の贈り物、神の愛の言葉。神の愛にこたえて歩もう			
5月5日	神と人への愛	問40	ウ小42、ハイデ93
		マルコ12:28-34	マルコ12:29-31
神の愛にこたえて、わたしたちも愛することに生きよう。神と人を愛する愛に			
12日 母の日	贖いのみわざ—過越	問41, 42	ウ小43, 44、ウ大101
		出エジプト12:21-28	出エジプト20:2
十戒の歴史的根拠である神のみわざ—過越—を学び、神の大きなみわざを仰ごう			
19日 聖霊降臨祭	聖霊と終わりの時代	—	—
		使徒2:14-42	使徒2:38後半
聖霊によってキリストが証しされる時代が始まった。聖霊の力に生きていこう			
26日	過越の成就—キリスト	問41, 42	ウ小39-44、ウ大91-101
		出エジプト20:2	ペトロー1:18-19
十字架のキリストにおいて贖いのみわざが成就した。キリストに結ばれて歩もう			
6月2日	第一戒 神を神とする	問43, 44	ウ小45-47、ハイデ94, 95
		出エジプト20:3	出エジプト20:3
まことの神をあがめることができる幸いを知り、神を神として歩もう			
9日 花の日	第二戒 刻んだ像の禁止	問45, 46	ウ小50-52、ハイデ96-98
		出エジプト32:1-24	出エジプト20:4a
偶像を拝む罪を知り、目に見えない主を信じる幸いを喜ぼう			
16日 父の日	第三戒 神の御名	問47, 48	ウ小54、ウ大112、ハイデ99
		出エジプト3:7-15	出エジプト20:7a
神を畏れ敬う心が求められている。心から神に信頼し、神をほめたたえよう			
23日	第四戒 安息日の聖別	問49, 50	ウ小57-62、ハイデ103
		出エジプト20:8-11	出エジプト20:8
安息日が与えられている幸いを知り、主の日の喜びと安息を分かち合おう			
30日	第五戒 父母を敬う	問51, 52	ウ小63-66、ハイデ104
		エフェソ6:1-3	出エジプト20:12a
主なる神が人間関係を与えてくださっている。「神ゆえに」父母を敬おう			

も く じ

2013年4・5・6月カリキュラム	
まえがき	望月 信 4
巻頭説教	三川栄二 5
日曜学校・教会学校訪問	
大阪教会の日曜学校の紹介	中嶋俊治 9
講演「開拓伝道、教会形成と日曜学校」	相馬伸郎 12
信仰の証	石川真衣 27
本誌の基本方針	
教会（日曜）学校像について	相馬伸郎 28
副読本のご案内 31
自由募金のお願い 32
聖書黙想・説教展開例・分級展開例	
4月 7日 34
4月14日 39
4月21日 44
4月28日 49
5月 5日 54
5月12日 61
5月19日 66
5月26日 71
6月 2日 76
6月 9日 81
6月16日 86
6月23日 91
6月30日 96
2013年7・8・9月カリキュラム 101
2013年度年間カリキュラム 102
執筆者よりひとこと・あとがき 104

まえがき

望月 信（高蔵寺教会牧師）

このたび、個人的な理由で、教案誌編集部から退かせていただくことになりました。最後に「まえがき」を記すよう命じられました。

この営みが2001年に始まったときに、誘われて参加いたしました。教会学校・日曜学校は、教会の基本的な営みの一つです。そのための教案誌を日本キリスト改革派教会が作成していないのはどうしてなのかと思っていましたから、誘われて一も二もなく、参加いたしました。それ以来、編集部の一員として活動することが許され、心から感謝しています。編集実務に際しては、執筆者の方々から提供していただいた原稿にさまざまな修正や削除、加筆などをさせていただくことがあり、不快な思いを与えたことがあったらうことを思います。申し訳ありませんでした。主にある交わりの中で受け入れられ、皆様に赦されて、奉仕を続けることができたものと理解しています。教会のかしらである主なる御神に、また、教案誌の読者の方々、執筆者、協力者の方々に、心からの感謝を申し上げます。また、これからも発行のために努力を続けてくださる方々の上に、主の憐れみと祝福を心よりお祈りいたします。

さて、回顧を記すだけでこの欄を埋めてはならないでしょう。これからの子どもたちに関わる大切なこととして、日本国憲法の問題、また教育の問題があります。すでに袴田康裕牧師が教育の問題について教案誌第47号に執筆してくださいました。ぜひお読みください。今回は、憲法のことについて記します。

昨年末に衆議院議員選挙が行われ、自民党・公明党による安倍政権が誕生しました。公明党は憲法改正に慎重ですが、自民党は積極的です。民主党の中にも、日本維新の会などの第三極の中にも、改憲に積極的な勢力があります。この

問題を注視することが必要です。

自民党の憲法改正草案を読みました。現行憲法の三本柱と言われる「国民主権（主権在民）、戦争の放棄（平和主義）、基本的人権の尊重」、これら三つのどれもが後退していると言わざるを得ません。現行憲法前文冒頭の、主権が国民にあることを宣言する格調高い文章は失われ、「日本国は、長い歴史と固有の文化を持ち、国民統合の象徴である天皇を戴く国家であって」という文章が最初に掲げられています。国民主権よりも、天皇が国家元首であることが前面に押し出される形です。基本的人権については、「公共の福祉」が「公益及び公の秩序」に言い換えられて、「公益及び公の秩序に反しない限り」の基本的人権です。また、「すべて国民は、個人として尊重される」が「全て国民は、人として尊重される」と言い換えられていて、「個人」としての人格が尊重されることではなくなっています。戦争の放棄については、国防軍を保持することになり、文民統制も緩められます。

改正草案全体について、文章が上から目線であり、国家が主体となる形で記されています。国家として国民にこれだけの権利を認めてやる、という態度の文章です。これは、この草案が立憲主義の原則に立っていないことを示しています。憲法とは本来、公権力に制約を課し、権力の濫用・暴走の歯止めとなるべきものです。そのために、国民主権を明示し、国家にどれだけの権能をゆだねるのかを定めます。この草案は、その役割を果たすものではありません。

この事柄は、子どもたちの将来を左右します。教会にゆだねられている子どもたちのために、この事柄の推移を注視して、教会的な事柄として声を上げなければなりません。その時が来ていることを思わされています。

「命」に生きることへの招き

～ヨハネによる福音書20章31節による説教～

三川栄二（稲毛海岸教会牧師）

これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。（ヨハネによる福音書20章31節）

1. 「命」を得るための書物

私たちは日曜学校の教師として、毎週、悪戦苦闘しつつ奉仕を続けています。自分の奉仕がうまくできたと思うときもあれば、そうではなかったと思ひ、がっかりしてしまうときもあります。子どもたちとの関わりや教師たち同士の交わりの中で、喜ばしいこともあります、残念に思うこともあります。そして時として、自分自身に自信を失って、奉仕を続けることに意欲を失ってしまいそうになることもあります。そうやって、時として立ちすくんでしまう私たちだからこそ、自分が立つべきところを、しっかりと見つめていく必要があると思います。自分がどこに立てられているのか、何のために奉仕しているのか、その原点を見つめ直していきたいのです。言うまでもありませんが、キリスト教信仰の中心は、イエス・キリストご自身です。この方に出会い、この方と共に生きていくこと、それがキリスト教信仰のすべてだといっても過言ではありません。そしてこの主イエスへと子どもたちを導いていくこと、それがわたしたちに委ねられた務めであり、使命です。そこで大切なことは、主イエスとはどのような方であり、その方を信じるとはどういうことかを、しっかりとつかんでいくことです。それではどうやって、この主イエスと出会うことができるか、それは聖書を読み、学ぶことによってです。そこでここでは、そもそもこの聖書とは、どのような書物かということを考えていきましょ

う。

聖書という書物が書かれた目的を、福音書記者ヨハネは次のように語ります。「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を得るためである」（ヨハネ20:31）。使徒パウロも、「この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます」（テモテ二3:15）と語りました。聖書とは、キリストにある「救い」、つまり「命を得る」ために書かれた書物です。そこで主イエスは弟子たちに、「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしなさい」（ヨハネ5:39）と語られました。ここで主イエスは、聖書という書物が、主イエスについて証しをし、主イエスについて書かれたもので、それは私たちが「命を得る」ためのものであることを明らかにされました。私たちが主イエスを信じて、「永遠の命を得る」こと、それが聖書の目的なのです。

このことをさらに掘り下げていきましょう。ギリシャ語には「命」という言葉が二種類あって、区別されています。一つはビオスで、これは自然の生命現象、つまり身体的・物理的な命

を意味します。心臓が鼓動しているとか、脈があるという意味での命です。それに対して、もう一つゾーエーという言葉があり、それは肉体的生命が死んでもなお生きていくような命であり、先の「自然的生命」と対比して、「人格的生命」とでも言うべき命です。人間は、動物や植物と同じくヒオスとしても生きていますが、それだけで「生きている」とは言えない面を持っています。自分が自分らしく、生き生きと輝いて生きるというように、人間らしく人格として生きる命があります。それが満たされないと、どんなに衣食住に満たされて、ヒオスとしての命は生きているとしても、それだけで私たちは「生きている」とは思えません。それは私たちを内側から生かしていく根源的生命とでも言うべきもので、先にあげたヨハネの福音書が「命」について語るときには、いつもこのゾーエーが用いられるのです。ですからここで「永遠の命」とか「命を得る」と言われる時、そこでの命はゾーエー、肉体的な命を越えた人格的な命を得ることを意味しているのです。「永遠の命」とは、ただ時間的にずっと長く、その意味で永遠に存在し続けることを意味するのではなくて、そこで生き生きと自分を生かしていく、輝いて生かされていく命の中で生きることなのです。何の希望もなく、喜びもない中で、ひたすら永遠に存在するだけだとしたら、それこそそこは地獄ではないでしょうか。聖書の目的は、このゾーエーとしての命を得ることにあります。そしてそれはイエス・キリストにある、だから聖書は主イエスについて証言するのです。それが、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」と、主イエスが言われたことの意味なのでした（ヨハネ11:25,26）。

2. 「生きる」とは愛し、愛されること、交わり に生きること

ところで私たちは、どのようなときに自分は「生きている」と思えるでしょうか。願い事がかなったとき、夢が実現したとき、嬉しさで満たされたとき、色々あるでしょうが、何よりもそうであるのは、自分がかけがえのない存在として大切にされたり、誰かから必要とされる時、あるいは愛する存在、守ってあげる相手を持ち、その相手からも愛されて、感謝され、喜ばれるときではないでしょうか。新聞のコラムでこんな記事がありました。ある国の内戦で、多くの人びとが虐殺された、そしてかろうじて生き残った人びとが難民キャンプに連れられてきたのですが、その中に小さな男の子がいたそうです。その子は目の前で両親も兄弟も家族を皆殺しにされ、小さかったのでこの子だけは虐殺を免れることができました。通りを泣きながら逃げ惑っているところを、近所の人か誰かが難民キャンプ行きのトラックに乗せてくれたのです。その道すがら、虐殺されて放り出された痛々しい死体を目の当たりにし、心に深い傷を負ってしまいました。キャンプには来たものの、その子は食物を受けつけず、日に日に弱っていったそうです。栄養補給の点滴をしても、もはやそれを体が受けつけないほど、弱っていた。子ども心にも、深く傷ついて、その子はもう生きることを拒否してしまっていたようでした。ついに医者もさじを投げてしまい、誰の目にもこの子が死ぬのは時間の問題だと思われていました。

ところがそのキャンプに来ていたボランティアの青年が、その子を何とか救いたいと、つきっきりでその子の面倒を見るようになりました。朝から晩までずっとその子に寄り添い、抱きしめ、頭をなで、眠りそうになると子守唄を歌う、そうしてずっと寄り添っているうちに、誰もがあきらめたその子に変化が生まれてきた

というのです。まったく無反応だったのに、こちらからの働きかけに反応するようになり、無口で無表情だったのが、次第に微笑み返すようになっていった、そしてそのうち食べ物を口にするようになり、ほどなく元気になっていったのでした。こうしてその子は生き返りましたが、それは医学の力でも、何か必要な物が満たされたからでもありませんでした。あなたは生きるべきだ、生きなければ駄目だ、生きる資格がある、あなたは大切なかけがえのない一人だからと、その子を見捨てないで最後まで面倒を見続けた、一人の青年の愛が、その子を生きる者へと回復させていったのでした。このように私たち人間は、愛の交わりに生きるとき、自分は「生きている」と感じることができるのです。なぜなら私たちは、そのように創造されたからなのです。

聖書が語る「命」とは、ただ生存している、存続しているということではなくて、このように生き生きと輝いて生きることであり、それは「愛の交わり」に生きることです。ヨハネ福音書の中で主イエスは、「子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができます。永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」(17:2,3)と語られています。ここで言う「知る」とは、単なる知的認識、知識として知ること、データを収集することではなくて、人格的な認識です。「アダムは妻エバを知った」(創世記4:1)とあるように、それは身体的一体性を含めた人格的なものです。ですから「永遠の命」が「神を知る」ことだと言うとき、それは神ご自身との生きた「交わり」、それも深い愛の中での交わりを持つことを意味します。ここで主イエスご自身が言われているように、それは「あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、……彼らもわたしたちの内にいるように」なる

ということであり、「わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられる」ように、「彼らが完全に一つになる」ということです。「わたしに対するあなたの愛が彼らの内にあり、わたしも彼らの内にいるようになる」ことです。このような一体性、「一つとなる」ことの中での深い生きた交わりに生きること、それが「命」なのです。そしてこの交わりは、永遠の神との永遠の交わりなので、「永遠の命」となるのです。聖書は、この「永遠の神との生きた交わり」をもたすために記された書物であり、それを約束する書物なのです。そしてそれが「命を得る」ということなのです。

3. 「生きよ」と、命へと招く神の呼びかけ

聖書は、神が創造された世界はもともと完全で、善に満ちあふれた良い世界であったということ語ります。そして神は、「神の安息」を完成させるために、今も働き続けておられるのです。神が造られた世界は、命に溢れた世界であり、命がみなぎり、命が輝く世界でした。しかしそのすべてを、私たち人間が、ご破算にしまいました。それでは神は、ご自分の世界をめちゃくちゃにした人間を見捨て、呪い、破滅させようとしたのでしょうか。いいえ、そうではありません。神が望まれることは、私たちが死ぬこと、滅びることではなくて、「生きる」ことだからです。殺すことではなく、生かすことです。そして聖書の根底には、命あるすべてのものに向かって「生きよ」と呼びかける神の溢れるほどの熱い思いがみなぎっています。エゼキエル書16章3～7節には、その神の切々たる思いが溢れ出ています。そこには荒れ野に捨てられた赤ん坊が出てきますが、それはイスラエルという民族の歴史を象徴したものでした。かわいくない、醜い子だったからでしょうか。子どもが多くて育てられないからでしょうか。育てられない深い事情があったのでしょうか。男ではなく女の赤ちゃんでしたから捨てら

れたのかもしれませんが。女の子は跡継ぎにはなれず、貧しい家庭にとっては負担となる存在としか見られていない時代でした。こうして誰からも必要とされず、「生まれてくれて、ありがとう」と喜ばれることもないまま、捨てられた赤ちゃんでした。捨て子をするといっても、親はやむにやまれぬ事情で捨てるのであれば、それなりの捨て方をするものです。せめて体をきれいにし、しばらくの間だけでも心地よく過ごし、良い人に拾われることを期待して、目立つところに捨てるでしょう。しかしこの子は、荒れ野に捨てられました。誰かが見つけて拾う可能性はゼロに等しい。しかもへその緒がついたまま、血まみれで、裸のまま放り投げられていたのです。荒れ野に放置されたとは、昼は照りつける日差しで脱水症状を起こし、夜は霜が降りるほどの寒さにごこえ、それを乗り越えられても獣の餌食になります。つまりこの子は、ただ捨てられ、無責任に放置されたというのではなく、確実に死ぬように捨てられたのであり、つまりは「死ね」と言われたに等しい扱いを受けたということでした。

しかしそのあまりの惨めさに、たまたま近くを通りすごそうとした人が見つけ、憐れに思っ
て拾います。その人が心からその子に語りかけたことは、「生きよ」ということでした。「死んでは駄目だ、生きなさい。生きなきゃ駄目だ。生きるんだ、がんばれ」と、そうしてその子をわが子として慈しみ、育てるのです。誰からも顧みられず、必要とされず、むしろまったく見捨てられ、不必要な人間として無視されて生きている、その一人一人が、神にとってはかけがえのない命でした。だから神は今でも、私たち一人一人に、「生きよ」と呼びかけ、また生きとし生けるものすべてに向かって「生きよ」と呼びかけておられるのです。そしてそれは悪人に対してもそうです。「わたしは生きている、

と主なる神は言われる。わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか」（エゼキエル33:11）。神は私たちに「生きよ」と呼びかけることで、私たちが神にとって最大関心事であり、かけがえのない存在として見なされ、大切にされていることを明らかにしてくださるのです。私たちは、神から「生きよ」と呼びかけられ、あなたは大切な人だ、生きてほしいと願い、思い、わたしへの深い関心の中で受け入れてくださり、愛してくださっているということです。ただ存在する、生存できるということではなくて、かけがえのないたった一人の人として見てくださり、そのような深い愛の思いで、「生きよ」と呼びかけてくださっているのです。人を真実に立たせ、「生きる」者としていくのは、愛です。その神の愛が、私たちに「生きよ」と呼びかけてきて、神と共に生きようと私たちを招き、神の愛の交わりの中に生きようと、私たちに呼びかけている、それが聖書です。そしてこの「生きよ」という切なる神の呼びかけが、具体化したのが主イエスなのでした。ですから私たちは、ご自分の命と引き換えにしても、私たちが生きようと十字架にかかってくださった方を、子どもたちに伝えます。そこにこそ、今でも私たちに「生きよ」と心揺さぶれる思いの中で呼びかけておられる主の熱い思いが、表されているからです。それを子どもたちに伝えていくこと、それが私たち教師の務めです。しかしそのためには、まず自分自身が、この神からの熱い愛の中で愛されて、そこで生かされ、立たされ、支えられて生きるということではないでしょうか。奉仕に疲れていくとき、そこにおいてこそ私たちに「生きよ」と呼びかけてこられる主の声を聞き取っていきたいと思います。

大阪教会の日曜学校の紹介

中嶋俊治（大阪教会長老）

1. 教会の全体的かつ簡潔な紹介

1956年大阪教会設立以降教会学校は続けられておりましたが、主な契約の子どもたちが成人しまして、この十数年間は、休眠状態でありました。

ところが、2008年に、教会学校に特に熱心な辻泰男兄が転籍してこられ2009年より新会堂建築計画案が出来、教会学校再開の気運が高まってきましたので、牧師夫妻と小会の賛同を得、辻兄・若い兄姉と話し合い、祈り続けた結果、2012年3月より再開できました。以後、徐々に出席者が増え平均出席者は、約8名になってきております。教会学校再開までの履歴は、次の通りです。

- ・2008年7月～2009年7月
礼拝後に契約の子ども（幼稚科）1～3名に聖書の話を中心として短時間開催（旧会堂にて）
- ・2010年3月～9月（仮集会所にて）
10月（新会堂に移転）～2011年10月
1回／月 土曜日にピース（絵本読み聞かせ会）開催
- ・2011年4月
教会学校再開

2. 教会学校の礼拝と分級の様子を紹介

大阪教会教会学校の状況は、契約の子は、礼拝後しか出席できないので、未信者の子どもたちを集める必要がありました。また教える教師も辻兄以外は初めての取り組みでした。

そこで、初めに入門編として、1回／月の土曜日に、絵本読み聞かせ会を開催し、大阪教会が子どものための会をしていることをアピールし、ピラをくばり、牧師夫人が近隣の子どもた

ちに直接声をかけてくださいました。その結果出席者は、2名より12名に増えました。



絵本読み聞かせ会

平行して、2011年4月より、日曜日に、教会学校を開催しました結果、平均4.5名の出席者が8名へ増えました。未信者の子どもたちに、神様の存在を知ってもらう事・教会に慣れてもらう事から始め、2年目より少し詳しく理解してもらうため、教材として「成長」を用いております。

現在の出席状況は、昔の大阪教会教会学校に出席していた母親の子どもたちと土曜日の絵本読み聞かせ会より来ている子どもたちが中核になりその友だちも加わり継続して出席しております。神様の恵みのもとに少しずつ生徒が与えられ感謝です。

◆現在の組織

校長：中嶋俊治 副校長：辻泰男・田村進

議長：大宮季三 書記：大宮証子

会計：大宮永子

教師：田村進、大宮証子、大宮永子、大宮季三、
田村いずみ、辻泰男（2012年4月転出）、

中嶋俊治

◆全体礼拝は礼拝堂で行っております。

朝の挨拶

前奏（奏楽者：大宮証子、田村いずみ）

子ども讃美歌

お祈り：主の祈り

お話（6人の教師にて順番制にて）

子ども讃美歌

後奏



礼拝風景

◆分級は、2つの教室を使って行っております。

2クラス：小学1年生以下・小学2年生以上

小学1年生以下：礼拝でのお話に関する絵本の塗り絵

小学2年生以上：礼拝でのお話に対する質問を皆で回答

分級の後、時間があれば、外でお遊びやトランプ遊びを時々しております。

◆教材は、絵本を使用してスタートしましたが、2012年9月より教材「成長」を用いて、そのワークブックも併用しております。

◆礼拝と分級の様子は、小学2年生が約7割のため、詳しい教理まで教えられませんが、イエス様の圧倒的な愛を教えられる様、怒る時は短く、ほめ・喜び合うときは、心よりする事により、子どもはどこかで感知している様です。また、礼拝を教室より礼拝堂へ移動した最初の時、「大人たちが本当に喜んで、神様の聖霊に満ちたこの場所で礼拝を守っている」と話した時から、静かに、礼拝を守る様になりました。

まだまだおしとやかな、おりこうさんの子どもたちではありませんが、元気でどちらかといえば明るい子どもたちです。

3. 年間行事や活動紹介

春：進級お祝い

毎年4月に生徒が進級するのでお祝いの文房具プレゼントを渡し、拍手

出席簿20回お祝い

プレゼントを渡し、皆で拍手

夏：スイカ割り大会

教会前庭で、お祈りをした後、2組に分かれて、目隠しをし細い棒でスイカ割り、その御教会内で、スイカを食べます。30～45名出席。



スイカ割り

秋：金魚すくい会

教会前庭で、お祈りをした後、2組に分かれて、約500匹の金魚をすくいます。その後、希望者に金魚をプレゼント。30～45名出席



金魚すくい

冬：クリスマス祝会

イエス生誕のお話・讃美歌・手品・ゲーム・サンタクロースよりのプレゼント。20～35名出席

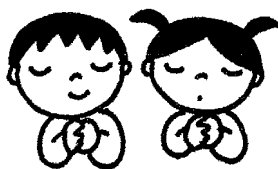


クリスマス祝会

4. 教師会の持ち方

- ・第3聖日の礼拝後に定期的開催
- ・終了時に子どもたちの様子の情報交換
- ・教会学校日報を作成し閲覧

今後は、礼拝での話の準備を深くしてゆく必要を痛感しております。中心の小学2年生が3年生になり、教理も少し解りだす年齢になるためです。



開拓伝道、教会形成と日曜学校

(2007年3月21日 西部中会・教会形成研究所主催 講演会)

相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)

今号から分級展開例を一例のみ掲載して発行させていただきます。編集奉仕者の奉仕量を減らすための止むを得ざる措置です。ご容赦くださいませ。今回は、少なくなった紙数を講演によってまかなうという形となりました。編集部は、何としても休刊（おそらくそれは、廃刊を意味することとなるでしょう）を避けなければとの思いで今号もお届け致しました。教師たちは、編集、校正、発送作業などの実務を、中会・大会におけるいくつもの委員会他を兼務しながら担っています。率直に申しますと教師たちの本務である担任教会・伝道所の奉仕を「ある程度」犠牲にせざるを得ないような中で、この出版活動は担われ、導かれてまいりました。もとよりそれは、私的な時間を削ることを優先してのことです。皆さまには、なお、お祈りを重ねていただきますよう、また、ぜひ、お手伝いをお申し出くださいますようお願いいたします。

本稿は、日本キリスト改革派教会西部中会・伝道と教会形成研究所の紀要「ミッション」第5号所収の論考に若干の字句修正を施したものです。転載をご快諾くださいました研究所に感謝致します。本講演は、2007年3月21日西部中会、教会形成研究所主催の講演会の記録です。6年も前のものを、何故、今……と思われるかもしれません。しかし、ここに、弊誌発行の原点が語られていると考えたからです。さらに、私ども自身、この初志を再認識すること、これを貫き、いっそう深めたいと願ってのことです。どうぞ、教師会でお読みくださり、話し合いの

種にご利用下されば、幸いです。そして、弊誌継続発行の道が開かれますようにお祈り下さい。

第一聖書朗読

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

(マルコによる福音書10章13節～16節)

第二聖書朗読

「あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言っておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている。既に、刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。そこで、『一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる』ということわざのとおりになる。あなたがたが自分では労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした。他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている」。

(ヨハネによる福音書4章35～38節)

まえおき

西部中会の「伝道と教会形成研究所」のお招きを受け、皆様にお話させていただく機会を与えられましたことを感謝いたします。ことさらに申し上げることでありませんが、私は、普通の牧師です。学者ではないということです。西部中会には、神学校がありますから、神学教師や、講師をしておられる先生もたくさんおられます。そのような先生方は、学者として専門領域においての研究を深めておられることと思いますし、それが神学校のみならず日本キリスト改革派教会にとって大いに期待されていることと思います。ただし、すべての牧師は同時に一人の神学者でもなければ、自分の務めを正しく担うことはできないと信じています。

神学はひとつの学問ですから、批判する機能を担います。つまり、自分がそこでしている働き（教会奉仕、神奉仕）が果たして御言葉に即し、教理に即しているのかいないのか。さらには、この時代、また伝道する場所に即しているのかいないのか等もきちんと検討しなければなりません。また自分の実践の實りを客観的に、正しく判定することも大切です。その意味では、牧師は神学校の課程をきちんと卒えて、筆記試験に合格すれば、それでただちに牧師になれるというわけにはまいりません。多くの教団では、なお数年に渡っての「実践」が問われます。

今回お招きを受けましたが、皆様に、新しい知見について講義することはできません。ただ自分自身がしてきたこと、その実践を分かち合わせていただいただけです。そして、皆様からのご批判やご教示を受けながら、皆さまとよりよき実践を共に問うことができれば、共にそれを目指すことができると考えております。

(1)「教案誌」発行の経緯、志と理由

①「教案誌」発行の経緯と志

2001年3月に、中部中会教育委員会より創刊した、季刊「日曜学校教案誌」（2004年第13号

より「教会学校教案誌」に改称）は、既に、第25号まで刊行することができました。実に、7年目を迎えています。おそらく、私だけではなく発行の責任を担った者たち全員は、ここまで継続できると思わなかったかと思います。まさに、神の導きと恵み、摂理であることを思わざるを得ません。ある歴史にくわしい先輩からも、このような機関誌が、6年間継続発行されたことも、おそらく日本キリスト改革派教会の歴史のなかでなかったことではないかと、ご指摘を受けました。

しかし、日本キリスト改革派教会のなかで、「教会学校教案誌」の存在そのものより、むしろ、「教案誌」の創刊の経緯の方が、珍しいのではないかと思います。日本キリスト改革派教会は、長老主義政治によって統治されます。したがって、その計画や事業は、管轄する委員会によってなされます。当然のことです。ところが、「教会学校教案誌」は、その創刊から現在まで、言わば、「有志」によって担われてまいりました。もとより、弊誌は、中部中会教育委員会が発行の主体となっております。この監督下にあるわけです。

中部中会教育委員会は、毎年、11月23日に、日曜学校教師研修会を開催いたします。これが、教育委員会の主要な事業とされてまいりました。私どもが、日本キリスト改革派教会に加入したその年の研修会で、日曜学校教師方から、このような問いと不満の声を聞きました。「どうして改革派教会には、自分たちの教案誌がないのでしょうか……」。実は、わたしも加入前から、同じような疑問を抱いておりました。およそ責任ある教団（教派）形成を志すなら、教会立の神学校を整えることは不可欠であると思います。わたしは、それと同様に、自分たちの日曜学校のために、教案誌あるいは教案カリキュラムを整備し、発行することもまた、それに劣らず重要ではないかという前提がありました。

しかもその翌年の2000年の教師研修会にも、同じような問いと不満が提出されたのです。その時には、わたしも委員のひとりでした。わたしは、そのすぐ後に開催された委員会で、「真剣に受け止め、できることを何かすべきではないか」と意見しました。すると委員会は、「それなら、あなたが検討したらよいでしょう」と決議されました。そのときの委員会は、私に検討させてみて、あらためて無理であることを分からせようと考えられたのかもしれませんが。

しかし、わたし自身は大まじめに考えたのです。すぐに、大会の教育委員会の委員に、お尋ねし、また意見させていただきました。「大会から『教案誌』を発行すべきではありませんか」。すると、こう仰いました。「その通りですが、現実には、無理です。発行の予定もありません」。そこで、遂に、わたしは覚悟を決めました。教育委員会の委員ではない、若い教師方にこの案を持ち出したのです。最初の会議は、一人の教師と、名古屋駅前の喫茶店で、ほんの小さなテーブルの上で、資料を出しながら、相談しました。もしもそのとき、彼が、「わたしはできない」と仰ったら、この「教会学校教案誌」発行もなかったかもしれません。

その次に、わたしは当時も今も、パソコンを上手に使いこなせませんが、すばらしい能力をもった若い教師が赴任していました。そこで、彼に、実務を担っていただけるように相談したのです。そして、その彼も積極的に、加わってくださいました。もしも、彼が加わってくれなければ、少なくともこのような形態の「教会学校教案誌」の発行は、ありえなかったはずです。さらに、有志の信徒の方々の協力をも仰ぎました。彼らが、分級展開例を執筆してくださったのです。彼らは、強いられて仕方なくであったのかどうか分かりませんが、積極的に協力してくださったのです。このようにして、創刊号を刊行しました。最初の編集会議で、教案カリキュラムを「カテキズム」に基づくことを定め

ました。その骨格として、「子どもカテキズム」も付録として刊行しました。こちらも、すでに2000部余りが刊行されています。

創刊号発行を背景に、教育委員会は、中部中会の第一回定期会で、これを自らの事業として刊行し、中会財務からの援助費を支出していただくよう提案しました。しかし、そのときの会議のことは、今でも、忘れがたいことです。急速、懇談会に切り替わり、激しい議論の末、大多数可決で受け入れられたのでした。今から思えば、根回しなしに提案したわけで、議場の困惑は当然でもあります。いずれにしろ、その船出は、「嵐の船出」となりました。しかも、そのような厳しい状況は、なお数年続いたのです。

しかし、今では、そうではありません。当初は事業会計として40万円を支援していただきました。最初の4年間は、奉仕者はまったくの手弁当でした。会議の費用も、交通費も、食事代もいわんや執筆料も、すべて手弁当です。これが、有志で立ち上げるといふことの現実でもあります。しかし、使命感がありましたから、皆さんの理解とご協力も得られました。今では、執筆者には、1ページであろうが、何十ページであろうが、1000円の図書カードを差し上げるまでになりました。さらには、当初の中会の援助は、昨年までは、20万円まで減額しました。今年の定期会では、ついに、10万円の減額の提案がなされます。満場一致可決されると思います。現在は、改革派教会内で、58教会、他教派が5教会のあわせて63教会で採用されています。また、個人で購読されている方も6名おられ、発行部数は305部となっています。売上げによって支えられるという健全な形に近づいています。しかしまた、何より「自由」献金で支援してくださることも発行の大きな支えとなっております。

わたしは、後でも訴えさせていただきたいのですが、私どもの拙い、貧しい奉仕がなお継続できたのは、やはり、有志の力が核となってい

るということではないかと思えます。このような有志によって立ち上げられる教會的事業、企ても、制度的教會においてなおその余地があり、必要なことではないでしょうか。官僚的と言ったら語弊がありますが、いつもの仕事をこなしていれば、よいという委員会のあり方を、下から揺さぶることになるかと思えます。要するに、どうしても教會のために必要である。どうしても今の伝道、教會形成のあり方では、前進できないと考えるとき、新しい運動、新しい企てを興すべきではないでしょうか。そのような人、有志が立ち上がることが必要ではないでしょうか。

②「教会学校教案誌・カリキュラム」は日本キリスト改革派教會の宿願

今、発行の志を申しましたが、その理由もあわせて述べました。つまり、教派・教団形成には、教會立の神学校を整えることが不可欠であって、教會教育のためにも、自らのアイデンティティを鮮明にする教案やカリキュラムを整備し、発行すること重要であるということです。実は、大会も、1956年～61年の間、大会教育委員会は、「教育観確立委員会」と称して組織されていました。また、66年には、「教会学校カリキュラム作成に関する建議案」が出されました。その理由として、「改革派信仰に基づくカリキュラムの作成は、我が教會にとって、又、教會学校の現場にとって、重大かつ強い要望のある課題である」と説明されました。つまり、「教会学校教案誌」の発行は、日本キリスト改革派教會のまさに宿願であるわけです。そのために奉仕された先輩達の労苦を十分に認めることができます。

しかし、わたし自身が見聞きした現実には、日曜学校教師たちに他教派（団体）の教案を与えていた教會も少なくなかったのです。しかも、そこで何よりも疑問に思ったことは、牧師たちが、その教案を、自ら指導することなく、言わ

ばほとんどそのまま教師会に任せている教會も少なくなかったという現実でした。これらを踏まえて、契約の子はもとより日曜学校の教師自身のためにも、「自分たちの教會学校教案誌」が必要であると判断したのです。

③日曜学校（青少年）伝道の活性化の一助となるために

日本の多くの教會で、1980年頃から、教勢の停滞減少が指摘されています。何よりも、日曜学校の衰退が指摘されます。資料として配りました日本キリスト改革派教會の教勢の統計もまた、例外ではありません。特に、日曜学校、青少年伝道においてかんばしい成果を見ることができていないのが、私どもではないかと思われされます。日曜学校が衰退し、あるいは、開店休業状態とか、日曜学校自体を止めてしまったというところもあるとも伺います。しかし、この言わば、崩壊現象をただ嘆くだけではならないと思えます。それを、克服する方策と何よりも実践を指し示すことが求められていると考えました。それが、教案誌の発行の志なのです。「教案誌」を通して、日曜学校の営みをあらためて神学的に検討しなおしたい、そして、新しい思いをもって熱心に実践に取り組みたい、また、そのような奉仕する教師たちの思いを分かち合う「場」を設けたいとも考えたのです。

蛇足ですが、わたしの日本キリスト改革派教會加入の志とは、私どもの名古屋岩の上传道所の開拓伝道が創立宣言への応答となるようにというものでした。

しかし、そこで私が常に、意識していることがあります。すでに7年目に入るということは、この働きもある意味で、固定化する誘惑があります。あるいは自己満足という誘惑もあります。もしも、「他の教団、教會のように、自分たちにも自前の教案誌がある」ということだけなら、何の意味もありません。私が、私どもがこだわりたいし、こだわらなければならないのは、実

際に日本キリスト改革派教会、中部中会、そして各個教会の日曜学校が、盛んになっているかどうかです。実践において実らなければならないのです。

ただし、この「盛ん」であるという表現は注意すべきでしょう。出席する子どもたちが、増えたということは、明らかに、決定的な「実り」「結実」と評価してよいと思います。しかし、盛んになるとは、それだけを意味するものではありません。たとい、子どもたちが増えていなくても、日曜学校の教師たち、奉仕者たち一人一人が、いえ、教会全体でこの業、この務めがどれほど重要であるかを認識して、これに取り組むことができれば、それこそまさに日曜学校が盛んになるということになるのです。

つまり、私どもは、単に「教会学校教案誌」発行をもって、目的の実現とは考えてはいませんし、そう考えてはならないと、自分自身に言い聞かせています。どうかして日本キリスト改革派教会の、ひいては、日本の子どもたちに主イエス・キリストの福音を広く伝え、証し、子どもたちを主イエスにお導きして、父なる神へと捧げる働きが進展し拡大することが私どもの祈りです。そのために、それぞれが遣わされたその奉仕の現場で、生き生きと実践に生きていただくこと、そのような教師方を励ますことができたら、この奉仕に携わるすべての奉仕者の望外の喜びとなるのです。

④全信徒のための教育機関誌を目指して……

創刊号において、いささか恥ずかしいのですが、この「教案誌」が、日曜学校の教師だけではなく、会員の教育のためになるのではないかと、そうなりたいと書きました。そのために4年目からは、誌名を「日曜学校」から、「教会学校教案誌」へと変更しました。それは、これまでの幼稚科、小学科下級、中級、上級、中学科の各展開例に「成人科」を付け加えたからです。昨年は、大会機構改革委員会から教育委員会に、

「大会的教育機関誌発行」の可否を検討させる要請を受け、大会教育委員会は、これを積極的に支持する答申をいたしました。そして今、発行準備の委員会が立ち上げられています。これは私ども自身も心から願っていたことでした。もしその機関誌が発行されたときには、私どものこの「教案誌」は、もう一度、日曜学校教案誌に戻さなければならないと考えております。

おそらく多くの日曜学校の教師たちが同感してくださるかと思いますが、日曜学校教師に召され、これを担うということは、ひとりのキリスト者の成長を考えると、実に大きな祝福となるはずで、なぜなら、教えるということは、本人が、子どもたちの前にキリスト者としての全存在をさらすことになるからです。ですから、キリスト者として、そして人間としてもそのすべての面での成長、成熟が求められてまいります。そして、神はそのように導いてくださると信じます。牧師にとっても、日曜学校教師になっていただくことは、会員の訓練という面から見ても、とても感謝です。なぜなら、教える人は、先ず自ら学ぶ人でなければ、務まらないからです。私どもの教会でも、洗礼を受けて10年ほど経って、初めて、教師となられた方がおられます。これまでの成長の歩みに鑑み、やはり、この奉仕を担われたことはとてもよかったと思います。

(2)私どもの「日曜学校像」を再検討する必要性

そもそも日曜学校運動は、ロバート・レイクスという18世紀イギリスで活躍した一人の信徒の言わば慈善運動として始められたものです。そこから、一気に世界的な広がりをみせました。教会の働きとしてではなく、キリスト者有志の働き、しかも信徒の働きでした。それゆえ超教派運動として展開されました。しかも、時まさに、リバイバル運動がさかんな時代でした。日曜学校運動とは、まさに、このリバイバル運動の結実としての側面を持っているので

す。つまり、子どもたちの魂への「救霊運動」として展開されました。そこでは、子どもたちに信仰の決断、決心を促し、求めたのです。回心の経験、救いの経験を重んじる形の伝道方法なのです。そのようにして、洗礼へ、信仰告白へと導くわけです。インターネットで調べてみますと、日本に、「児童福音伝道協会」という団体があります。アメリカで創設されたそうです。そもそもこの協会の成り立ちは創立者が、「子どもも救われる」と言う確信、つまり、子どもも回心の経験、新生の経験が与えられるという信仰を抱いたことによって、立ち上げられたとのこと。歴史的に見れば、このようないわゆる、リバイバル運動、福音派キリスト教の影響によって日曜学校は拡大したわけです。またそれは、宗教教育、徳育教育を施す場として、用いられてまいります。

実は、これらの事々の問題点を、最新号の第25号に、東部中会で行った講演記録の抜粋を掲載しましたので、ご覧くださいれば感謝です。実に、日本の教会の歴史は、この日曜学校の歴史とまったく重なるものです。日本伝道は、その最初から、日曜学校伝道がその突破口として用いられたのです。これもまた後で触れますが、わたしは、今日も、なお同じであると考えております。ただし、それをどのように担うべきなのかという問題こそ、真剣に問わなければならないはずですよ。

日本基督教会の指導者として名高い植村正久牧師が、このような言葉を残しています。「日曜学校を、宗教教育及び徳育をしるのに有力な機関たらしめなば、国家の利益、教会の勢力、キリスト教の声価いかにたかめらるべきか」要するに、こういうことです。「教会が日曜学校に力を入れて、地域の子どもたちに宗教や倫理、道徳を教育すれば、国家にとってもよい国民を育てることになり、ひいては教会の勢力はいよいよ拡大し、教会の評価はいよいよ高くなるはずである。だから、日曜学校を大切にしよう」。

残念ながら、ここでは詳しく語る暇がありません。結論だけ申しますと、このような、日曜学校像では、わたしどもが目指す教会形成を担うことは不可能だということです。

そう考えるからこそ、「教会学校教案誌」の発行があるわけです。つまり、日本キリスト改革派教会として、きちんと「日曜学校」をとらえること、つまり私どもの教会論、救済論によって立って、その実践を担うこと、実践を問うことが大切であると信じるのです。「教会学校教案誌」は、第3年目からですが、年度の初めの号には必ず「編集方針、基本方針」を掲載しています。(第13号、第17号、21号、25号)そこに、私どもの主張、確信が込められているわけです。言わば、私どもの目指すべき「教会(日曜)学校像」が記されています。初めて、執筆してくださる先生や日曜学校教師の方々には、執筆要項と共に必ず、この「基本方針」をお送りしています。この方針を理解し、共鳴してくださることを期待してのことです。そこでは、六つのことが掲げられています。

1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校
2. 分級中心より礼拝式中心
3. 子ども礼拝式における説教の重要性
—日曜学校の目標—
4. 説教の完成としての牧会
—分級の目標—
5. 教会形成の一環としての日曜学校
—教師会の形成と教師の訓練—
6. 伝道する日曜学校像

こちらも、第25号に記していますので、お読みくださればありがたく思います。今回は、時間の関係で、5の「教師会形成」と6の「伝道する日曜学校」についてお話しさせていただきます。しかし何より本質的なことは、1から4までのことであると思います。願わくは、大会的に、議論、批判、検討が加えられ、いよいよ私ども日本キリスト改革派教会にふさわしい日曜学校像、その実践のあり方が整えられるこ

とを心から期待いたしております。

(3) 教師会形成（教師の訓練）の課題と牧師の責任

今回のお話の題として、「開拓伝道、教会形成と日曜学校」とさせていただきます。「教会形成研究所」における講演依頼ということで、正直に申しますと、とっさに考え付いた主題でした。しかし、この題は、もともと編集基本方針の5に数えていたものです。「教会形成の一環としての日曜学校」です。それはどういう意味なのかと申しますと、先ほども触れましたが、日曜学校を担うのは、信徒である教師方です。つまり、教師を訓練することは、即、信徒を訓練することとなるのです。

あくまでも仮にということですが、もしも日曜学校が、言わば、子ども好きの会員が、ただ単に自分のやりたい奉仕だからこれを担うということであれば、これは、教會的な実りを結ぶことが困難になります。かつて、このようなことを、悪い冗談ではないかと思って、書物であったか、雑誌であったか忘れてしまいましたが読んだことがあります。ある教会のある日曜学校の先生方は、平気で、主日礼拝式に遅れて出席するというのです。子どもたちの出欠や、後片付け、分級の後でも、子どもたちとの交わりに熱心で、主日礼拝式の時間に間に合わなくなるというのです。さらには、こういう紹介までありました。日曜学校の奉仕が終わると、礼拝式に出席もしないで、さっさと帰ってしまう。もとより、これは、日本キリスト改革派教会の実例ではありません。しかし、日曜学校が、もしも、牧師の指導、小会の監督がきちんとなされないのであれば、そのようなことも起こりえるだろうということは理解できます。

教会のなかで、しばしば混乱や問題が起こるのは、キリスト者の言わば個人主義にあるように思います。私どもの伝道所は、その開拓伝道の初期に、徹底して個人的信仰ではなく、共同

体的信仰ということを強調しました。聖書の信仰は、神の民の信仰であって、徹底して教会形成へと促すものである、つまり、教会共同体を形成する信仰なのであると、繰り返し学び、指導しました。

たとえば、こういう言葉を言い交わしました。「弱さはお互いに徹底して受け入れよう、しかし、わがままには断固、対決する」。そこで、「わがまま」とは、「自己絶対化」のことです。「自分の意見をゆずらない」こと、「弱さゆえに犯した罪を、悔い改めず、開き直すこと」などです。弱さは、これは、主イエスに命じられたように、何度でも赦し合わなければなりません。しかし、このわがままだ、教会は決して放置してはならないのです。なぜならそれは、キリストの主権を犯すこと、キリストのご支配を不明瞭にするからです。ここに、真の教会の形成の厳しさと困難さがあります。

これは、すべての教会の奉仕にも共通することですが、日曜学校の働きが正しく実るために、極めて重要なのは、チームプレーです。例えば、小会であっても、伝道所委員会であっても同じでありましょう。開拓伝道では、それこそ、先ず夫婦の一致がなければ、実らないと思います。最初の日曜学校は、牧師とその婦人によってなされるのが通例だと思います。その夫婦の間に主イエス・キリストの臨在があり、この交わりのなかに、子どもたちを招き入れるようなイメージ、それが、開拓伝道の日曜学校であると思います。そして、それが徐々に広がって行き、教師方の交わりのなかに、子どもたちを招き入れるのです。

確かに日曜学校の分級において、教師と子どもとの一対一の関係が、膝をつき合わせて教理を教え、共に祈る関係、向き合う人格関係がどれほど重要で、また効果的であるかは、ほとんどの教師方は経験して、認識されていると思います。

しかし、わたしはそれと共に、あるいはそれ

以上に本質的で、大切なこととなるのは、教師たちの交わりではないかと思うのです。それが、まさに福音的教育、学校教育とは決定的に異なるものではないかと思います。例えば、一般の学校教育においても、担任教師自身がその教師同士とよい関係になれば、おそらくよい実を結ぶことは難しいのではないかと想像します。そこに、管理職の大切な責任もあるのではないかと思います。

そのことはむしろ教会でこそだと思えます。もしも、日曜学校教師同士の交わりの面で問題があり、一致がなければどうでしょうか。わたしは、子どもたちに福音を正しく豊かに提示することは困難となるのではないかと思います。まさにそのことから、私どもの「教会学校教案誌」が第一に主張した「子どもの礼拝共同体としての日曜学校」という理念や、「分級中心より礼拝式中心」という考えが出てくるわけです。教師全員が心を一つに合わせ、よい礼拝式をつくろうと努力すること、あるいは、当日の説教奉仕者を支えようとするのが求められるのです。教師の方が、むしろ子どもたちより真剣に説教を祈りの心をもって聴くことが求められているのです。

そこで、当然その要になるのは、教師たちの教師である牧師です。その指導力です。牧師が、教師たちを指導することが求められます。また何より、自ら子どもたちに御言葉を説教することが、その職責上、回避できないのです。日曜学校に責任、関心がない牧師は、ありえないとすら言えましょう。しかしその点でも、長く日曜学校教師の奉仕をされ、校長をしておられる方々から、このような訴えと叱責を受けたことがあります。「自分は、教師としての訓練をきちんと施されたことはありません。これまで、見よう見まねでしてきただけです。」これは、私自身、一人の教師として、実に耳が痛い言葉でした。

横道にそれますが、特に、私どものような開

拓伝道に従事する伝道所や伝道の困難さを覚える教会に仕える伝道者であれば、なおさら日曜学校に積極的に関わるべきだと思います。わたしは、あらためて、伝道者である牧師の責任と務めを再確認したいと思います。日曜学校教師会に積極的にかかわり、教師方を訓練し、率先して模範的な姿をして見せることが、なお開拓期にある私どもの日本伝道、あるいは崩壊しかかっている日曜学校伝道にとって、避け得ないことであると信じます。神学校においては、そのように伝道をしてみせる伝道者、信徒を訓練しうる教師を育てることは、まさに、神学校の基本中の基本の務めであると考えます。

第17号から20号までの一年間、「日曜学校教師会のために」という連載をいたしました。毎月の教師会のたびに約30分余りで読んでいただけるシリーズです。これも赤面の至りのまことに拙いものですが、日曜学校が正しく実るために決定的に重要なのは、教師会の充実、研鑽であると主張しているわたしどもですから、わたしが執筆させていただきました。こちらもご参考にしていただき、ご批判を仰げればと思います。

(4)「日曜学校は種まき伝道」なのか

「教師会のために」という学びの連載のなかで、私は、「日曜学校は種まき伝道にあらず」と主張し、問題提起しました。実は、これまで何度も、牧師や先輩方から、このような言葉を聞いてまいりました。私自身も、かつてこのように考えて、自らを慰めていました。「日曜学校の伝道は種まきです。子どもたちが、教会から離れても、いつか、大人になって、イエスさまを信じるようになる人も出ます。日曜学校は、自分たちの知らないところで、実を結ぶことを期待し、信じて行うのです。」という考えです。

確かにこの発言は、現実を言い表しています。何より、私どもの教会で洗礼を施された方々も、昔、日曜学校に行ったことがある、キリスト教

主義の学校を卒業したのだと仰る方は、少なくともありません。ですから、すぐ目の前で、私どもが期待するような結果を見ることができなくても、忍耐の限りを尽くし、御言葉の約束を信じて、こつこつと日曜日の朝に備えるのです。神のご計画を信じて、涙を流しながら御言葉の種をまくことは、私どもの伝道の基本的な姿勢となると思います。

ただし、わたしは、だからこそこの「種まき」という言葉をきちんと考えてみなければならないと思っています。本当にそうなのかと、「疑い」を抱くことも必要だと思うのです。わたし自身の「勘ぐり」のせいかもしれませんが、何か最初から伝道が豊かに実ることを諦めているという不信仰を見てしまうのです。いへ、私が何よりも根本から問わなければならないと考えるのは、そこに日曜学校伝道、信仰教育そのものの本質の理解を妨げる危険性を見るからです。

語弊があるかもしれませんが、つまり、こういうことです。「浅い伝道」、「浅い牧会」でかまわない、仕方がないということです。浅い伝道とか浅い牧会などという言葉は、聞いたことがありません。わたしの造語です。しかし、「種まき伝道」という説明の中に、どこか、このようなイメージを持ってしまうのです。

たとえば、わたしは、かつてこのような言葉を聞かされた事があります。「まだ右左も分からない子どもたちに宗教教育を施すのは、危険である。子どもたちは純粋だから、すぐに信じてしまう。そのように自分で判断できないときから、宗教的な判断、価値基準を教え込むのは、むしろ、子どもの人格を損なう。」さらに、子どもと一緒に洗礼を受けることを希望される方の未信者の配偶者からこのような発言も聞かされたことがあります。「何も分からない子どもに、親の勝手に、キリスト教の洗礼を施すのは、子どもの自由や将来を拘束する。それは、親の横暴ではないのか。」子どもの教育や将来につ

いて真剣に考える方であればあるほど、「伴侶が洗礼を受けることは仕方がないが、自分の子どもにも、洗礼を受けさせることまでは容認できない」と仰る、そのお気持ち、そのお考えはよく分かります。丁寧に説得して、最後は、無理やりに洗礼を施すのではなく、時を待つしかないと思います。確かに、未信者の方々のこのような批判であれば、仕方がないことです。福音の尊さ、重さを知らないからです。しかし問題は、キリスト者自身の中にもなお、そのような考えを徹底的に克服しえない課題があるのではないかということです。

ごく基本的なことですが、私どもは、主イエスが、「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」との御言葉を知っております。日曜学校教師方であれば、まさに自分自身への召命の御言葉としても受け入れるべき御言葉の一つであろうかと思えます。しかし、ここで主イエスが、お命じになられたその御心をどれほど、私どもはわきまえているのでしょうか。骨の髄まで、受け止めているのでしょうか。

ここには二つのことが明らかに示されているかと思えます。一つは、主イエス御自身が子どもたちを求めておられるということです。妨げる弟子たちを叱責するほどまでに、子どもたちをご自身の恵み、福音にあずからせてあげたいという強烈なご意志、愛です。もう一つは、裏返しのことですが、大人と同じように子どもにも、主イエスの恵み、神の愛が、生きる上で不可欠であるということです。子どもにも大人にも、主イエスの恵みが必要なのです。主イエスは、私どもを通して、彼らにその恵みを与えようと決めておられるのです。

私どもの青少年伝道の基本中の基本は、主イエスのこの命令に生き続け、生き抜くことです。「子どもたちが来るのを妨げてはならない」と弟子たちに、憤って命じられた主の御心を深く

移植していただくことです。とてもおかしな想像なのですが、主イエス御自身は、「子どもの頃に少しでもわたしに触れてくれればそれでよしとしておこう」などとお考えになられるのでしょうか。ありえないことです。主イエスは、愛する子どもたちが、御自身の教会から離れて行くことを、どれほど深く悲しみ、痛んでおられるのでしょうか。神の愛を受けているキリスト者は、主のそのような御心を思うことができるだろうと思います。

日曜学校伝道の再興、それは、単純に申しますと、子どもたちを主イエス・キリストに導かなければならないという伝道の愛が燃え上がることです。本当にそうです。そして、この愛のなかで子どもを見るとき、それは、「深さ」の次元へと眼が開かれて行くこととなるのではないのでしょうか。子どもたちの魂の深さの発見です。種をまいて、後は、神さまにおゆだねし、「放っておく」ことはできなくなるのではないのでしょうか。そのときの子どもたちに、深く届くように神の愛を届けること、つまり、魂との対話、一対一で子どもたちと向きあって行こうとする「牧会」なしの日曜学校伝道、あるいは教育は、福音の主に対して、申し訳ないことのように思います。大人には霊的な次元でかわるけれど、子どもたちにはそれは分からないし、必要もないから何も霊的な牧会は必要ない。何よりも、自分たちにはできないなどと、主張するなら、それは、主イエスに対してはもとより、子どもたちにも申し訳ないことです。「一人の重さ」は、福音を知っているキリスト者であればこそ知らされます。自分の重さを、キリストの重さによって知らされるからです。そのようにしてまた、まさに子どもたちを見ること。主イエスの御眼で、私どももまた一人の子どもを見ることです。その目がどんどん開かれることが、神からの愛、伝道の愛のなかでなされてゆくと信じます。

先ほども触れました「児童福音伝道協会」は、

「子どもでも救われる」と主張されます。その通りでしょう。しかし、それは、いわゆる幼児や児童に、鮮やかな回心経験を与えることをめざす限り、私どもの実践とは、どうしても折り合わないと思います。ただし彼らが、「子どもにも福音が必要である」と深く確信してそれを実践しておられるなら、それについては、まったく私どもと同じではないのでしょうか。子ども「にも」というのは、語弊があると思います。子どもには子どものための「福音」が必要だと思えます。子どもだからこそ、福音が必要であるということです。

私どもは、幼児洗礼を、神から与えられた祝福であり、キリスト者の親の義務でもあると理解しております。ですから、日本キリスト改革派教会は、キリスト者の子どもたちを、「契約の子」と呼ぶ伝統を継承してまいりました。それだけに、教会と親は、契約の子に全力を注いで教理を教えます。彼らと共に礼拝し、彼女らと共に祈ります。神がどれほどの愛と祝福をもって、子どもたちに向かいあってくださるかを確信しているからです。

私が仕える名古屋岩の上伝道所は、日曜学校に地域の子らを迎え入れようと常に祈り求めています。そしてそれだけにと、申しましようか、契約の子だけのための集会の重要性も考えています。第五主日に、「カテキッズ」という集会を開催いたします。そこで牧師は、契約の子と一対一で祈るときを設けるのです。彼らの霊的状态を知るためです。これは、私自身のためにも必要なことなのです。

「夜回り先生」という名称で、夜の世界で生きようとする子どもたちを、まさに体をはって、昼の世界に取り戻そうと懸命に働いておられる水谷修という方がおられます。この先生が、しばしば仰るのですが、今、おとなの社会は、競争社会で、その人間関係はいよいよぎすぎすしている。それに疲れ、強いストレスを与えられた父親が家庭で、母親にぶつける。母親は、

子どもにぶつける、その悪循環が子どもたちを引き籠もりや、夜の世界へと押しやるのだというのです。つまり、子どもたちは、現代社会の犠牲者であるというのです。彼らを、とにかく、抱きしめてやるのが大切だと仰います。

わたしは、この夜回り先生という方は、子ども自身の叫びを聴き取っている方だと思います。いへ、子ども自身も内側にかき消してしまって、叫べずにいるその叫びを叫ばせてあげられる方だと思います。「わたしを愛して欲しい、わたしに関心を注いで欲しい、わたしの本当の友達になってほしい」そのような青少年の「心の叫び」を聴きとって、そして、彼らを愛し、関心を注ぎ、彼らの隣人となっているのです。だから、彼らの心に深く届くことができるのだと思います。

わたしは、日曜学校、青少年伝道のあり方を、この一人の未信者の方からも学べると思います。わたし自身は、水谷先生のように夜の街を出歩いたことはありません。しかし、地域に住む子どもたちに、少なくとも日曜日の朝に、教会の門戸がどれだけ広く開いているのかだけは、連絡して上げなければならないし、したいと願っています。彼らに、生ける創造者なる神がおられることを告げたいのです。その神が、子どもたちを愛し、愛の中へ入ってくるようにと招いておられることだけは、必ず、伝えてあげなければならないと考えているのです。私どももまた、子どもたちを本当に抱きしめてあげ、私どもを通して、いつまでも抱きしめ続ける神の愛を紹介したいのです。願わくは、私どもの存在が、主キリストを映し出すもの、つまり、キリストの証人になりたいのです。子どもたちの牧者、牧師になりたいのです。牧会してあげたいのです。日曜学校の教師は、子どもたちのための小さな牧師のような存在です。わたしどもはそうなれるし、ならねばならないのです。

あの水谷先生にもできないことがあります。キリスト者にしかできないことがあります。そ

れは、神の叫びを聴き取ることです。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである」との御声を聴き取ることです。もう一つは、子ども自身も気づいていないこと、わからないことですが、ただ人間の愛や人間同士の心の交流だけではなく、神の愛で満たされたいという「魂の叫び」です。この魂の叫びを聞き取れるのは、キリスト者しかいないのです。

そのためには、ときに、公園に出てゆくことも必要でしょう。そのような方が、私どもの中から起こされたらどんなにすばらしいことでしょうか。教師自ら外に出ること、子どもたちに出向いて行くことはとても有益です。私どもの日曜学校は、車の送迎をしています。送迎の奉仕は大変ですが、しかし、車で迎えに来てくれる、それがすでに地域の子らには、とても嬉しいことなのだと思うのです。そこに教師たちの思いを感じ取ってくれるのではないかと思います。

このように申し上げると何か、私自身がこれらをよく実践しているのではないかと考えてしまわれるかもしれません。そうではありません。今、申し上げたことを遅まきながら気づかされているだけです。今、そこから始めている、これが正直な姿です。

ヨハネによる福音書第4章35節以下に、このような主イエスと弟子たちとの対話があるされています。「あなたがたは、『刈り入れはまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言うておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている」。この主の御言葉は、実際に目の前に広がる畑そのものを見ながら語られたのではないかと想像できます。もちろんそれは、霊的な畑、神の御目に映る人間世界のこと、伝道の畑についてです。そもそも、これは、井戸の辺で、主イエスに出会って頂いたサマリアの女性、神から遠く離れていた女性の救いの物語のなかで、その後半で語られ

た御言葉であります。今直ちに福音を語るべき大勢の人々がおられ、今直ちに、それを刈り入れることもできるのです。主イエスが来て下さり、十字架についてくださり、復活し、今や天の父の隣に座しておられるからです。もう、刈り入れるばかりなのです。

「収穫までまだ四ヶ月ある」。実は、わたしもかつてこう主張する罪を犯していました。恥ずかしいことですが、単立で、自給開拓伝道を開始した当初、わたしは、子どもを最初から導く暇はないと考えていました。子どもを相手にするのではなく、自立した成人を相手にする方が、教会の経済的な自立への近道であるという、まさにこの世的な発想をしていました。ですから、子どもたちへの伝道を後回しにしていたのです。つまり、彼らを収穫するには、自分たちには、まだ早いということです。

また、「まだ四ヶ月ある」という主張は、「自分たちの身の丈にあった伝道をしよう」ということでもありましょう。つまり、「自分達は小さな教会、会員も、財力も、豊かではない。だから、大きなことはできない。日曜学校の先生もいないし、子どももいない。だから、日曜学校は休会とする」と考えていたのです。いったい、教会とは、自分たちに十分な資金、賜物、能力、人材が備わって後、おもむろに腰を上げて、主の業を担うものなののでしょうか。違います。この主の御言葉は、教会に自分たちの内側にはまだその十分な能力がないと判断して、教会に託されたその務めを怠ることを許してはおられないのだと思います。

これは、余談ですが、伝道のこともそうですが、教会の地域社会へのディアコニアの面でも同じだと思います。昨年、実は、私どもの伝道所は、その面で悔い改め、「ディアコニア元年」と称し、教会のディアコニアについての学びを始めました。大変すばらしい成長の兆しを見えています。これも、自分たちのような小さな伝道所は、人材も、財力もないから、何もできない

と発想するのではなく、小さいからできることもあると考えるのです。私どもの伝道所は、小さい教会にできることとは何かを考え始めています。

(5)日曜学校伝道の主体、担い手

私どもの日曜学校が盛んになるために、何よりも大切で、どの日曜学校にもできるし、目指すべきことは、何でしょうか。子どもたちに魅力ある楽しい日曜学校、そのような礼拝式へと整えることでしょう。そこで改めて問うべきことは、子どもたちにとっての「魅力」とは何かです。楽しさとは何かです。言うまでもないことです、その楽しさや魅力とは、この世的なおもしろさ、魅力ではありません。私どもが、与えることができるし、与えるべきなのは、結局、イエスさまご自身です。真の主イエス・キリストの福音です。福音に生きている存在、キリスト者である、日曜学校の教師じしんです。子どもたちが、自分の心に向き合って一緒に祈ってくれる先生、自分のために真実に関心を注いでくれる教師を発見してくれば、それは、子どもたちにも届くのです。

また、福音は、キリストにある交わりを生み出します。ですから、日曜学校の魅力の一つは、子どもたちどうしの交わりを育てることです。地域の子どもたちは友達どうしで来ます。兄弟で来ます。たった一人で来る子はむしろ少ないのではないのでしょうか。

わたしは、日曜学校の伝道の担い手は、他ならない子ども自身と考えています。基本的には、彼らがするものだと考えています。子どもが、子どもを誘うのです。その意味でこそ、地域から通う子どもたちがまったくいなくなると、それは、大変な事態であると思います。私どもで申しますと、たとえば小学科6年間の中で、地域の子違いなくならないように、それこそ必死になって彼らを導かなければならないと考えています。このことは、他ならない会堂を移転し

すでに4年経った私どもにとっての、まさに緊急の課題でもあります。何とか、一人でも二人でも地域から歩いて来られる子どもを得ることです。彼らが、日曜学校の宣伝をしてくれるようになることを目指すのです。おもしろい、楽しい、それが友達の間になって広がる、それが私どもの理想であり、目標です。そうになると教師たちが知らない間に、日曜学校に子どもたちが増えて行くということが起こるのです。かつて私どももそれを経験させていただきました。

実は、複雑な思いもあるのですが、ほとんど毎主日、中高生と小学生の二つの礼拝式の説教を私が担っています。説教するとき、目の前にいる子どもたちがここにいる、神の前にいるという大きな喜びを感じます。しかしその一方で、毎週、今日、休んだ子ども、すでに教会から離れてしまっている子ら、まったく教会に来ることもない大勢の子どもたちを覚えて、いつも、心に迫りを覚えさせられます。この伝道する心、子どもたちを呼び求める心が、日曜学校伝道の基本線だと考えます。

(6)伝道の一つのしかし大きな突破口としての地域子ども伝道

わたしは、今から13年前、1994年の復活祭に、貸しビルの小さな一室で、単立教会として開拓伝道を開始しました。この日本に「神(＝まこと)の教会」を形成するという意味での開拓伝道でした。しかし、名古屋南部におけるこのような伝道に、成人の来会者はほとんどありませんでした。その3年後、「中学生による5000万円恐喝事件」が教会のある学区において起こりました。そのとき、街の人から、一言も教会は何をやっているのかと、批判を受けませんでした。「あなたがたは何故、伝道してくれないのか、何故、子ども達にキリスト教を伝えないのか」そのように問う人は一人もおりません。しかし、わたし自身は、神に深く問われたのです。

キリスト者は、世の終わりまで伝道する教会と共にいてくださると約束された伝道の主であられるイエス・キリストから、そして、このお方を派遣された父なる神のみ前に問われているはずです。

教会は、遣わされている地域、町にあって、福音の証をもって世の光として存在させられています。伝道することは、教会の存在と生命のしるしです。伝道しない教会は、自分が教会であることの意味、その存在理由を未だ十分に理解していないのです。伝道の責任を町の人々に果たさないのであれば、主の教会として怠慢であり、無責任です。

とりわけ開拓伝道において強調すべきことですが、地域の子子どもたちに伝道し奉仕することは、立派な会堂も要らず、ほとんどお金も要りません。実は、ビルの礼拝場所から移転して、新しい会堂が献堂される時、深刻な悩みがありました。それは、その学区から移転すること、つまり、すでに平均20名以上通っていた子どもたちが自分の足で通うことが出来なくなる、という現実でした。もしかすると、日曜学校伝道はまったくの振り出しに戻るかもしれないと危惧しました。いへ何よりも、教会の移転によって、彼らを置いてけぼりにしてしまうことは、許されないということでした。幸いに、移転に伴って教会から離れた子はいなかったと思います。先ほども申しましたように、牧師の車で送迎を始めたからです。

私どもの伝道の現状を嘆くとき、一つの、しかし、大きな突破口は、地域の子子どもたちに伝道することであると思います。そのためには、日曜学校伝道に文字通り、「教会を挙げて」取り組む姿勢を構築することが求められます。日曜学校の教師方、教師会だけが担うのではないのです。教会の伝道と教育の最前線の奉仕を担うのが、教師方であり、日曜学校なのです。大人が聞く耳を持たないと嘆くのであれば、いつの時代でも、子どもたちはそうではないことを

思い起こす必要があるのではないでしょうか。

(7)個人伝道に果敢に挑む伝道者、青少年伝道の専門的伝道者の養成

青少年のためのキャンプ伝道の開始を

最後に、最初に申したように一つのことを訴えさせていただきたいと思います。日本キリスト改革派教会にとって、今、何が緊急に必要なのか。そのように問うならば、まさに一人ひとり考えるところがあり、多様な意見が出るでしょう。しかし、誰もひしひしと感じているのは、伝道の進展の課題でしょう。教勢は横ばいですが、それは、どんどん高齢化が進んでいるということです。もとより、最後の最後までキリスト者として礼拝の生涯を全うしてくださる先輩方の存在は、私どもの宝です。しかし、同時に、青少年が教会に少なくなっている現実、ことさら言い立てる必要もないほど明らかな私どもの現実です。彼らを信仰告白、救いへと導く、青年伝道者が必要ではないでしょうか。また、その活躍の場となる中高生のキャンプや大学生のキャンプが必要ではないでしょうか。その意味では、私はもう年を取りすぎました。

青少年が集る教会(教団)には、ひとつの法則、共通のものがあるとわたしは確信しています。それは、キャンプ伝道の充実です。契約の子達の、学びと交わりが中心の場ではないのです。むしろターゲットは、未信者です。彼らを、日本キリスト改革派教会が、主のもとに獲得できたらなんとすばらしいことでしょうか。そのためには、このようなキャンプ伝道ができる人材を育てることが必要ではないでしょうか。

私自身は、神学生のときの夏期伝道で、キャンプにおける奉仕を何度も経験したことでした。私は、毎年の夏期伝道で必ず、少なくとも一人の人を救いに導くことを、祈りの課題としました。当時20代の後半でしたが、同年代にはもとより、子どもたち、青少年、そして何より年上の40、50代の大人にも果敢に個人伝道

を挑みました。牧師になる前に、全年齢層の方々に救いに導くことを祈り求めていました。そして、その祈りに神は豊かに応えてくださいました。その中の一人は、今、牧師として活躍しておられます。年齢的には大先輩の方です。とにかく、礼拝や伝道集会に新来者の方が来られたら、すぐに、隣に座って証する、これが私どもの育った神学校のひとつの常識でした。わたしは既に神学校時代に、神学生の仲間たちや、各個教会に招かれ、個人伝道についてお話させていただいたこともあります。

わたしは神戸の神学校を出ておりませんから、どのように訓練がなされているのか存じ上げません。しかし、子どもでも大人でも、一人の魂に向き合うことは、そのようにして福音を個別に語りこんでゆくことは、牧師、伝道者の基本であると信じています。神学生のとき、伝道説教をして、イエスさまを信じたい人はいませんかと呼びかけ、手を挙げて見せてくださった方に、後で一对一になってお話をしました。そのようにして洗礼を受けた方は一人、二人ではありませんでした。確かにそのような仕方は、わたしが改革派信仰によって育っていなかったからであることは間違いありません。ただし説教をして、その後で、一对一になって、福音をその人の固有の状況に届けてあげたい、はっきりと実らせたいという思いは、改革派も福音派も関係ないと思います。

たとえば、韓国の高神派の大学生の集会のことを伺ったことがあります。結局、私が申し上げたことと、ほとんど同じようなことが実際に行われているように思いました。そこには、未信者の友達を気軽に連れて来れる集会があるのです。同世代の仲間たちが集っているのです。目の前で、イエスさまを信じる友達が起こる。伝道へと献身を表明する友達が起こる。一緒に励ましあう信仰の友が、大勢与えられる。このような集会は、青少年にとってどれほど大きな教育的、伝道的効果があるのか、それは、日本

であろうが韓国であろうがアメリカであろうが、変わりがありません。私どもの教会には、そのような伝道的集いをもっともっと開催することが、求められているのです。そして開催するためには、そのような人材を育てることが求められているのです。

かつて、中部中会に赴任した若い教師たちを誘って、ある福音派の中高生キャンプに出席したことがあります。実際に、見てもらいたかったのです。もとより、そのような集いをそっくり私どもの間で行えるはずはありません。これまで語って来たとおりに、私どもの神学、信仰の理解にもとづく実践があるからです。しかし、一人の魂に語りこむ、そうしたいと熱望する伝道者が求められていると思います。この場で、そのような若者が、有志が起こされるようにと招きたいと思います。神戸の神学校を出ていない者が言うことは申し訳ないのですが、改革派神学に立脚したそのような伝道者が、日本キリスト改革派教会にどんどん起こされること、育

てることが神学校の緊急の課題でもあるように思います。

まとまりのないお話に終始してしまいました。伝道の不振が叫ばれて久しい私どもです。今や、叫ぶことすらしえないほどなのかもしれません。今こそ、使徒パウロのテモテに命じた言葉を思い起こします。「神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国とを思いつつ、厳かに命じます。御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい」(テモテの手紙二4:2)。私どもも厳かな思いで、共に伝道に専心してまいりたいと願います。燃える思いで説教し、証してまいりたいと思います。そして、日曜学校伝道はまさに教会を挙げて取り組むべき緊急かつ可能性に満ちた伝道であることを改めて確認したいのです。

Soli Deo Gloria !



信仰の証

受洗や信仰告白の証しをご紹介するコーナーです。主なる神に訪ね求められ、見いだされた喜びをみなで分かち合いましょう。ぜひ証しをお寄せください。

今回は、田無教会より、石川真衣姉です。

洗礼を受けて

石川真衣 (2012年12月23日受洗 田無教会会員 高校2年生)

私は16歳のクリスマスに洗礼を受けました。教会へは幼稚園の頃から行っていますが、教会へ行くのがあたりまえの習慣みたいになっていたし、何で行っているんだろうとか考えたことはあまりありませんでした。だから、洗礼とかもよく分からないままでした。

そんな中で最初にちゃんと考えさせてくれたのが16歳の夏に行った教会のキャンプでした。ミーティングとかで色々立ち止まって考えることができたし、その中で私は、聖書を少しずつ自分で読んで、毎日お祈りすることを決めました。

そうすると、もっとイエス様の事を分かりたいな、と思うようになって、同時に教会の一員として歩んでいきたいとだんだん思うようになりました。そうして決心がついて、受洗することを決めました。

受洗の準備として、六項目の誓約などのことを牧師先生と勉強しました。その中で私は聖霊のお働きのお話しが印象に残りました。私にも聖霊が働いて下さっているんだと思うとうれしかったです。

何度か勉強会をして、準備はできたけれど、

実際に洗礼式を見たことがないし、結構緊張していました。

当日の洗礼式も緊張しました。でも、終わった後は何だかすがすがしい気持ちになった気がしました。

洗礼を受けてから次に教会に行ったら、教会が第二の家みたいな感じがしてうれしかったです。

まだ知らない事や分からない事が多いけれど、これからの教会生活が楽しみです。

導いて下さった神様に感謝します。

※石川真衣姉妹は、未信者のご家庭から日曜学校に通い続けられて、今年のクリスマスに洗礼をお受けになられました。文中に出てくる「教会のキャンプ」とは、東部中会教育委員会主催で行われている「サマーバイブルキャンプ」のことです。このキャンプは、小学校4年生から高校3年生までの子どもたちを対象にして毎年開かれています。大学生・青年たちが、キャンプリージャーとして、良いご奉仕をしてくださっています。

安田直人 (田無教会牧師)



教会（日曜）学校像について

相馬伸郎（本誌編集長）

1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ56:7、マタイ21:13）があります。神の民の祈りの家である教会はまた、古来、「学びの家」と称されてまいりました。

教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするので、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。むしろ礼拝においてこそ学びの対象となる生ける神との交わりが与えられ、深められてまいります。つまり、礼拝なしに、教会の学びは成立しないのです。

子どもは、「日曜学校」と称して自らの営みを致しておりますから、うっかりすると「学校」の真似事のような営みへと傾斜してしまうのではないかと思います。日曜学校を学校と称しますが、何よりも、教会自身が学びの家、学校です。そうであれば、日曜学校は、まさに教会独自の「学びの家＝学校」になります。

現住陪餐会員によって組織される言わば大人の教会は、礼拝共同体です。このすべての営みを通して、キリスト者が生み出され、その成長がなされます。また、教会が形成され、成長させられます。日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これが本誌の基本的な日曜学校像です。

日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会という言い方は

神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、私どもはどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招き入れ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。つまり、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。日曜学校の礼拝式に出席して、その後の主日礼拝式（朝拝）に列席する契約の子は二回の礼拝式にあずかっていることになります。

2. 分級中心より、礼拝式中心

子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは

良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求める……。本誌が、繰り返し申し述べて参りましたことは、「分級展開例をそのまますることが大切なのではありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げることができればそれで良いのです」。準備したものの全部をやれたかどうかということが分級運営の良し悪しの基準にはならないと思います。礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。

3. 子ども礼拝式における説教の重要性

—日曜学校の目標—

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」であり、それゆえに日曜学校の目標は、自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活を確立できるように導くことにこそあります。しかもそれは、まさに公同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式（公同の大きな祈り）に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができます。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかかと思えます。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によって、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでしよ

う。そうなれば、牧師こそが日曜学校の奉仕、礼拝説教を担うことが求められるのではないのでしょうか。

本誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわかまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を説く自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

4. 説教の完成としての牧会—分級の目標—

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子どもたち全体になされる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、一人の子どもの魂の状況に、よりの確に触れ、届けるためには、「牧会」が求められます。私どもが、分級の目標を「共に祈る」こととしておりますのは、子どもへの牧会を指し示すあり方を指し示しているのです。この牧会に奉仕するのが分級なのです。この分級イメージは、「牧会」のイメージ、子どもと向き合う姿勢です。子どもの心、気持ちを聞き出すこと、聴き取ることが求められます。そこでこそ、教室において生徒全体に均一の知識を提供する「学校」のイメージは薄くなるはずで

す。説教（神の言葉の共同的伝達）と牧会（個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

5. 教会形成の一環としての日曜学校

—教師会と教師—

およそ教会的な奉仕の在り方は、いずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。

例えば、礼拝説教を担うのは、担当日の奉仕者一人です。しかし、その時こそ、その背後の教師たちの祈りがどれだけ集められるかが問われます。教師たちの祈りに支えられてこそ説教や、その礼拝式は必ず聖霊の豊かな働きのなかで捧げられることを確信いたします。

教師会が、単に教師たちの実務的会議で終わるのではなく、日曜学校の働きを担う核としての「共同体」として形成されることが大切なのです。具体的には、充実した教案研究がなされ、全体の課題と一人ひとりの課題とを共有できる教師会を持つことです。本誌は、その一助となるために発刊されたものです。

さらに申しますと、教会全体の祈りに支えられなければ、日曜学校の業が、教会形成そのものとしての結実を求めることは難しくなくなります。日曜学校の働きとは、各個教会の形成と伝道の働きそのものと直に繋がっているものであり、そうでない働きは、少なくとも改革教会の教会形成の筋道とは異なる日曜学校となってしまいます。だからこそ、礼拝指針の第31条にある通り、小会の監督、配慮が定められているのです。日曜学校の営みとは教会形成そのものの営みなのです。いわゆる賜物のある牧師とか専門家の牧師だけが担うものではありません。

6. 伝道する日曜学校像

日曜学校は契約の子の信仰継承のためにもあります。しかしこれまで、宣教地である日本の教会は、日曜学校を地域の子どもたちを捉える伝道の場として考えてまいりましたし、今なお同じ状況にあると思います。

私どもは、今日の日本の荒廃は、教会の福音伝道の力の低下の責任であると考えております。社会から、教会の責任を問う問いはどこからもあがっておりません。しかし、神からは、問われています。

私どもの目に子どもたちは、どのように映っているでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渴いて、倒れています。真の教会で説かれる福音が届きさえすれば、子どもらこそはっきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲と働きを減退させてはなりません。

私どもは、教案誌を作成し、出版すればそれで良いとはまったく考えておりません。日本キリスト改革派教会をはじめ日本の諸教会から子どもたちの讃美の声、祈りの声が溢れるようになることをこそ目指しています。

「子どもたちを私のところへ来させなさい」と命じられた主イエスの御前に、共に悔い改め、祈りの叫びをあげたいと思います。忍耐と労苦が求められます。けれどもその光景を夢見ながら、主と共に、皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

本誌へのご批判、ご意見をお寄せ下さい。改革派日曜学校像を確立するために神学的、実践的な広い論議を心から期待致しております。

Soli Deo Gloria! (ただ神の栄光の為に！)

(中部中会日曜学校委員会委員、
名古屋岩の上传道所宣教教師)

副読本のご案内

『主は羊飼—中高生のための教理入門—』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

❶ 人生の目的—神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていただきたことです。そのときまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。一わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちですべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなのです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりでです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなく、いと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあがめます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに13年目に入り、第49号まで発行して参りました。中部中会ではほとんどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円／年
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書默想・説教展開例・分級展開例

4月7日 復活のときの祝福 教理説教のための聖書黙想

テキスト	コリントの信徒への手紙一 15章12～21節
子どもカテキズム	問36
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問37, 38 ウェストミンスター大教理問答 問84～90 ウェストミンスター信仰告白 第32, 33章

問36 死んだあとはどうなりますか。

答 死んで終わりではありません。

私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入れられます。

私たちの体はイエスさまと共にあり、

イエスさまがよみがえられたように再臨の日に朽ちない体によみがえり、
魂と一つにされます。

死ぬまで、そして死んでからも、イエスさまと私たちは一つです。

救われた私たちは、永遠に神さまを喜ぶことができます。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

死者の復活、それはパウロが1節で「あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音にほかなりません」と語るように、キリスト教信仰の中心的な教えです。

そしてパウロは、私たちキリスト者の復活を語るに先立ち、キリストの十字架と甦りに関して、500人以上の証人がおり、疑う余地のない事実であることを確認します。パウロ自身、神の教会を迫害していた者でありながらも、復活のキリストと出会い、使徒としての働き人として召されたのです。

このテキストにおいては、キリストの十字架と復活があるからこそ、私たちキリスト者にも死からの復活があることを確認します。現代のみならず、1世紀でも、死者の復活を信じる事が出来ない人々が多くいました。

キリスト者の中にも、そのような思いの人々はいたことでしょう。そもそも、死者の復活を信じないキリスト教信仰とは成り立つのかと、問わなければなりません。死人の復活がなければ、信じる喜びは、この世的になり、個人的なことに留まってしまいます。思想的、概念的な信仰になります。そしてパウロは「この世の生活でキリストに望み

をかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です」(19)とすら語ります。

キリストは十字架の上に死に復活を遂げられました。そして、キリストを信じ、キリストにつながるキリスト者もまた、死からの復活が約束されており、神の国(天国)における永遠の生命の祝福に入れられているのです。「キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂とされました。……死者の復活も一人の人(キリスト)によって来るのです」(20,21)。ここにこそ、信仰の確信があり、信仰に生きる喜びがあります。

〈子どもカテキズムの解説〉

子どもカテキズムでは、天の国の祝福がどのようなものであるかを確認します。地上の歩みは、悩み、悲しみ、苦しみ、艱難、病氣……が尽きません。しかしキリストは、十字架の死と復活により、私たちの罪を贖ってくださり、私たちは義認、子とされること、聖化の恵みに与っています。しかし、私たちには罪の残滓があり、罪赦された罪人であることには変わりありません。そのため、神さまを信じたからといって、日々の生活がバラ色の人生に変わるわけではありません。

しかし、キリスト者には、キリストが再臨した時、復活の体が与えられ、最後の審判により無罪が宣告されます。キリスト者は、天の国に入れられ、私たちもまた、聖・義・真実が与えられ、地上の歩みのような苦しみも悲しみもない、栄光に満ちた朽ちない体があたえられるのです。

遺棄の問題（救いに与らない者）に関して、子どもカテキズムやウェストミンスター小教理問答においては語りません。子どもたちに対して、裁きの恐ろしさを語り、信仰を求めるようなことは避けた方がよいでしょう。

ただ、最後の審判における裁きがあることを聖書は語っています（参照：大教理問89、信仰告白32:3、33:2）。つまり私たちは万人救済論は信じません。救われ、神の国における永遠の祝福に入れられるためには、イエス・キリストを信じ、イエス・キリストによって与えられる救いを信じるのが求められます。子どもたちに語り聞かせるにあたり、イエス・キリストの十字架を信じ、イエス・キリストにつながるからこそが大切であることの理解を深めなければなりません。

〈子どもたちに対して〉

死者の復活に関しては、子どもたちにとって二つのことが問題となるであろうと思います。一つは、周囲にいる多くのお友だちが、復活を信じることなく、今の生活を大切に生きていること。第二は、神の国を信じようとしても、実際に見たことがないために、概念的になってしまうことです。

第一の点に関しては、教会に行っていること、神さまを信じていることと併せて、子どもたちにとっては、友だちに対して話すことがなかなかで

きないことではないでしょうか。

こうしたことに対して、いじめの対象になるかもしれません。子どもたちは周囲のお友だちと違うことを恐れることでしょう。だからこそ教会では子どもたちの状態を確認しつつ、配慮することが求められます。しかし同時に、周囲と違うことを恐れるのではなく、生きて働く主なる神さまを信じる喜び、祝福、天国における永遠の生命の希望が与えられていることを語っていくことが求められています。

第二の点は、神の国は誰も見たことがありません。そのために概念的・抽象的になることを避けて通ることはできません。しかし、この世と神の国とがまったく異なった世界ではなく、神の創造された世界の完成が神の国となるのであり、この世の延長線上にあります。ただ、すべてが聖・義・真実であり、神の栄光に満たされており、神の被造物としての人間のいちばんの祝福がここにあります。

ただし、神の国の祝福を強調し続けると、子どもたちが問題に直面した時、現実逃避を行い、この世における生きる希望を失いかねません。そのため、神の国の希望を語る時には、同時に、神さまがこの世を素晴らしいものとして創造して下さったこと、この世における私たちの生活をも、神さまは恵みに満たして下さっていることを確認しなければなりません。また神さまは、人間が世界を管理することを命じておられ、私たちが世においてその働きを委ねられているからこそ、何を行うにおいても神さまが望んでおられることを責任をもって行わなければならないのです。

（辻 幸宏）



テキスト コリントの信徒への手紙一 15章12～21節
子どもカテキズム 問36

〔単元のねらい〕

現代社会では、多くの人々がこの世における一回限りの人生と思い込んでいます。そのため、彼らの多くは現実主義・この世主義となり、周囲に対して、また将来に対して責任をもたなくなっています。

しかし聖書は、キリストの十字架の死と復活と共に、私たちキリスト者の死からの復活と永遠の生命をお示し下さっています。そしてキリストにつながる私たちキリスト者も復活と永遠の生命の約束が与えられています。子どもたちには、救われて神の国の永遠の生命に生きることこそ、本当の喜びがあることを理解できるように導きたい。

しかし同時に、永遠の生命をお与え下さる神さまは、この世における生活をも祝福して下さるのであり、現実逃避するのではなく、日々の生活にも救いの喜びがあることも確認していただきたい。

復活の希望に満たされた生活

みんなは、教会に来ていること、神さまを信じていることをお友だちに話すことがありますか？

なんだか恥ずかしい、一人だけ仲間はずれにされてしまいそうだ、いじめられそうだと思います。このことを黙っている人もいるかと思います。でもね、神さまは、今日もみんなが教会に来て、イエスさまを礼拝していることを、天国において喜んで下さいます。

今、天国におられるイエスさまは、十字架で死を遂げられ、三日目に甦られました。そしてその後、天に昇って行かれ、今も天におられるのですよね。神さまであるイエスさまが、十字架で死を遂げられたのは、私たちを救うためです。私たちは神さまに救われたと語りますが、救われるとはどういうこと？ 死んでも復活して天国に行くこと、天国において永遠に生きることです。天国は、イエスさまがおられ、苦しみも、悲しみもないところです。そして神さまの栄光に満たされ、喜びの生活が与えられるところです。

つまり、イエスさまが十字架に死に、復活して下さったことにより、先生を含めて神さまを信じるすべての人たちが、イエスさまと同じように復活することができるようになったのです。

イエスさまが死から復活したことを、教会に来ている私たちは信じていますし、また信じようとしているのですが、教会に来たことがない人たちはだれも信じていません。復活を信じることなどできないのです。

でもね、コリントの信徒への手紙を書き記したパウロさんは、語っています。「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファ（ペトロ）に現れ、その後十二人に現れたことです。五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。……そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です」（15:3～6、8,9）。パウロさんも最初はイエスさまの復活を信じるができなかったのです。だからこそ、神さまを信じ、復活を信じるクリスチャンを馬鹿にして、迫害し、殺していたのです。しかし、復活のイエスさまはパウロの前に立って下さったのです。そしてパウロさんはイエスさまに出会う

ことにより、自分が間違っていたことに気付くのです。そして、イエスさまを信じ、使徒として、イエスさまを宣べ伝える伝道者となっていくのです。

なぜパウロさんは、イエスさまの復活を信じると同時に、神さまを信じて、伝道者となることができたのでしょうか？ ①神さまが生きて働いておられること、②イエスさまの十字架の死によって罪が赦されたこと、③神の子とされたこと、④肉の死で終わりではなく、復活と天国があること、⑤天国における永遠の生命と祝福があること、こうしたことをパウロさんは知り、神さまを信じるのができたのです。

特にパウロさんにとっては、キリスト者を殺すことすら行っていた自分の罪が赦されたこと、自分も天国に行くことができるのだ、天国にこそ本当の喜びがあることが示されたことは大きいのではないのでしょうか。

私たちも神様を信じれば、神さまは私たちを天国に入れて下さるのです。天国では、イエスさまが共にいて下さいます。神さまの恵みと祝福に満たされます。もう苦しみや悲しみ、病気もなくなり、罪もない世界です。周りの人たちの反応を気にすることもありません。だからこそ、天国では、喜びに満たされた生活が与えられ、それがいつまでも永遠に続くのです。天国ではもう死ぬことはないのですね。神さまを信じ、復活の体が与えられるとは、まさに天国の喜びに生きることができることです。これこそが、神さまによって命が与えられた私たちのいちばんすばらしいことです。

「神さまが、それだけ素晴らしい天国に導いて下さるのであれば、今、生きているのに意味があるの?」、「苦しいから死にたい」と思うてしまう

人がいるかも知れません。それはとんでもない誤解です。

確かに治らない病気のために苦しんでいる人たちがいます。いじめられていれば、生きているのが嫌になることもあるかも知れません。地震や自然災害、事故などで苦しんでいる人もいるかも知れません。

でもね、私たちを救い、天国に導いて下さる神さまは、今も、私たちと共にいて下さいます。そして私たちを神さまの恵みの中に入れていて下さるのです。私たちの祈りを聞き届けて下さいます。イエスさまは、「求めなさい。そうすれば、与えられる。捜しなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、捜す者は見つけ、門をたたく者には開かれる」(マタイ7:7,8)とお語りくださっています。そして私たちが、神さまを信じて、神さまを礼拝し、神さまに祈り求めつつ、一生懸命に生きることにより、神さまは喜んで下さると同時に、私たちをとおして、神さまを証しして、まだ神さまのことを知らない人たちに神さまを伝えていくことができるのです。

天地創造の時に、人を造られた神さまは「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、血を這うものすべてを支配させよう」(創世記1:26)とお語りくださいました。私たちを救い、天国に導いて下さる神さまは、私たちを、この地上の歩みにおいても、恵みと祝福で満たして下さい。苦しみや悲しみなどもあるけれども、神さまは私たちが今、一生懸命に生きること、神さまを証しして生きingことを喜んで下さいます。私たちは、天国と永遠の生命の喜びがあるからこそ、苦しい時も悲しい時も、神さまを信じて、希望をもって生きていくことができるのです。(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙 一 15章13節

死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。

〈ねらい〉

進級し、新しい学年での学びを始めるに当たり、昨年度（3月）までの流れを復習し、今年度の学びの見通しをもつ。

〈展開例〉

(1) 自己紹介。進級・担当変更など、新しいメンバーになった場合はもちろん、メンバーは変わらなくても学年が変わったので、新しい気持ちで自己紹介をする。

(2) 昨年度の復習。昨年はプリント（下記）のことを習ってきた。ざっと読み上げる程度でいちいち説明しない。一年かかるから。

本日の学びの箇所は、義とすること・子とすること・聖とすることに伴い受ける祝福のひとつ。前回、3月10日に習った、聖化の歩みのゴールとしての「死のとき受ける祝福」とセットの「復活のとき受ける祝福」。間に受難週とイースターが入ったので、いい感じにイエス様の十字架の死と復活を思い起こしながら、わたしたちの死と復活

のときの祝福を学ぶことができ感謝。

(3-1 聖書箇所を読んで) どうしてコリントの人たちの中には「死者の復活などない」と言う人たちがいたのだろうか？ 生徒たちに予想させよう。コリントの教会にはいろいろな問題があって、その中のひとつが「復活の否定」。これに対し、パウロは信仰の根幹としてのキリストの復活を熱く語る。熱く語れる生徒さんはいるかな？

(3-2 ウ小教理問38を読んで) この祝福もキリストから受ける。「栄光あるもの」ってどんなもの？「審判の日」「公に受け入れられ」「無罪と宣告され」って、それぞれ意味は分かる？「永遠に神を喜ぶ」「全く神を喜ぶ」は問1の生きる目的と完全一致。だから「完全に祝福された状態」。

(4) 本年度の学びの見通し。本日の単元までで信仰編が終了。来週からは生活編に入り、「人はどのように生きるか」について学ぶことを予告する。

《昨年習ったこと》

月 日 名前

○序説～人は何のために生きるか

○信仰編～人は何を信じて生きるか

創造 父なる神のお働き

墮落・罪と悲惨

キリストの贖罪

贖いの適用 聖霊のお働き

有効召命

義とすること

子とすること

聖化

に伴い受ける祝福

この世で受ける祝福

死のとき受ける祝福 ←3月10日

《今年習うこと》

復活のとき受ける祝福 ←今日ココ

○生活編～人はどのように生きるか

十戒 恵みの外的手段 御言葉 礼典 祈り

テキスト	ローマの信徒への手紙 6章12～14節
子どもカテキズム	問37
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問39 ハイデルベルク信仰問答 問86～87

問37 神さまが人に求めておられることは何ですか。

答 神さまが私たちに求めておられることは、感謝することです。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

イエスさまを信じて、洗礼を受けることで、イエスさまに霊的に結ばれることが起こります。そして、罪と死の力から解放されて、永遠の命に生かされます。6章1～11節には、その真理が、古い自分がイエスさまの十字架の死と共に滅び、新しい自分がイエスさまと共に復活することとして示されていました(6:11)。

キリスト者は、イエスさまに霊的に結ばれています。しかし、依然として、この世に生きねばならないのです。すると、当然、罪と死への誘惑に絶えずさらされることとなります。そこで、使徒パウロは、この世でのキリスト者の生き方を教えます(12,13節)。

ところで、キリスト者は、イエスさまに霊的に結ばれて、古い自分が滅びるのですが、それは生涯かかって起こることです。そうすると、古い自分に属する、自己中心の、限りない欲望も、生涯かかって滅んでゆくのです。この世において欲望が全くなくなるわけではないのです。欲望があるからこそ、キリスト者は、自分の外側からだけでなく、自分の内側からの誘惑にもさらされねばならないのです。12節は、そのような罪と死への誘惑、つまり、自分自身の外側からの誘惑、そして、自分自身の内側からの誘惑に陥ってはならないという教えです。

続く13節前半ですが、「五体」とは、手や口ばかりでなく、心も含めた体全体のことで、すなわち、体の全てを不義のための道具として用いてはいけないということです。「道具」とは、武器のことです。つまり、罪の支配領域を拡大させるための武器として体の全てを用いてはならないと

いうことです。この世の中で、人間が、自分の体の全てをどのように用いて罪の戦線、罪の支配領域を拡大しているか、具体的には1章24～32節を参照して下さい。

13節後半は、キリスト者の生き方の積極的な表現です。イエスさまに霊的に結ばれると、古い自分が滅んで、新しい自分が復活することが起こります。特に生涯かかって、古い自分が滅びつつ、新しい自分が完成目指してよみがえってゆくのです。ですから、キリスト者は、その新しい自分を神さまに献げること、つまり、神さまのために「五体」を用いることが求められるのです。特に神さまの命の御支配を拡大させるための武器として自分の体の全てを用いなさいということです。この箇所から、イメージできるのは、イエスさまの戦士として、罪と死への誘惑と戦いながら、神さまのために「五体」を用いているキリスト者の姿でしょう。

14節は、以上のように生きねばならないことの理由です。まず第一に、イエスさまに霊的に結ばれるならば、もはや、罪と死の力が支配することはあり得ません。キリスト者も、いつかは、この世の人生の最期を迎えるのですが、死んでも生きるのです。なぜならば、死んでも、依然として、イエスさまに霊的に結ばれているからです。ですから、イエスさまが栄光の御体をもって復活なさったように、キリスト者も、もはや死の力に決して支配されない、それゆえに朽ち果てることもなく、病気になることも、老いることもない栄光の体をもって、やがて終わりの日に復活するのです。キリスト者は、そういう命の御支配に生かされているのです。

第二に、キリスト者が、もし、依然として、律法の下にいるのであるならば、神さまがお与え下さった律法を完璧に守ることによって、神さまに義と認められ、天国に入れてもらえるように努力しなければなりません。しかし、それは不可能です。それならば、律法の下にいる限りは、天国には入れないということになります。しかし、実際は、律法の下ではなく、恵みの下にいるのです。つまり、イエスさまが、この世の中でただお一人、律法を完璧に守って下さったことで、そのイエスさまを信じるだけで、神さまに義と認められ、天国に入れてもらえるのです。キリスト者は、そういう一方的な恵みの御支配に生かされているのです。

キリスト者は、神さまへの感謝をもって自分の五体を神さまに献げて生きるのです。

〈子どもカテキズムの解説〉

『子どもカテキズム』は、問37から、第三部「生活の道」に入って、おもに「十戒」と「主の祈り」が扱われます。先程、「キリスト者は、神さまへの感謝をもって自分の五体を神さまに献げて生きるのです」と述べましたが、具体的には、神さまへの感謝をもって「十戒」に生き、神さまに信頼して「主の祈り」に生きるということです。そこで、『子どもカテキズム』は、具体的な生き方を問うことに先立って、問37で、神さまが私たちに求めておられることについて問うのです。それが、神さまへの感謝です。

『ハイデルベルク信仰問答』は、第三部において、同じように感謝について述べ、特に問86で、どうして、神さまへの感謝が必要なのか、その理由を明快に述べております（以下、春名純人訳、神戸改革派神学校出版局刊）。

「第86問 それでは、わたしたちが、一切の、わたしたちの功績なしに、ただ、キリストの恵みによってのみ、悲惨から救い出されたのであれば、なぜ、わたしたちは、善き業を為さねばならないのでしょうか。

答 キリストは、尊い御血潮をもって、わたしたちを贖い出して下さったのち、聖霊によつ

て、わたしたちを新しくし、ご自身の像（かたち）に似る者として下さったからであります。

それは、わたしたちが、この恵みに対して、全生活をもって、神に感謝を示し、わたしたちによって、神があがめられるためであります。

さらにまた、わたしたち一人一人が、自分の信仰を、その結ぶ実によって、いっそう確信し、わたしたちの祝福された行いによって、隣人をも、キリストのもとに、導くためであります」。

今回、『子どもカテキズム』問37を学ぶに当たって、今一度、イエスさまが私たち罪人のために十字架の上で尊い御命を捨てて下さった出来事へと想いを馳せることで、神さまへの心からの感謝を与えられたいものです。

〈子どもたちに対して〉

今日、子どもたちは、義務よりも、権利を当然のこととして主張する時代に生きています。何かを与えられて「ありがとう」の感謝の言葉が自然と口から出ること少なく、子どもとして親からもらって当然！ 生徒として先生から教えられて当然！ etcといった状況があります。

人間として権利を主張することは大事ですが、権利を主張することが行き過ぎると、人間の原罪、つまり、自己中心の罪があらわとなります。

世の中の大勢が、権利のみに生きる状況にあって、私たちキリスト者は、「一に感謝！ 二に感謝！ 三、四がなくて、五に感謝！」に生きましょう。

そして、私たちキリスト者の場合、人に対する感謝は、神さまに対する感謝と一つです。いや、神さまに感謝できてこそ、人に対して、心から感謝できるのです。

神さまは、イエスさまを通して、私たちに恵みに恵みを増し加えて下さいます。イエスさまを通してこそ、死んでも生きる命をお与え下さいます。私たち大人が、そして、日曜学校教師が、まず何よりも、神さまへの感謝の姿勢を子どもたちに対して身をもって示したいものです。（長谷川潤）

テキスト ローマの信徒への手紙 6章12～14節
子どもカテキズム 問37

〔単元のねらい〕

今回から『子どもカテキズム』の第三部「生活の道」に入ります。キリスト者の生活において重要なのは「感謝」です。この感謝の思いは、神さまが、イエスさまを通じて、私たち罪人のためにして下さったことを聖書の御言葉において想い起こす時にわいてまいります。神さま、イエスさま、そして、人に感謝する子どもを御言葉によって育むことが出来ればと願います。

感謝して神さまと人のために生きる 新しい自分へ

愛するお友だち、おはようございます。

新学期がスタートしておよそ一週間経ちましたね。入園・入学のお友だち、進級のお友だち、まだまだ、幼稚園や小学校での生活、新しい学年、新しいクラスでの生活に慣れていないと思うけれど、イエスさまは、みんな一人一人と一緒にいて下さるから、安心して、遊びに、勉強に、スポーツに張り切って下さいね。

さて、きょうから、『子どもカテキズム』のお話しも、新しいところに入ります。第三部の「生活の道」です。そして、きょうは、その生活で、とても大事なこと、神さまに感謝することのお話しです。

けさ、みんなに聞いてもらっている聖書は、パウロさんがローマの教会の人たちに書き送った手紙の一部ですが、さっき読んだところの前には何かが書いてあったかということ、イエスさまを信じる人は、イエスさまに結ばれた人なんですよ、ということが書いてありました。そのイエスさまは、私たちの罪の赦しと永遠の命のために、十字架で死んでよみがえって下さったお方だよ。そういうイエスさまに、聖霊なる神さまを固い絆として結ばれるのですが、イエスさまに結ばれると何が起こるかということね、何と、あれがほしい！これがほしい！と、本当に自己中心だった自分が死んで、感謝して神さまと人のために生きる、新

しい自分がよみがえるのです。

ところが、みんなにおぼえておいてほしいことは、イエスさまを信じて、イエスさまに結ばれると、すぐに完全に新しい自分になれるのかということ、決して、そうではないの。自己中心の自分はだんだん小さくなって、新しい自分がだんだん大きくなってゆくのです。でも、途中で、自己中心の自分が大きくなってしまって、新しい自分が小さくなってしまふこともあるのですが、最後には自己中心の自分は完全に減んで、完全に新しい人になれるのです。イエスさまを信じて、この世を生きるというのは、そういう状態なのです。

それで、イエスさまを信じる人には、いつも、悪魔の誘惑とか自己中心の思いとの戦いがあります。実は、正直にお話ししますが、先生は、何度も、その戦いに負けてしまうのです。よくあるのが、家族で、一台しかないテレビのチャンネル争いで勝った時です。たとえば、日曜日の夜の8時、その争いは起こります。勝ったのだったら、それでよかったんじゃないと思うかも知れませんが、ところがどっこい。チャンネル争いで勝つということは、テレビを独り占めして自分だけが見たい番組を見ることだよ。その番組は、日曜日の午後6時から別の放送で放映したり、土曜日に放映したり、一週間で三回も放映されます。ところが、どうしても、日曜日の夜の8時の放映分を見ない

と、日曜日が終わる気がしないので、父親の特権を振りかざして、家族からチャンネルを奪ってしまうのです。そんな時、自己中心の自分が勝って、新しい自分が負けてしまっているんだね。そして、番組が終わるたびに、何で自分は自己中心なんだろうと思うのですが、これがなかなか止められない！

ですから、こんな私の切なる願いは、イエスさまが、感謝して神さまと人のために生きる、新しい自分をもっともっと大きくして強めて下さるよということ。悪魔の誘惑とか自己中心の思いとの戦いにいつも負けてしまう私ですが、そんな私でも、最後にはイエスさまがその戦いに勝利させて下さると信じています。ですから、いつも、感謝して神さまと人のために生きる、新しい自分を追い求めてゆきたいものです。

さて、イエスさまを信じる人は、完全に新しい自分ではありません。悪魔の誘惑とか自己中心の思いと戦って負けを体験しつつ、新しい自分を追い求めて生きる人です。けれども、いつも、悪魔の誘惑とか自己中心の思いとの戦いに負けてしまうわけではないのです。実は、その戦いに勝つこともあるのです。家族とのチャンネル争いで、家族に譲ることができる時もあるのです。パウロさんはきょうの箇所にこう書きました。『また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体

を義のための道具として神に献げなさい』(6:13)。この御言葉に少しでも生きることができた時、私はよく思います。「あっ、今は、自分の力で勝ったのではないな！ イエスさまのお陰なんだなって」。そんな時、イエスさまへの感謝の思いが溢れます。さらに私の中の自己中心の自分が段々小さくなって、最後には減んでしまうよにと、イエスさまが十字架で尊い血を流して死んで下さったことを思い起こすたびに、「イエスさま、本当にありがとうございます」というように、イエスさまへの感謝の思いでいっぱいになります。

イエスさまが私たちのためにして下さったことを想うと、イエスさまにどんなに感謝しても感謝し尽くすことはできません。それでも、神さまからすれば、本当にわずかの感謝かも知れません。ところが、神さまは、そんな感謝の思いを喜んで受け入れて下さるのです。

イエスさまを信じる人にとって、イエスさまに感謝すること、神さまに感謝することとは、ひとつのことです。イエスさまへの感謝は、神さまへの感謝です。私たちのためのイエスさまの十字架の死をいつもおぼえながら、まず何よりも、感謝して神さまのために、そして、感謝して人のために生きる、新しい自分を追い求めてゆきましょう。

神さまと人のために生きることができる、それこそ、何と感謝なことでしょう。(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 6章13節

かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、
また、五体を義のための道具として神に献げなさい。



〈ねらい〉

罪に支配されず、恵みのもとに生きる生活が与えられたことを知り、感謝する。

〈展開例〉

(1) 聖書箇所より、分からない言葉を抜き出す。「死ぬべき体」「罪に支配させる」「体の欲望」「五体」「不義のための道具」「義のための道具」「罪に任せる」「死者の中から生き返った者」「神に献げる」「律法の下に生きる」「恵みの下に生きる」。

生徒から出なかつたら、こちらから質問する。質問して答えられたら、どんな答えでも大いにほめる。答えられないことで恥ずかしい思いをしないように配慮。「分からないということが分かってよかったね」と価値づける。

(2) プリント（下記）に従って、上記の言葉の意味を整理する。「自分自身」と「五体」の間にギャッ

プのある年頃（理想とする自分と現実の自分の折り合いがつかない時期が思春期）なので、無理そうなら、さらっと流して一般論として扱ってよい。突っ込めそうなら突っ込んで、その生徒の直面している罪の問題・不義の問題を共に考え祈る時とすることもできる。

(3) 「律法の下に生きる」ことと「恵みの下に生きる」ことの違いを丁寧に説明。恵みの下に生きていることを感謝しながら、律法主義に陥ることがしばしばある。「業の契約」と「恵みの契約」について復習してもよい。

(4) 新学期が始まって、学級組織も固まってきたころ。班のメンバー、教科担任の先生方の様子、部活の様子などの話を聞き、毎日の生活の中で恵みの下に感謝して生活できるよう励まし祈る。

月 日 名前

五体（ . . . ）

体の欲望に従う

死ぬべき体

罪に支配される

不義のための道具

罪に任せる

律法の下のに生きる

死者の中から生き返った者

もはや罪に支配されない

義のための道具

神に献げる

恵みの下に生きる

4月21日 感謝としての服従 教理説教のための聖書黙想

テキスト	サムエル記上 15章1～23節
子どもカテキズム	問38
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問39 ウェストミンスター大教理問答 問91 ハイデルベルク信仰問答 問91

問38 あなたはその感謝をどのようにしてあらわしますか。

答 神さまが聖書を通して明らかにしておられる御心に従うことです。

〈子どもカテキズムの解説と黙想〉

子どもカテキズムは、救われたキリスト者の生活の姿勢を「感謝」という表題で始めている。「感謝」は義務あるいは命令と異なり、応答的な側面が強調されている。つまり神さまからの恵み、御子イエス・キリストを通して救われたことに対するふさわしい本来的な応答、それが「感謝」なのだ。

しかし本問でわざわざ感謝のあらわし方を問うているのは、そこに人の罪の現実があることをわたしたちに気付かせてくれる。罪の影響がなければ、人は神の恵みに対してふさわしく感謝することができるのであろう。しかし人にはなお罪の影響があり、神の恵みに対してもまたふさわしくない形で応答してしまうのである。感謝イコール従順とはならず、かえって感謝イコール背信ともなってしまう。それが人なのだ。カテキズムはその、この世に生きるキリスト者の現実を軽んじていない。だからこそ、どう感謝するかをも明確にすることが必要なのである。感謝はたしかに自己応答的ではあるが、けっして自分勝手な応答ではない。それは神の御心に従うことである。こうして「感謝」と「従順」とを結びつけるのが本問である。

そして、感謝と従順が一つになるその道は、聖書の道であることが本問ではっきりと示されている。だから「感謝」は、聖書からよく聞くことから始めることを押さえたい。また本問でははっきりとは示されていないことではあるが、自己応答的ではあるが神の御心に従うということは聖霊の働きなしには人にはできないことである。子どもた

ちとともに、聖書の言葉をよく聞いて、御心に従うことができるようにという祈りに導かれたい。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

本テキストは、サウルが王位から退けられ、ダビデに神の祝福が移るきっかけとなった箇所である。

サウル王に対する神さまの命令は明確である。「アマレクに属するものはいっさい滅ぼしつくせ」(3節)。しかしサウルと兵士はその通りにはしなかった。(9節) それどころか、「自分のために戦勝碑を建てて」(12節)、勝利を自分のものとしている。それにもかかわらず、サウルはサムエルに対して「わたしは主の御命令を果たしました」と喜んで報告している。自分のしたことがまるで分かっておらず、むしろ有頂天になっているサウルの姿が哀れである。サムエルが問い詰めると、サウルは自己弁護をする。彼の主張は2点で、第一に、それは兵士がしたことであるという責任転嫁。このサウルの姿を見ていると、アダムが神の命令を守らなかったと指摘された時、「女が」したのでと責任転嫁していた罪の原点の姿を思い出す。このサウルの態度に対してサムエルは、「あなたは、自分自身の目には取るに足らぬ者と映っているかもしれない。」が、主があなたを王とされたのだと、恵みを受けた者の責任を明確化している。

第二に、それは「主への供え物」とするためにしたことだと言って自己正当化しようとする。サムエルは、主のためにしたことだからよいでしょうというサウルの態度に対して、「主が喜ばれる

のは……主の御声に聞き従うこと」と指摘する。
本テキストの中心である。そして「主の御言葉を
退けたあなたは王位から退けられる」と宣告する。

主は恵みを与えられる方であるが、御言葉に従わ
ない時にはその恵みを取りあげられる方でもある
のである。
(草野 誠)



テキスト サムエル記上 15章1～23節
子どもカテキズム 問38

〔単元のねらい〕

サウルの姿を通して、神さまに正しく感謝していないこととは何かを学び。反面教師にして、ではどう感謝したらよいかを知ること。そして聖書をよく聞いて、御心に従って感謝ができるように祈る心を与えられたい。

感謝の仕方

先週私たちは、神さまが私たちに求めておられることは、神さまに対して感謝することだと学びました。ではどのように感謝したらよいでしょうか。今日はそのことについて聖書から学びましょう。

イスラエルに王をくださいという民の求めに応じて、神さまは今日出てきたサウル王を最初の王さまにされました。今日読んだすぐ前には「サウルの一生を通して、ペリシテ人との激戦が続いた」とあるように、この時代のイスラエルは周り中敵だらけだった。神さまが守ってくださらなかったら、たちまちできたばかりの国も人々も滅ぼされてしまう、そういう危険な状態だったのだね。そんな中でも神さまはサウルとイスラエルを守ってくださり、勝利をあたえてくださっていました。

そんなある日、神さまが預言者サムエルを通して言葉を与えられました。「今、主が語られる御言葉を聞きなさい」。罪を犯したアマレクを、わたしは罰することにした。「アマレクに属するものはいっさい、滅ぼし尽くせ」と、アマレクにあるすべてを滅ぼしなさいというご命令と完全勝利を約束されたのです。そこでサウルは兵士を集めてアマレク人を攻め、見事勝利することができました。そしてアマレクの王を捕まえ、たくさんの戦利品を手に入れました。でも、サウル王はそれら高価な戦利品を目の前にしたとき、これをすべて滅ぼしてしまうのはもったいないという気持ちが起こりました。そこでサウルとそれに従った兵士たちは、上等なものは滅ぼさず、値打ちのない

ものだけを滅ぼしました。

あれ、神さまのご命令はなんだったのでしょうか。「アマレクに属するものはすべて、一つ残らず滅ぼせ」でしたよね。サウルは神さまのご命令を守っていますか？ 守っていませんよね。サウルは自分で勝手に神さまの言葉を曲げてしまいました。

そんなサウルに対して神さまはどう思われたのでしょうか。「わたしはサウルを王にしたことを悔やむ」と言われます。当然ですよね。神さまがせっかくサウルを王さまにしてあげたのに、そして勝利を与えて敵から守り、国を豊かにしてあげたのに、サウルは神さまの言われることを聞かないのだから、神さまが後悔されるのは当然です。それを聞いた預言者サムエルも心を痛めて、サウルに神さまの言葉を伝えに行こうとしました。

サウルはどうしていたのでしょうか。彼は神さまが勝たせてくださったにもかかわらず、自分が戦いに勝利したという記念碑を建てて、故郷に戻ってきていました。そしてサムエルが来るとなると、悪びれもせず、「わたしは主の御命令を果たしました」と言うのです。彼は、自分は正しいことをしていると思っていたのですが、本当に彼は神さまの御命令を果たしていますか？ 果たしていませんよね。サムエルも、あなたは神さまの御命令を果たしたと言っているが、だとしたら、聞こえてくるこの羊や牛の声は一体なんなのだと問います。でもサウルは、それは兵士たちが神さまに供え物とするためにわざわざとっておいたものですと、平気で返答したのです。もう一度確認します

が、神さまのご命令はなんだったのでしょうか。アマレクのはすべて滅ぼし尽くせましたね。でもサウルは、神さまのご命令のことはすっかり忘れてしまって、自分で勝手に、ああ神さま感謝します、あなたのおかげで戦いに勝利することができました。お礼に勝ち取ったこの最上のものを供えますから、喜んでください、こう考えてしまったんだね。

みんなはどう思いますか。サウルは神さまから与えられた勝利に対して自分なりに感謝していますが、これで本当に感謝になるのでしょうか。神さまありがとうと言っていることになるのでしょうか。ならないですよ。サムエルはサウルに対してこう言っています。「なぜあなたは主の御声に聞き従わず……主の目に悪とされることを行ったのか」。そうです。サウルは自分では感謝しているつもりだったかもしれませんが、しかし、神さまの言われることは聞かず勝手にしてしまったために、かえって神さまから見て悪とされることを行ってしまったのでした。そしてその結果、せっかく神さまから王として選ばれたにもかかわらず、神さまからその王位を奪われることになってしまいました。

サウルは何がいけなかったのでしょうか？それは、神さまのご命令、御声に聞き従わず、自分勝手に、神さまはこうすれば喜ぶに違いないと決め付けて行動したことでした。この時、サウルは神さまを自分と同じところにまで引き下げて考えてしまったのだね。神さまがこの勝利を与えてくださった。神さまがわたしとイスラエルを守ってくださっている。本当にそう考えていたなら、自分の考えや判断の前に、まず神さまの言われることをしっかり聞き、従うことが神さまの喜ばれることだと気付いたはずです。でもサウルは、自分が勝利したことを誇り、自分が神さまに何かできる優秀な人間だと勘違いしてしまったから、神さまは喜ばれることなく、かえってその与えられた恵みをとり去られたのでした。

さて、私たちもサウルが王に選ばれたように、神さまに選ばれて、神さまの独り子のイエスさまの命を犠牲にしてまでも私たちを救おうとされるという計り知れない神の愛のプレゼントが与えられました。ともするとサウルと同じように「自分はとるに足らぬ者」と映っているかもしれませんが、神さまはこんなちっぽけな「わたし」を救うために、御子をさえ犠牲にされたことを、聖書を通して知っています。では私たちはどのように神さまに感謝したらよいのでしょうか。それは、神さまの御言葉を聞き、それに従うことです。自分勝手に、ああ、神さま感謝しますと言って、自分勝手にこうすればよいと振舞うのではありませんね。そうではなく、サムエルも言っています。主が喜ばれるのは、焼き尽くす献げ物やいけにえではなく、むしろ主の御声に聞き従うことである。だから私たちにイエスさまを与えてくださった神さまの御言葉と私たちのために十字架にかかってくくださったイエスさまの言葉、つまり聖書をしっかりと読んで、そこにあらわされている神さまの御心を知ることからはじめましょう。

最後に、サウルは神さまの言葉をサムエルを通して聞いていたにもかかわらず、自分勝手に解釈し、自分勝手に行動して神さまの前に悪を行ってしまいました。私たちも自分勝手に聖書を読んでいたなら、きっとサウルのように間違っただけで、神さまの前に悪と映ることをしてしまうかもしれません。だから、聖書を正しく読むには手助けが必要です。神さまはそのことをご存知で、私たちに聖霊を送ってくださっています。だから聖書を読む前に、神さま、私たちに神さまの言葉を正しく受け取ることができるように聖霊を注いでください。そして受け取った神さまの御心に従うことができるように、わたしを変えてくださいと祈っていきましょう。私たちの感謝が御心に従うものであり、神さまの喜びとなりますように。

(草野 誠)

[今週の暗唱聖句] サムエル記上 15章22節

主が喜ばれるのは焼き尽くす献げ物やいけにえであろうか。

むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。

見よ、聞き従うことはいけにえに勝り、耳を傾けることは雄羊の脂肪にまさる。

〈ねらい〉

恵みのもとに生きる生活とは、神さまの御意志に服従して生きることであると知り、その御意志が明らかにされていることを感謝する。

〈展開例〉

(1) 先週の復習。先週は、罪に支配されず、恵みのもとに生きる生活が与えられたことを知り、感謝することができた。では、恵みのもとに生きる生活とはどのようなものなのだろうか？

と、前振りをして (2) に進んでもよいし、ここで意見交換をしてもよい。

(2) ウ小教理問39を読む。まず、「義務」「啓示」「御意志」「服従」の辞書の意味と、生徒たちがもっているイメージを確認する。

「啓示」「御意志」については、長く教会学校に集まっている子どもは、分かっているようなつもりで使っているし、そんなに間違った使い方はしていないのだが、実は辞書の意味を知らなかったり自分の言葉では説明できなかつたりする。これらの言葉に、豊かなイメージが伴っているとよい。

「義務」「服従」に関しては、教会以外の場で、この言葉がどのように用いられており、生徒たちがどのようなイメージをもっているかをしっかり確認する必要がある。

(3) 「神が人に求めておられる義務」。かなり唐突に登場するこの言葉。なぜこの言葉が出てくるのか？→問3に戻る。聖書が教えていることは「人が神について信じなければならぬこと」と「神は人にどんな義務を求めておられるか」。

プリント（下記）を見ながら、「人は何のために生きるか」「人は何を信じて生きるか」をそれぞれ生徒に答えさせる。記入させるとよい。「神の栄光をあらわすために生きる」、「神さまを信じて生きる」「イエス様の救いを信じて生きる」などの答えが返ってこればOK。

「人はどのように生きるか」とは、救われた私たちにとっては「恵みのもとに生きる生活とはどのようなものか」と同じ質問である。さらに、「私たち」ではなく「神」を主語に置き換えると、「神は人にどんな義務を求めておられるか」という質問になる。その答えは「神さまの御意志に従って生きること」である。

そして、神さまがその御意志を、ご自身から明らかにしてくださるという点が重要である。

(4) 今後の見通し。恵みのもとに生きる生活とは、具体的にどのようなものかについて、これから続けて学んでいくことを伝える。

月 日 名前

人は何のために生きるか？

人は何を信じて生きるか？

人はどのように生きるか？ = 恵みのもとに生きる生活とは？

↓

神は人にどんな義務を求めておられるか？

神の啓示された御意志に服従すること

4月28日 十戒—感謝の道しるべ 教理説教のための聖書黙想

テキスト	出エジプト記 19章1～6節（申命記10章3～5節）
子どもカテキズム	問39
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問40, 41 ウェストミンスター大教理問答 問い95, 97, 98

問39 神さまの御心の、明らかにされた規準はどこにありますか。

答 十戒の中にあります。

〈カテキズムの黙想から〉

私どもの信仰生活とは、日々、神の御心を生きる歩みに他なりません。問39は、まさに「神の御心」が問われています。そうであれば、この問いを、明瞭にわきまえることは、私どもの信仰生活にとって最も基本的でありまた根本的に大切になるはずです。

神の御心とは、神のご意志でありご計画のことです。また、神の御心を問うことは、そのまま、神のご性質や本質を問うことと、重なるはずです。人間で言えば、その人が何を願っているのかによって、その人の存在、人格が見えて来るのと同じです。

それなら、神さまは、何を願い求めておられるのでしょうか。人間の願いや考え、目標は、状況や気分によってさへ、猫の目のように変わってしまうことがあります。しかし、永遠の神の御心、ご計画は、永遠に変わりません。しかも、人間のそれは、途中で挫折し、完全に実現させることは、ほとんど不可能です。しかし、創造者であり主権者なる神の御心は、必ず、果たされます。

さて、神の御心とは何でしょうか。それは、神が人と共に住む世界、神の国の完成です。それは、創造、墮落、救済、完成という救いの歴史（聖書）の中に示された神の御心において鮮やかに示されています。そうであれば、神の御心とは、人間が、神の愛を受け、神との平和にあずかり、神を愛し、隣人を愛する交わりを築くことであることがはっきりいたします。神の国の完成とは、神の平和の支配の完成に他なりません。神の御心とは、神の愛と平和です。愛と平和に生きる神の民、神の国の完成に他なりません。

十戒とは、その意味で、神が、ご自身の愛と平和へと神の民を招き入れるための呼びかけです。聖なる救いへの招きです。そして、それは、命令でもあります。神の激しい愛は、命令という形、掟という形式にまでなるのです。それは、神の愛が真実であり、確かなものであるからです。子どもの安全や幸せを願う親は、子どもが危険な場所に出かけて行くとき、何としても阻止するはずで。そこで、もしも、子どもの好きなようにさせる親がいれば、親失格でしょう。天のお父さまの愛が真実であればこそ、それは、命令になり、掟となるのは、当たり前のことと言えるはずで。

十戒において神の御心は、明らかにされています。私たちは、神の民とされています。そのとき、この愛と平和の命令は、私どもにとって感謝に生きる道しるべともなります。「神さま、ありがとうございます」という神の恵みへの応答のしかたすら、神は、具体的に、私どもの人生に役立つしかたで、明らかにお示しく下さいました。完璧な、「親心」です。

〈テキストの黙想から〉

「今、もしわたしの声に聞き従い／わたしの契約を守るならば／あなたたちはすべての民の間にあって／わたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。あなたたちは、わたしにとって／祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である」。

神の御心は、神の民がまさに神の宝の民となることです。そのためには、神の声に聞き従って、契約を守ることが不可欠です。しかも、神の御心は、ただ単にイスラエルだけを宝の民とすること

ではなく、彼らを通して、世界を完成し、世界の人々を救うことにあります。それが、既に、旧約においても示されているのです。神の民が、この世界のただ中で、十戒を生きたとき、それに徹底的に従うとき、世界は、神の愛と平和にあずかります。ここに、神の民、契約の民、十戒を受けた民の使命と特権があります。そして、世界の平和、つまり完成こそ、神の御心なのです。したがって、それこそが、十戒の目標に他なりません。

〈子どもたちの黙想から〉

信仰は、繰り返し生ける神の御声に聞き従うことです。単に、教理としての「神観」を提示して終わらせてはなりません。ただし、人は、どのような神観を持つかによって、その生活は決定的に影響を受けます。もし、聖書の神を怖い神、冷たい神、厳しい神……というように受けとめるなら、大変、悲しいことであり、大きな損失です。したがって、これは、一生の課題ですが、詩編119編103節にあるように、「あなたの仰せを味わえば／わたしの口に蜜よりも甘いことでしょう」。どの賛美の声をあげられるように、十戒を口ずさめ

るように、子どもたちの心に十戒を説きあかし、届けてゆきたいと思います。

筆者の仕える教会では、主日礼拝式で十戒を毎週唱えます。司式者は、毎週、十戒を唱える前に、適宜自由に、十戒の「用益」について説明します。十戒は、神の愛の言葉であること。人をまことの自由、神の自由の中へ招く言葉であること。神とわたし、人と人が平和に生きて行くための道しるべであること。同時に、十戒のどのひとつをとっても神が要求する水準では守れていないことを認めさせ、悔い改めの心を新しく作りだして下さる御言葉であることなどなどです。これらは、十戒を、厳しく冷たい神の戒律として、受け止めやすい信仰の弱い私ども（新しい方も含みます）の現実を配慮してのことです。子どもたちには、なおさらのことです。

神がご自身の民である愛する子どもたちに、十戒をあたえて下さり、愛と平和の世界、神と共に生きる生活へと招いておられる御心、神の子らに愛を注ごうという親心を深く、味わい、子どもたちと共に喜び、感謝したいと思います。

（相馬伸郎）



テキスト 出エジプト記 19章1～6節
子どもカテキズム 問39

〔単元のねらい〕

信仰生活とは、神の御心を求め、これに従う生活です。神の御心は、神の御言葉によって明らかにされます。したがって御言葉に聴き従う歩みが信仰生活です。それは日々、聖書を読んで、与えられる御言葉を糧にしなが、御言葉に従う歩みです。しかし、神の御心の全体を知ることは、日々の小さな決断にとってもとても重要です。神は、十戒を通してご自身の御心を鮮やかに示してくださいました。それは、神が、私どもと共に生きて、神の愛と平和の支配の中に育てて下さることにあります。神なき世の不自由から解放され、神の子の勝利の自由に留めおいてくださるのです。十戒には、神が、その民、子どもたちを愛する親心が切々と明らかにされています。十戒を唱えることによって、その親心を感謝し、喜び、これに従う志しを新しくされるなら、どれほどすばらしいことでしょうか。

愛と平和の掟を与えて下さる神さま

今週から、「十戒」を学んで、礼拝を捧げます。毎週、大人の礼拝式でも子どもの教会でも唱えていますから、覚えてしまっているお友達も少なくないと思います。これから、主の祈りも十戒も、覚えてしまって大きな声で唱えることができたらすばらしいと思います。ただし、大きな声で唱えるだけのことなら、ちょっと頑張ってみれば、できるかもしれません。今日だけは、先生に言われたので、大きな声で唱えるということもあったかもしれません。でも、毎週、そのように唱えることができるためには、どうすればよいのでしょうか。「十戒ってすばらしいな。十戒を与えて下さった神さまって、すばらしいな。僕たち私たちは、幸せだな。嬉しいな」という気持ちが必要だと思います。

実は昔、先生は、十戒を唱えることは、嫌いでした。もちろん、イエスさまを信じて、罪を赦されて、神さまの子どもにさせていただいたことが心の底から嬉しくて、感謝でなりませんでした。でも、十戒を唱えるとき、イエスさまの優しさとは違うように思ってしまったのです。神さまって、「これこれをしてはならない。あれこれをしてはならない。してはならない、してはならない」って、私たちを縛り付けてゆこうとする、いつも、

叱りつけられているような気がしたからです。おっかない神さま。これをしなければ、罰せられる。これをしなければ、裁かれる……。そのようなイメージがありました。だから、時々、読み返すことはあっても、毎週、礼拝で唱えるなんて、嫌だなんて思っていました。けれども、今は違います。本当に、嬉しい気持ちがあふれて来るのです。

十戒がどのようにして与えられたのかは、後から丁寧に学びます。今朝は、この十戒は、神さまがイスラエルの人々をエジプトの奴隷にされて苦しめられていたところから、脱出させて下さったとき、シナイ山という山のふもとで、モーセに与えて下さった御言葉だということを確認しましょう。しかも、この御言葉は、神さまご自身が、石の板に直接、文字を記されたものなのです。後にも先にもそのように神さまが直接に御言葉を文字に刻まれたことはありません。まさに、特別の御言葉です。それは、はじめに神さまの自己紹介とその後に十の言葉が刻まれています。それで、十戒といいます。

神さまご自身のお考え、ご計画、それを御心といいます。主の祈りでも、御心が天においてなるように、この世界にも実現させてくださいとお祈

ります。その御心です。その御心は、もやもやしたもの、ぼんやりしたものではありません。はっきりとしています。神さまは、聖書の御言葉をとおして語られ、お示しになられたからです。その中でも、神さまが預言者たちによって記されたのではなく御自分で、しかも、羊皮紙ではなく、石に刻まれた御言葉ですから、まったく特別に大切な御言葉だと分かるでしょう。

この十の言葉を読めば、神さまがどのようなお方で、何を願っていらっしゃるのか、何をしようとしていらっしゃるのか、はっきりと分かります。

それは、何でしょうか。先生が、十戒を唱えるとき、しばしば、十戒は、神さまからの愛の言葉ですと、言っているのに気付いていますか。十戒は、神さまからのラブレターなのです。

神さまは、主イエス・キリストの父なる神さまです。イエスさまのお父さんですから、イエスさまのおかげで、イエスさまを信じている僕たち私たちにも、神さまはお父さまとなってくださいました。正真正銘のお父さまなのですから、神さまは、僕たち私たちから「お父さん、天のお父さま」と呼ばれることを、心の底から喜んでくださいます。そして、そのようなお父さまは、僕たち私たちが、いつも幸せにいられるようにしておきたいと願われるのです。これは、当たり前なことではないでしょうか。

皆さんは、お父さんとお母さんに、叱られたことがあると思います。そのときは、決して、嬉しいとは思えないでしょう。お母さんは、すぐに「早くしなさい。ちゃんとやりなさい。」って言うかもしれません。今しようと思っていたのに、「何度言ったら分かるの。」って言われると本当に、つらいですね。「今言ったばかりなのに、言われた先から、もう忘れてる！」って叱られたりする

と、涙が出るかもしれません。

でも、実は、本当に悪いことをしたとき、怒ってくれる人がそばにいるということは、本当に、幸せなことなのです。どうして怒ってくれるのかというと、あなたのことを真剣に思ってくれるからです。「あなたなんかどうなったって、私は知りません」そんな風に思っている人は、叱ってくれません。だから、本当に、悪いことをしたとき、叱ってくれる親、教会の先生は、宝物です。

天のお父さまは、親の愛よりもはるかに完璧な愛で、僕たち私たちを愛してくださっています。永遠の愛、変わらない愛で、もっと深く、強く愛して下さいます。だから、十戒という、これはしてはいけません、こうしなさいという命令を与えて下さったのです。神さまは、僕たち私たちがどんな人間になればよいのか、どうすればこの世界が、よい世界になるのかも真剣に考えて下さっています。それは、神さまがいつもいっしょにいてくださって、神さまの恵みと愛にあふれ、すべての人間が、お互いを愛し合い、敬い合って、喜び合う世界です。つまり、神の国、天国をこの世界につくることです。

そのためには、先ず、僕たち私たちが、十戒を守って生きなければなりません。

池の周りには、柵が設けられています。ここで遊んでは絶対ダメだよ、危ないからね、という看板が立っています。それは、子どもたちを守る大人だったら、当然、禁止することなのです。「ダメなものは絶対ダメ」と叱ってくれる、教えてくれるのは大人の責任であり、優しさです。

十戒を与えてくださった天のお父さまのお心、親心を心から感謝しましょう。十戒を覚え、神さまの愛と平和がいつも伴う毎日を歩んでゆきましょう。
(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] 申命記 10章4節

主は、集会の日に、山で火の中からあなたたちに告げられた十戒と
全く同じものを板に書き記して、それをわたしに授けられた。

〈ねらい〉

十戒を書いたり、その特徴を考えたりする活動を通して、毎週何となく唱えていた十戒について新しい発見をし、この十戒が神さまの栄光をあわらす基準であることを、感謝する。

〈展開例〉

(1) プリント（下記）を見せながら、ウ小教理問40、41を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

(2) 十戒を書いてみよう。3分間、黙って、できるだけ漢字を使って、丁寧に。毎週唱えているので、覚えているところは覚えているけれど、うろ覚えのところはいっぱいあるはず。「漢字で」がミソで、すごい誤変換があるかも。今回も、分かっていないことを確認する作業になるので、生徒のプライドを傷つけないように、楽しんでできるとよい。十戒のプリントを用意し、答え合わせも楽しく行おう。

(3) 十戒の特徴を考えてみよう。十戒を読んで、

気づくことは何だろう？ 生徒に意見を聞いてみる。（以下、94年発行大会出版委員会訳のウ小教理に準拠するため、十戒の文言は口語訳で記すが、それぞれの教会が礼拝で唱えている訳で学習するとよい。）

前半は一文が長いのに後半は短い。神さまの一人称が「わたし」ではなく「あなたの神、主」であることがある。「ならない」という言葉がいっぱい出てくる。前半は神さまのことについてで、後半は人について。など、いろいろな意見を吸い上げる。（メモしておいて次回から活用。意見が出なければ、それはそれでよい）

「ならない」という言葉に線を引いて数を数えてみよう。すべての文が「ならない」で終わっているだろうか？「安息日を覚えて聖とせよ」と「父母を敬え」だけが違うことも自分たちで気がつけるとよい。どこまでが第一戒で、どこからが第二戒かも、話し合って番号をつけると面白い。

(4) 道徳律法の三効用について説明し、救われた私たちにとっては、とくに第三効用が大切であることを強調する。

月 日 名前

服従の基準＝道徳律法

道徳律法が要約的に含まれている＝十戒

道徳律法の三効用

- 1) この世に罪を知らせる。
- 2) キリストに招く。
- 3) 栄光をあらわす。

※第三効用がとても大切

テキスト	マルコによる福音書 12章28～34節
子どもカテキズム	問40
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問42 ハイデルベルク信仰問答 問93

問40 イエスさまが教えてくださった十戒の要約は何ですか。

答 「わたしたちの神である主は、唯一の主である。

心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、

あなたの神である主を愛しなさい」と、

「隣人を自分のように愛しなさい」です。

神と人への愛、二つで一つの愛に生きることです。

〈カテキズムの黙想から〉

私たちの教会では、毎主日、子どもの教会でも、十戒（ただし、簡易版）を唱えています。改革派伝統に立つ教会にとって、主日礼拝式で十戒を唱えることは、何の違和感もないと思います。しかし、他教派では、なお少数であるかもしれません。信条（多くは「使徒信条」と「主の祈り」）は、唱えながらも、「十戒」を唱えないのは、何故でしょうか。十戒において示される神の御心、つまり、人間、ご自身の民を愛し抜く神の親心を正しく受け止められていないからではないかと案じます。改革派伝統に立つ教会で、十戒の代わりに、主イエスが十戒を要約された御言葉を読む教会もあると伺ったことがあります。いろいろな議論があるでしょうが、その思いはよく分かります。神を愛し、隣人を愛することこそ、十戒の精神そのものだからです。

「神と人への愛」の方向性はそれぞれ異なるように思われがちです。しかし、カテキズムは、「二つで一つの愛」と言います。つまり、神を愛するけれども、隣人は愛さないということも、反対に、隣人は愛するけれども、神は愛さないということも、成り立たないからです。ヨハネの手紙一第4章7節以下にこう言われています。「愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです」。愛は神から発出する

ものなのです。まことの愛とは、神からの贈り物です。確かに、ここでの愛とは、教会員相互の愛を示しています。しかし、その愛は、神から与えられたものです。兄弟姉妹を愛さない人は、神を愛していないことになります。そして、神を愛していない人は、キリスト者ではありえませんが、神を愛することと、人を愛することとは、コインの両面のように、切り離すことができません。神は、ご自身の愛を私どもに注いで下さいます。たとえて言えば、神が、私どもを弓矢として、神を愛するという的へと放って下さいます。その的に突き刺さったとき、実は、その裏にある「隣人を自分のように愛する」という的にも命中するのです。

ただし、順序が大切です。神への愛が先行します。神を愛することによって、神の愛は豊かに注がれるからです。こうして、神への愛はさらに深められます。神と私どもとの愛の交わりがいよいよ強められてゆくわけです。それを知れば、神を愛することへの命令ほど、素敵で甘美な命令があるでしょうか。まさに、このご命令においてこそ、神の愛のご性質があらわにされていると言えるはずです。

愛することを否定する宗教や人間は、おそらくいないと思います。人を愛することは、素晴らしいことです。しかし、もし神を第一にするのであれば、どうなるのでしょうか。むしろ、愛情問題こそ、人間の悲しみ、悩み、不安の原因になる

場合が多いのです。それは、人間の愛が常に、不完全で、自己本位なものだからです。神をないがしろにして、人間どうしの愛だけを賛美するとき、人は幸福に生きることはできず、かえって、憎しみ合うことへと転落してしまうのです。十戒の前文に、「わたしは主、あなたの神」とあります。また、主イエスが引用された申命記6章4節に、「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である」とあります。主を主としないところで、愛の関係、平和の関係を堅固に広く築くことはできません。つまり、十戒とは、神がご自身の国をこの地上に実現するための愛の道具であり、平和の道しるべなのです。また、神の御心は、旧約においても新約においても、神の愛と平和の支配が、地上に拡大することにあります。それはまさに、十戒に生きる民であるイスラエルを用いることによって実現される「はず」なのです。新しいイスラエルである教会がこの愛の戒めを実践するとき、教会を通して神の国は、拡大して行きます。

〈テキストの黙想から〉

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」と主は、命じられます。ここで、心（カルディア）、精神（プシュケー）、思い（知性／ディアノイア）そして、力（イスクース）の一つひとつの意味を問い、また愛することとの関係性を議論する余裕はありません。単純に、全身全霊をもって愛するというヘブライ的表現として理解しても構わないと思います。ただし、マルコによる福音書とルカによる福音書10章27節では、「力を尽くして」という表現があり、とりわけ、ルカによる福音書は、善きサマリア人のたとえが語られる個所ですから、ここだけは注目しておきます。神を愛するということは、確かに、人間の心、魂、知性という内なるもののいきいきとした活動なしに始まりません。しかし、それは、同時に、力を尽くすこと、つまり、実際の行動が伴うことが要求されています。愛は、外へと現れ出るわけです。口

先だけの愛ではなく、力を尽くすというこの一句によって、「行いをもって誠実に」（ヨハネの手紙一3:1節）愛することが要求されています。

この徹底した神からの愛の要求は、この神ご自身が、まさに、全身全霊をもって、力をもって私どもを愛しておられるということの裏返しであることこそ、ここで深く味わいたいと思います。神は、父として、限りなく私どもを愛しておられます。人間的に言えば「自信」にあふれています。まことに神ご自身が全身全霊で、そのすべてをもって愛しておられるからこそ、愛する民にも愛を求めることが、おできになられるのです。この愛の要求においてこそ、神の私どもへの激しい愛、真実の愛を見事にあらわすものとなっているのです。その愛は、御子イエス・キリストの十字架において、完全にあらわされました。

〈子どもたちの黙想から〉

大人も子どもも愛される以外に健やかに生きてゆくことはできません。しかし、子どもには、まさに決定的に、生命的に大切なことです。子どもたちは、愛されることを全身全霊で欲しています。子どもたちは、神と人から愛されるために生まれて来たのです。

この御言葉は、神の特別な命令です。「子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい」（申命記6:7）と、文字通り、暗唱が命じられています。それは、この愛の掟においてこそ、子どもたちは、神の愛を確認することができるからです。これを教える親であり教師にとっては、ただ、覚えなさいと教えて済ますわけにはまいりません。神の愛をもって子どもを愛するのでなければ、神の親心は、伝わらないと思います。むしろ、偽善となってしまいます。親は、神の代理です。そのために先ず、私どもが神の愛に満たされ、その管となって、子どもたちに流して行くことを祈り求めてまいりたいと思います。（相馬伸郎）

テキスト マルコによる福音書 12章28～34節
子どもカテキズム 問40

〔単元のねらい〕

最大の掟は、神と人を愛することです。「子供たちに繰り返し教え」（申命記第6;7）るべきものでありと命じられています。なぜなら、私たちの人生は、神に愛し、愛され、自分を愛し、隣人を愛することで充実したものとなるからです。神と隣人を愛することは、徹頭徹尾、神の愛を個人的に知るところ、愛される場所からしか始まりません。神の愛の御心を伝えることがなければ、掟（十戒）は空回りし、律法主義的な畏にはまってしまうはずです。この掟によってこそ、神はご自身の愛を深く示しておられることを深くわきまえたいと思います。したがって、この戒めを教える親と教師自身が、子どもたちをどれほど愛しているのかが問われます。この掟は、神からの愛を求めさせ、そして、愛に生きる者として立ちあがらせる掟なのです。説教題にあるように、神の愛を証しする説教となりますように。

力のがぎりに愛してくださる神さま

ある日、イエスさまは、ひとりの律法学者から質問されました。「聖書のすべての掟の中で第一の掟にしなければならないのは、どれでしょうか」。そのとき、教えてくださったのが、今朝のカテキズムの答えなのです。今朝の暗唱聖句にもしています。もう一度、カテキズムの中にある御言葉だけを唱えてみましょう。「わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」「隣人を自分のように愛しなさい」。この御言葉は、必ず、覚えてください。今朝の暗唱聖句は、特別に大切だからです。なぜなら、神さまが、こうお命じになったからです。申命記6章7節にあります。「子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい」。つまり、僕たち私たちは、いつでもどこでも、神さまを愛し、隣人を愛することを、教えられ続けなければならないのです。

イエスさまは、この古い掟を、もう一度、語りなおしてくださいました。これこそ、あらゆる掟の中で、一番大切なものだと教えてくださったのです。そして、実は、この神さまを愛し、人を

愛する愛、二つで一つの愛は、十戒全体を貫く棒のようなものなのです。また、その一つひとつの掟の真髄、あるいは目標なのです。要するに、神さまが、十戒を通して僕たち私たちに何を求めておられるのかということを一言で仰ったのです。それが、神さまと隣人を自分のように愛することです。神と人を愛すること、愛に生きること、これこそ神さまを信じて従う民、僕たち私たちにあって、最も大切なことだということです。

皆さんは、神さまを愛していますか。愛することとは、大切にすることということです。天のお父さまを全身全霊で、自分の力の限りに愛していますか。しばらく考えてみてください。

次に、皆さんは、自分のまわりにいる人、お父さんやお母さん、兄弟、家族を愛していますか。学校のお友だちを愛していますか。大切にしていますか。どうでしょうか。

本当に、神を心の底の底から、力の限りに愛することと、自分を大切にするようにまわりの人たちを、自分のように親しくしてあげるということがどれほど難しいことか、分かると思います。もしかすると、「大きな声では言えないけれど、自分は、少しはできていると思うけどな……。きつ

と、少しならいけてると思うけど……」そのように思うお友だちもいるかもしれませんが。けれども、よく考えましょう。神さまがお命じになられるのは、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして……ということです。徹底的に、これで限界という線をさらに越えるような深さ、熱意をもって愛するということです。よく考えると、神さまが求めておられるそのような愛の深さ、広さには、ぜんぜん届いていないことが分かります。そうです。それこそが大切なことです。つまり、この戒めを守ることは、自分の力だとか努力だとか、性格だとかでなんとかならない、実行できないということを知ることが大切です。自分の中には、神さまの愛の掟を守る力がないことを知ることが大切です。

イエスさまは、ひとりの律法学者に、善きサマリア人の譬え話をされました。確かに、その律法学者は、神さまの御心は、愛の掟に生きることだと知っていました。頭でちゃんと理解していました。しかし、実行していませんでした。つまり、自分の中に、愛がないことを認めないで、自分は愛の掟を知っているのだから、きちんと守っているのだと、まったく勘違いをして、自惚れていたのです。だから、イエスさまは、祭司やレビ人とは違って、ユダヤ人が軽蔑していたサマリア人が、強盗に襲われて半殺しの目にあって道に倒れたユダヤ人に近づいて、自分のできるかぎりのことをしてあげたお話をなさったのです。この譬え話によって、イエスさまは、本当の愛は、頭と心のなかだけで考えているものではなく、実際にそれを行うことだと教えていただきました。

でも、今、お話したように、僕たち私たちには、そもそも、神さまがお命じくださった愛で愛する能力がありません。あのサマリア人のように、いじめられている人の隣人、友だちになる勇氣もあ

りません。いったいどうすればよいのでしょうか。十戒や今朝の掟を聴いても、落ち込むばかりかもしれません。

心を高く、イエスさまに上げましょう。神さまは、できないことを命じられる神さまではありません。先生は、この神さまの掟の中から、神さまの愛を読みとっています。つまり、天のお父さまこそ、先生のことを全身全霊で、力の限り愛しておられるということ、この掟から思いたすのです。本物の愛は、いのちまで、投げ出してしまうものです。天のお父さまは、身をもって教えてくださいました。御子なる神さまイエスさまを、僕たち私たちに与えて下さいました。イエスさまは、いのちをかけて、イエスさまを愛さなかった人たち、裏切った人たちのためにも、十字架について下さいました。ここに、ほんものの愛があります。この愛で、僕たち私たちは、今朝も愛されているのです。

この礼拝式で、僕たち私たちは、神さまの限らない愛を注がれています。だから、愛のない僕たち私たちでさえ、赦され、神さまの子どもでいられるのです。

そして、僕たち私たちは、知らない間に、神さまを愛し、イエスさまを愛しているでしょう。それは、奇跡です。神さまの愛を受けているからです。大切なことは、もっともこの愛を受けることです。満たされたいと思います。そして、驚くべきことですが、僕たち私たちも、本当に小さく、わずかなのですが、既に、神さまを愛し、お友だちを愛し始めていると思います。それは、神さまからもらった愛があるからです。

今週も、毎日、お祈りしながらこの御言葉を口ずさんで、神さまに愛されていることを感謝しましょう。そのとき、知らない間に、お友達を大切に、親切にしてあげられるようになってはいます。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マルコによる福音書 12章29～31節

イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。

『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。

心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』

第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。』

〈ねらい〉

最も大切な二つの戒めを知り、イエス様がまとめてくださった十戒の要約であることを感謝する。

〈展開例〉

(1) 聖書の読み取り。28節「彼ら」って誰ら？「彼らの議論」って何？ 18節、13節、1節、11章27節と遡り、祭司長、律法学者、長老たち、サドカイ派、ファリサイ派、ヘロデ派などの言葉を、生徒に見つけさせる。それぞれの言葉の意味について生徒に説明させる。聖書巻末の用語解説を見させてもよい。たいていの中学生は自分で発見できたら嬉しいので、いっしょに喜ぼう。

この出来事はいつの話？ イエス様のご生涯の最後の一週間の話であることをチェック。イエス様は今、殺されそうになってる（11章18節）。

そんな状況で28節。イエス様とサドカイ派の人々との議論を聞いていた律法学者が、質問する。どうして質問したの？（イエスが立派にお答えになったを見て）なんて質問したの？（聖書箇所をそのまま音読させる）

「あらゆる掟」と言ったとき、そのイメージをあなたの生徒はもっていますか？ レビ記、民数記、申命記などは、中学生が読むと（いろんな意味で）大変面白いので、ぜひ自分で読むことを勧めよう。

質問へのイエス様の答えは？ 第一と第二、この二つに勝る掟は他にない。第一の掟も、第二の掟も、暗唱できる生徒もいるよね。時間があれば、引用元の聖書箇所を開かせるとよい。（申命記6:4、レビ記19:18）。

(2) プリント（頁）の「要約」の部分を書き込ませる。

①十戒を「神への愛」の部分と「人への愛」の部分に分けると、どこで分かれるか話し合わせ、第四戒と第五戒の間に線を引かせる。

②第一戒～第四戒までの要約と、第五戒～第六戒までの要約を書き込ませる。聖書の言葉をそのまま書いても、ウ小教理の問42を写して書いても、自分の言葉でまとめて書いても、暗唱している聖句を書いてよい。

(3) 神への愛は「全身全霊をつくして」だが、隣人への愛は「自分を愛するように（その程度）」でよい。これを取り違えて、隣人への愛や信頼に全身全霊をかけようとして、自分や相手に対して失望を感じることがあるので、注意を促す。

イエス様の答えに対する律法学者の返事がまたよい。34節末尾、イエス様を認めたくないユダヤ指導者層も質問するのをやめる。

(4) 今後の見通し。神への愛と人への愛についてこれから学ぶこと、今日使ったプリントはまた6月から使うので持ってくるように伝える。あるいは回収しておいて、その都度配布して書き込ませる。

5月5日と6月5回の計6回、59頁のプリントを使用する。

生徒用の書き込みのない枠だけのプリントと、教師用の回答例入りを用意した。

A4かB4に拡大して使用。

回答例はあくまで例なので、生徒が自分で考えて書き込むとよい。

※筆記用具を持参させるよう声がけをすること。なおかつ、生徒に貸せる筆記用具を用意しておくこと。

	要 約	求められていること	禁じられていること
第一戒			
第二戒			
第三戒			
第四戒			
第五戒			
第六戒			
第七戒			
第八戒			
第九戒			
第十戒			

教師用の回答例。生徒には、枠だけのプリントをA4かB4に拡大して使用。回答例はあくまで例なので、生徒が自分で考えて書き込むとよい。

十戒の学び

名前

	要約	求められていること	禁じられていること
第一戒	心をつくし精神をつくし力をつくし思いをつくして主なるわたしたちの神を愛すること	神を、「唯一のまことの神・私たちの神」として知り、認める。ふさわしく礼拝し、神の栄光をあらわすこと。	まことの神の否定。私たちの神として礼拝せず、栄光をあらわさない。他のものに礼拝と栄光を献げること。
第二戒		神が聖書の中で指定された通りの宗教的礼拝の規定のすべてを受け入れ、実行し、純正完全に保つこと。	像による神礼拝。聖書に指定されていないあらゆる他の方法による神礼拝。
第三戒		神の御名、称号、属性、規定、御言葉、御業をきよく敬虔に用いること。	神がご自身を知らせるのに用いておられるどんなものをも、汚したり濫用したりすること。
第四戒		週の第一日を神に対してきよく守ること。すべての時間を神礼拝に費やし、必用やむを得ない業とあわれみの業以外は、終日きよく休むこと。	求められている義務を怠る・不注意に果たす。怠惰、罪を犯すこと、世俗の食や娯楽を思い語り行うことによって汚すこと。
第五戒	自分を愛するように私たちの隣人を愛すること	あらゆる人が目上、目下、対等といういろいろな地位と関係において持つ名誉を守り、義務を果たすこと。	あらゆる人がそのいろいろの地位と関係において持つ名誉と義務を、無視したり、それに反する何かを行うこと。
第六戒		私たち自身の命と他人の命を守るために、あらゆる正当な努力をすること。	私たち自身の命を奪うこと、隣人の命を不当に奪うこと、その恐れのあるようなすべてのこと。
第七戒		心、会話、振舞において、私たち自身と隣人の貞潔を守ること。	すべてのみだらな思い、言葉、行動。
第八戒		私たち自身と他人との富や生活状態を正当に確保し、向上させること。	私たち自身または隣人の富や生活状態を不当に妨げる事、その恐れのあること。
第九戒		人と人との間の真実と、私たち自身と隣人の名声とを、保ち、高めること。特に証言するときに。	真実を損なう事、私たち自身や隣人の名声を傷つけること。
第十戒		私たち自身の状態に全く満足すること。隣人とその所有物とに対して、正しい愛の気持ちを持って満足すること。	私たち自身の身分に満足せずに、隣人のしあわせをねたんだり恨んだりすること。隣人の所有するものに法外な意向や愛着を寄せること。

5月12日 贖いのみわざ—過越 教理説教のための聖書黙想

テキスト 出エジプト記 12章21～28節

子どもカテキズム 問41, 42

参照教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問43, 44

ウェストミンスター大教理問答 問101

問41 十戒の前書きは何ですか。

答 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、
奴隷の家から導き出した神である」です。

問42 この意味は何ですか。

答 かつては、神の民をエジプトから救い出すことによって、
今は主イエス・キリストの十字架と復活の御業によって、
神さまは私たちの神さまとなってくださいました。
ここにすでに、神さまの愛の御心があらわれ出ています。
この神さまの愛の支配のもとではじめて、
私たちは、幸せに、また自由に、生きることができるのです。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

出エジプト記12章は、主の過越について語る御言葉です。全体を見渡しておきましょう。

1～20節 主が告げられる

1～13節 主の過越について

14～20節 過越を記念すること

21～27節 モーセが民に告げる

21～23節 主の過越について

24～27節 過越を記念すること

28節 命じられたとおり行った

29～36節 初子が撃たれる

37～42節 エジプトからの出発

43～49節 過越祭の規定

50～51節 主はイスラエルを導き出された

単元の聖書箇所は21～28節まで、モーセが主の御言葉を民に伝えるところが取り上げられますが、12章全体を踏まえておくことが大切です。主がモーセとアロンに告げて、それをモーセが民に伝えます。そのときに、主が過ぎ越されることとそれを子孫に伝えるべきことが一つのこととして告げられています。これは、この出来事がイスラエルの民の出発点、原点になるからです。それは、2節に「この月をあなたたちの正月とし、年

の初めの月としなさい」とあって、この過越の出来事を出発点としてイスラエルの暦を数えるようにと命じられることにも示されています。民の共通の原点とすべき出来事なのです。

主の過越は、主なる神がエジプトにおいて行われた十の災いの最後に位置づけられます。最後にして、最大の災いであり、エジプト中のすべての初子が死ぬという災いです。これは、ファラオに代表されるように、エジプトが主の御前にかたくなであり、主の御言葉に聞き従おうとしなかったためです。その裁きとして、初子が撃たれます。

本来、イスラエルの民もその例外ではありません。イスラエルの民も、主の御言葉に聞くことの遅い、かたくなな民でした。しかし、主は、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約に真実であります。それゆえ主は、エジプトとイスラエルを区別して取り扱われます（出エジプト11:7）。小羊の犠牲によって主が過ぎ越してくださるとは、神の憐れみ、恵みの御業にほかなりません。

過越は、小羊の血による贖いの出来事です。傷のない小羊が屠られ、その血を鴨居と柱に塗ります。その肉は火で焼いて食べます。また、酵母を入れないパンを食べること、腰帯を締め、靴を履き……という旅支度をしておくことなどが命じら

れています。その夜、主は、エジプトの国をめぐり、すべての初子を撃たれます。しかし、鴨居と柱に塗られた血をご覧になって、その入り口を過ぎ越されます。

イスラエルの民は、この主のご命令のとおりに行いました。すなわち、主の御言葉に聞き従うことによって、イスラエルの民は、贖い出されました。エジプトから導き出され、それは、ただ奴隷から自由にされたということではありません。神の御言葉に聞き従う神の民、神を礼拝する民とされた、ということです。ですから、この贖いの御業が土台となって、十戒が与えられました。

この犠牲の小羊は、真の贖い主イエス・キリストを指し示しています（ヨハネ1:29）。

〈子どもカテキズムの解説〉

この単元は、十戒の序文、前書きを扱います。前書きの御言葉で、主なる神は御自身のことを名乗り、自己紹介しておられます。具体的には、主なる神とイスラエルの民との関係が明らかにされます。神と神の民との関係です。また神の救いの御業が語られます。これらは、先行する神の恵みであり、十戒の前提また根拠です。十戒の本文は、神が神の民に対して求められることが明らかにされており、いわば契約内容にあたります。前文では、その十戒の根拠、前提が確認されるのです。

神は、「あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神」であり、この出エジプトの御業を根拠として、神はイスラエルの民に対して、「私は主、あなたの神」と宣言されました。この関係に基づいて、十戒の本文が語り出されます。

十戒の根拠となる出エジプトの御業の中心が過越です。過越において、主なる神はエジプト中のすべての初子を撃たれました。それは神の御言葉を聞こうとしない、かたくなさの罪ゆえでした。イスラエルの初子は撃たれず、主は過ぎ越されました。それは決してイスラエルの民に罪がなかったからではありません。過越は、主の愛と憐れみの御業にほかなりません。主はイスラエルの民を選び、憐れまれました。それは、決してイスラエルの民が強かったからでも、優秀だったからでもありません。かたくなな、弱く貧しい民でありましたが、主の愛と真実の故に憐れみを受けたので

す。主の憐れみの故に、小羊を犠牲としてほふることが命じられ、小羊をいけにえとして、主が過ぎ越してくださいました。イスラエルの民は、主の憐れみの故に生かされたのです。

この憐れみの御業、過越に基づいて、出エジプトに基づいて、十戒の御言葉が語り出されます。過越という贖いの御業によって、神は私たちの主、イスラエルの神とされました。私たちを贖い出して、私たちが神のもの、神の民としてくださいました。主は、イスラエルの民に対して、この憐れみの中にとどまるようお求めになって、その手引きとして十戒を与えてくださいました。十戒は、主の憐れみと恵みに生きることを教える指針であり、神の愛の御言葉にほかなりません。私たちは、この十戒から、主にどのように感謝をあらわすべきか、どのような生き方を神が喜ばれるのかを学び取り、感謝の生活を始めるのです。

この意味で、十戒は、私たちが縛り付けるものではなく、本来の意味で自由にして、私たちが生かすための神の御言葉です。罪に縛られて不自由になっている私たちが解き放ち、本来の人間らしいあり方を取り戻させてくれるのです。

〈子どもたちに対して〉

この単元では、問42の答の「かつては、神の民をエジプトから救い出すことによって」の部分を取り上げます。私たちキリスト者はキリストの十字架の贖いによって救い出されました。しかし、だからといって、旧約の過越の御業は関係ないではありません。過越の御業とキリストの贖いは一つの連続線上にある出来事です。神の民に連なる者として、主の過越の御業についても自分自身のこととして受け止めたいと思います。

子どもたちにとって、小羊を屠り、その血を塗るという行為は、とても印象的なことではないでしょうか。小羊を犠牲として、主なる神は私たちに罪から命へと贖い出してくださいました。そして、それは、神の小羊である主イエス・キリストへと向かうものです。そこでは、キリストの血が流されました。血による贖い。それほど高い犠牲が支払われて、私たちは神のものとしてされています。子どもたちと一緒に神の御業に驚き、神を賛美することができればと思います。（望月 信）

テキスト 出エジプト記 12章21～28節
子どもカテキズム 問41, 42

〔単元のねらい〕

十戒をとおして感謝に生きる生活を学ぶに際して、十戒という神の御言葉がどのようにして与えられたのか、また、どんな目的で与えられたのかを知ることが大切である。十戒は神の「戒め」であり、私たちの果たすべき「義務」が教えられている。しかし、この戒めが与えられた理由と目的を考えると、ただ私たちの「義務」としてだけ考えるべきものではないことが分かる。むしろ、その根底には神の愛と献身があるのであり、神の愛に感謝して生きるための手引きにはかならない。過越の御業を知ることとおして、十戒の恩恵的な性質を学び取りたい。

主の過越

今日から、十戒の御言葉を学び始めます。今日のカテキズムは、十戒の前書きです。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。十戒は、神様の十の戒めの御言葉ですが、その最初に、前書きがあるのですね。この前書きがとても大切なのです。

皆さんは、初めてのお友だちとお話をする時に、どういう言葉で始めますか。「わたしの名前は〇〇〇〇です。□□□□に住んでいます」。そんなふうに言って、自己紹介をしませんか。自分のことを紹介して、話し始めるのだと思います。

神さまも、十戒を私たちに与えてくださるときに、最初に自己紹介をしてくださりました。それが十戒の前書きです。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。ここには、神さまのお名前があり、神さまがどのようなお方であるのか、何をしてくださったお方なのかということが言われています。「わたしは主」、ですから、「主」というお名前です。私たちは、神さまを「主」とお呼びします。そして、今日、大切に学びたいことは、この神さまがイスラエルの人びとをエジプトの国から導き出してくださったことです。神さまは、イスラエルの人びとをエジプトの国から導き出して、神さまを礼拝する民としてくださいました。

今日の御言葉は、出エジプト記12章です。イスラエルの人びとは、むかし、エジプトで奴隷の生活をしていました。皆さんは、ヨセフの物語をおぼえていますか。ヤコブの息子のヨセフがエジプトの総理大臣になって、ヤコブの家族はエジプトに移り住んだのでしたね。ヨセフに招かれてエジプトにきました。ですから、最初は、エジプトの王様（ファラオ）をはじめ、エジプトの人びとから大歓迎されて、新しい生活を始めたのです。けれども、時代が移り変わり、ヨセフのことを知らない王様が登場しました。また、イスラエルの人びとの数が増えて、だんだん大きな民族になっていきました。すると、エジプトの王様は、イスラエルの人びとを恐れて、イスラエルの人びとにとっても厳しい労働をさせるようになりました。それを奴隷と言います。イスラエルの人びとはエジプトの国の奴隷にされてしまったのです。それは、厳しい労働というだけでなく、神さまを礼拝することができない生活でした。イスラエルの人びとは、神さまを礼拝することさえできない、つらい生活をさせられたのです。

神さまは、そのイスラエルの苦しみを覚えておられました。神さまは、イスラエルの人びとを助け出すために、モーセという人を与えてくださいました。イスラエルの人びとは、モーセに指導されて、エジプトから連れ出されます。

そのために、神さまは、モーセをとおして、イスラエルの人びとをエジプトから去らせるよう、エジプトの王様にお命じになりました。そして、それを聞こうとしないエジプトの王様に十の災いと苦しみを送られました。エジプトの王様は、イスラエルの神さまなど知らないと言って、神さまの御言葉を聞こうとしません。そのため、神さまは、蛙の災いや蛇の災い、暗闇の災いなどを与えられました。そして、とうとう十番目、最後に、いちばん大きな災いを与えられました。それが今日の御言葉に出てくる過越の御業です。

神さまは、エジプトに対してもっとも激しい苦しみを与えることにされました。エジプトに生まれた「初子(ういご)」をすべて撃たれるという災いです。それは、人間の子どもでも、家畜の子どもでも、すべて死んでしまうのです。長男として生まれたものは、すべて死んでしまう。そういう恐ろしい災いでした。その災いをとおして、神さまは、ご自分が生けるまことの神であることをエジプトの王様に知らせようと言われたのです。

そのときに、神さまは、イスラエルの人びとにおっしゃいました。小羊を殺して、その血を家の柱と鴨居に塗りなさい。その夜は、その小羊の肉を焼いて食べなさい。そうすれば、神さまの災いから助けられますよ。神さまは、モーセをとおして、イスラエルの人びとにお命じになりました。そして、イスラエルの人びとは、その神さまの御言葉に聞き従って、小羊の血を家の柱と鴨居に塗りました。夜にはその肉を焼いて食べ、一歩も外に出ませんでした。

その夜、神さまは、エジプトの初子を撃つために御使いを送られました。エジプトの人びとの初子は、人間の子どもも家畜の子どもも、みな撃たれて死んでしまいました。けれども、神さまの御使いは家の柱と鴨居に塗ってある血を見て、イスラエルの人びとの家は通り過ぎてくれました。通り過ぎたから、「過ぎ越し」です。イスラエルの人びとは、こうして、神さまの災いを逃れることができました。そして、エジプトの王様は、これ

以上、イスラエルの人びとをそのままにしておく、エジプトが減ぼされることになってしまうと恐れて、イスラエルの人びとをエジプトから追いつ出すことにしました。そうして、イスラエルの人びとは、追いつされるようにして、エジプトを去ることができたのです。

イスラエルの人びとは、自分の力でエジプトから出ることができたわけではありません。神さまが、過越という不思議な御業を行って、連れ出してくださいましたのです。イスラエルの人びとも、神さまの御言葉がなければ、エジプトの人びとと同じように初子を撃たれて、苦しみと悲しみを受けなければならなかったでしょう。けれども、神さまは、イスラエルの人びとを愛して、小羊の犠牲によって助かることができるようにしてくださいました。そして、イスラエルの人びとは、エジプトから出て、奴隷として生きなくてよいだけではありません。自由に神さまを礼拝して生きることができるようになりました。

十戒は、この恵みの神さまがイスラエルの人びとに与えてくださった御言葉です。エジプトから導き出してくださいました神さまに、どのように感謝をあらわしていけばよいのか。みんなも、善いことをしてもらったときに、「ありがとう」と言いますし、行いでも感謝を示したいと思うでしょう。十戒には、神さまにどのようにして感謝をあらわすことができるのか、ていねいに教えられています。十戒は、わたしたちの感謝の手引きです。

出エジプトや過越は遠い昔の出来事ですが、私たちと関係ないことはありません。小羊を犠牲としてくださった神さまが、私たちの罪の赦しのために、イエスさまを神の小羊として与えてくださいました。過越の御業とイエスさまの十字架の贖いは一つです。私たちは、今、イエスさまの十字架の御業に感謝して、十戒を行うようにされています。十戒を学び、神さまに感謝をあらわして、私たちは神さまに守られて生きることができるようです。(望月 信)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 20章2節

わたしは主、あなたの神、
あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。

〈ねらい〉

出エジプトの過越について知り、十戒の序文との関係を理解し、感謝する。

める。子どもや子孫は、これから後に生まれてくる子どもも含まれている。「滅ぼす者の災い」は、他の訳では「滅びの災い」となっている。

〈展開例〉

(1) 聖書の読み取り。この出来事はいつの話？
→出エジプト。過越の祭り。今月の10日(3節)。えっ？ 違うんじゃない？ この月の14日だよ(6節)。この月って何月なの？ お正月？ 今の暦だと何月？ 3月から4月でしょ。何で？ イースターだから。と言った話を生徒間でできるとよい。聖書の末尾に暦の表が載っているものもあるので、それを見てもよい。

(2) 登場人物は誰？

→モーセ、イスラエルの民(人々)、長老、主、滅ぼす者、エジプト人、アロン、家族、子ども、子孫。それぞれ、どのような立場の人かをまと

(3) 何が起こったの？

→22～23節を丁寧に読む。過越の犠牲の小羊の血を見て、主が災いを過ぎ越される様子を豊かにイメージできるとよい。

24～27節に注目し、過越の儀式を代々続けることで、イスラエルの子孫にこの出来事を伝えるように命令されたことを押さえる。

(4) 下記プリントの十戒の序言を読む。この文を読んだとき、上記の出来事がイスラエル人にはすぐに想起されること。また、私たちが毎週十戒を唱える度に、今日習った箇所を想起することを伝える。過越以外にも、出エジプトの一連の物語が想起できるとよい。

月 日 名前

十戒の序言

わたしはあなたの神、主であって、
あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。



1. 聖霊の働き

使徒言行録2章14節以下は、ペンテコステの出来事の直後に使徒ペトロがエルサレムの人々に語った説教です。ここでは37～39節を中心にしたいと思います。

この聖書箇所は、聖霊のお働きとは何かということを確認に語り示しています。聖霊のお働きとは十字架の言葉、キリストの言葉が語られるとき、その説教とともに（すなわちキリストの言葉と切り離すことのできないしかたで）働いて、十字架の言葉の真理、救いの真理を人々にさとらせてくださることで、聖霊はイエス・キリストのみ言葉、十字架の言葉に忠実に仕える霊です。聖霊は信じる者たちに十字架の言葉を理解させ、信じ受け入れることができるようにしてくださるので、

コリント一2章1節は、十字架の言葉を「神の秘められた計画」と言っています。十字架の言葉は「神の力」(1:18)であり、同時に秘義、奥義です。十字架の言葉が奥義と呼ばれるのは、それが人間の知恵によっては理解し得ないものだからです。この世のいかなる知恵をもってしても、十字架の言葉は理解し得ない。だれでも聖霊によらなければ、イエスを主と告白することはできない(コリント一12:3)。その意味では、十字架の言葉はこの世に語り示されている一方で、この世の目からは隠されています。

ですから十字架の言葉を理解するためには、聖霊の助けと導きが必要です。聖霊は十字架の言葉の神秘を解き明かしてください。聖霊の導きと助けとがあったからこそ、わたしたちは十字架の言葉を信じる事ができたのです。また、十字架の言葉のもつ恵みの力に今生かされているのです。さらに、この十字架の言葉をのべ伝えることが教会の宣教のわざ、伝道のわざです。だからこそ、伝道は聖霊の力を受けて担われるのです。

さて、ここでペトロは、まっすぐに主の十字架について語ります。ペトロは36節で「あなたが

たが十字架につけて殺したイエス」と言っています。もちろん、この場に集まって説教を聞いている人々は主イエスの十字架に直接手をくださったわけではありません。けれども驚くべきことに、これを聞いた人々は「大いに心を打たれ」「わたしたちはどうすればよいのですか」と言ったのです(37節)。それはペトロの語る十字架の言葉の説教によって真理に触れたからです。十字架の言葉を聞き、(人に十字架の言葉の真理をさとらせる)聖霊のお働きによって、彼らは主イエスを自分の手で十字架につけた人々の中に、自分自身を見たのです。自分なのか、他のだれかのかにかかわりなく、人間そのものを見たのです。自分自身を含めておよそ人間とはどのような存在なのかということ、十字架のもとに見たのです。「ナザレのイエスを／十字架にかけよと／要求した人／許可した人／執行した人／それらの人の中に／私がいる」(水野源三)。

2. 救いの御名

ペトロは救いの道をはっきりと示します。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい」(38節)。

イエス・キリストの名。この名はすばらしい。この御名には救いの力がある。この名によって洗礼を受けなさい。そして、罪を赦していただきなさい。実に、イエス・キリストはあなたの罪を赦すため、あなたを罪から救うために十字架に死なれた。イエス・キリストの恵みは、罪の赦しの恵みである。この名を信じるなら、どんな罪も赦される—これもまた、人が十字架の言葉を聞き、十字架の言葉を説き明かして下さる聖霊の導きを受ける時に知ることのできる事なのです。

3. 聖霊を受けることの恵み

さらにペトロは言います。「そうすれば、賜物として聖霊を受けます」(38節)。

イエス・キリストの御名を信じて洗礼を受ける者には、聖霊が与えられます。聖霊が与えられることほど素晴らしいことはありません。わたしたちのもとに来られ、わたしたちをキリストとそのすべての恵みにあずからせ、わたしたちにキリストの言葉を教え、十字架の言葉を理解させてくださる方。キリストにあってわたしたちを慰め、わたしたちのためにご自身もうめきつつ父にとりなしてくださり、わたしたちをキリストの命をもって生かし、永遠にわたしたちとともにいてくださる方。そのお方が、わたしたちのひとりひとりにも与えられるのです。

聖霊が与えられる。これこそ人生の最大の備えです。聖霊がいつまでもわたしたちとともにいてくださること。このことを知るにまさって心強いことはありません。

わたしたちはこの世では貧しいかもしれませんが。みずぼらしいかもしれませんが。わたしたち自身は誇るべき何物をも持っていません。けれども心配することはありません。不安に思う必要もありません。聖霊が与えられることにまさる平安はありません。罪赦されて生きる、キリストの復活の命、永遠の命の祝福に生かされる。これにまさる力はありません。

わたしたちにも聖霊が与えられている。これがペンテコステの祝福です。このことを心に刻みつけながら、主の恵みを心に刻みつけながら、主が備えてくださっている喜ばしい命、よろこばしい人生を生き抜きたいのです。聖霊にとまなわれつつ、主イエスご自身の霊に導かれつつ、生き抜きたいのです。

(木下裕也)



(単元のねらい)

「聖書黙想」でも触れたように、37～39節に焦点を当てている。信じる者たちのうちに今も生きて働いておられる聖霊のお働きを、聖書に即して正しく理解したい。人に十字架の救いの真理を語り示し、イエス・キリストを信じる信仰へと導いてくださる聖霊の恵みのお働きを覚えつつ、ペンテコステを祝いたい。

聖霊を受ける祝福

今日はペンテコステ、聖霊なる神さまが地上に来てくださった日です。イエスさまは十字架に死なれ、三日目に永遠の命によみがえられ、そして天の父のみもとに昇られました。

イエスさまが天に昇られたということは、地上にいる私たちから離れてしまわれたということでしょうか。そうではありません。イエスさまは十字架に死なれる前から、聖霊を与えてくださると約束しておられました。そして約束どおりに、十字架から50日めに聖霊をこの世に遣わしてくださったのです。

聖霊はイエスさまの霊です。ですから聖霊が来てくださったというのは、イエスさまご自身が来てくださったことと同じです。聖霊は私たちのうちに住んでくださり、私たちを天におられるイエスさまとしっかり結びつけてくださいます。聖霊において、私たちはイエスさまとひとつです。聖霊において、イエスさまはいつまでも私たちとともにいてくださるのです。

聖霊のお働きとは何でしょうか。それは、私たち人間が神さまのみ言葉を理解し、信じ、受け入れるようにしてくださることです。神さまは言葉一聖書のみ言葉によってご自身をあますところなく示してくださいます。ただ、聖書は神さまのみ言葉ですから、神さまの真理を理解するためには聖霊の助けと導きが必要です。聖書のみ言葉がときあかされる時、聖霊はみ言葉とともに働いて、神さまの救いの恵みと真理を人々にわからせてく

ださるのです。

今朝の聖書箇所は、ペトロがエルサレムの人々に語った説教です。ペンテコステー聖霊が来てくださった恵みと祝福の中で語られた説教です。ペトロ自身も聖霊を受けて、このみ言葉を語りました。そして聖霊はこの説教を聴く人々の一人一人にも働かれ、イエスさまの十字架のみわざについて語り示してくださいました。人びとの心を照らして、イエスさまを信じることができるよう導いてくださいました。イエスさまに結ばれ、イエスさまの命に生かされる人につくり変えてくださいました。聖霊はそのようにして働かれるのです。

ここにはとても不思議なことが起こっています。ペトロは、「あなたがたが十字架につけて殺したイエス」(36節)と言っています。でも、この時ここに集まって説教を聞いていた人々はイエスさまを直接に十字架につけたわけではありません。自分の手でイエスさまを殺してしまったわけではありません。わたしはイエスを十字架につけたわけでもないのに、なぜそのように言うのか、人びとはそう憤慨してもおかしくはなかったのです。

けれども驚くべきことに、これを聞いた人びとは「大いに心を打たれ」「わたしたちはどうすればよいのですか」と言ったのです(37節)。自分の罪に心を刺され、救われることを願ったのです。なぜでしょうか。聖霊が働いてくださったからです。人びとは、ペトロの語る十字架の言葉の説教

によって神さまの真理に触れたのです。イエスさまを十字架につけた人びとの中にある罪が、実は自分自身の中にもあるのだということをさどったのです。

水野源三というクリスチャンの詩人がおられます。幼い時に伝染病にかかって全身の自由を失い、生涯寝たきりの生活を送った方です。家の応接間から一步も出ることができなかつたとのことでした。けれどもある時聖書と出会い、イエスさまを信じました。そして神さまをほめたたえるたくさんの詩や短歌や俳句を残しました。自分では話すことも書くこともできませんから、お母さんにつくってもらった五十音図を使って、伝えたい文字に来るとまばたきで合図する、そういうしかたで作品を書かれたので、「まばたきの詩人」と呼ばれています。

この方は、イエスさまを心の底から喜んで生き抜かれた方です。けれども、こういう詩も書いておられます。「ナザレのイエスを／十字架にかけよと／要求した人／許可した人／執行した人／それらの人の中に／私がいる」

聖霊が、このような理解へとこの方をも導かれたのです。

聖霊のお働きは、そのように私たち人間に自分の罪をさどらせることにはとどまりません。ペトロはここで、その罪から救われる道をはっきりと語り示します。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい」(38節)。

ペトロは人びとに呼びかけるのです—イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。イエスさまはあなたの罪を赦すた

め、あなたを罪から救うために十字架に死なれました。この名を信じるなら、どんな罪も赦されます—このこともまた、聖霊なる神さまが教えてくださることです。

さらにペトロは言います。「そうすれば、賜物として聖霊を受けます」(38節)。

イエスさまを信じて洗礼を受ける人には、聖霊が与えられるのです。私たちのもとに来られ、私たちをイエスさまの恵みにあずからせ、私たちにみ言葉を教え、イエスさまを信じて生きる人につくりかえてくださるお方。イエスさまの命をもって私たちを生かし、私たちを慰め、私たちのためにご自身もうめきつつ父にとりなしてくださるお方。そのお方—イエスさまの霊が、私たちを住まいとし、永遠に私たちとともにいてくださるのです。このことにまさる平安はないのです。

問 聖霊について、あなたは何を信じていますか。

答 第一に、このお方が御父や御子と同様に永遠の神であられるということ、第二に、この方はわたしたちに与えられたお方でもあり、まことの信仰によってキリストとそのすべての恵みにわたしをあずからせ、わたしを慰め、永遠にわたしとともにいてくださるということです(ハイデルベルク信仰問答53問)。

イエスさまを信じる人には、聖霊が与えられます。私たちのひとりひとりにも聖霊が与えられます。それがペンテコステの祝福です。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 2章38節後半

悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって

洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。

そうすれば、賜物として聖霊を受けます。

〈ねらい〉

ペンテコスの意味を知り、聖霊のお働きに感謝する。

それらの祭りは、それぞれ出エジプトの過越とシナイ山での律法（十戒）の授与を記念して祝う祭りであることをことも確認する。

〈展開例〉

(1) 聖書の読み取り。この出来事はいつの話？
 →五旬祭。ペンテコステ。イエス様が復活されてから50日目。イエス様が昇天されてから10日後くらい。朝の9時。終わりの時。
 新共同訳聖書巻末の用語解説で「五旬祭」を引くと、現在学び中の十戒とのつながりが分かり易い。解説中の「シナイ山で授けられた律法」が十戒であることを確認。七週祭という名称にも着目し、五旬と七週の関係（ $7 \times 7 + 1 = 50$ ）も説明させると面白い。旬が10日、ペンタが5であることも確認できるとよい。
 プリント（下記）の□の中に数字を記入して、過越祭から五旬祭までは50日、復活から昇天までが40日、差し引くと、昇天から聖霊降臨までは10日後くらいであることを確認する。

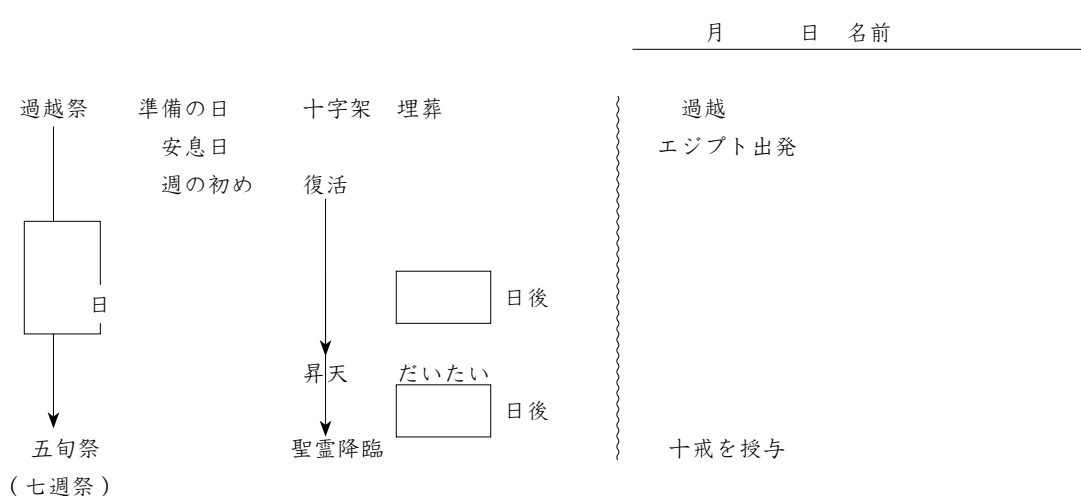
(2) 登場人物は誰？

→ペテロ、十一人（って誰？ マティアのことも忘れないでね）、預言者ヨエル、ダビデ、イエス、キリスト、神、御父、聖霊、ユダヤの方々、エルサレムに住む人たち、イスラエルの人たち、3千人（よりもっと多くの人たち）。

(3) 何が起こったの？

→14～36節のペテロの説教を聞いて心を打たれた人々がどうしかたか、37～42節から読み取らせる。

(4) イエスさまが約束してくださった聖霊なる神様が来てくださり、ペテロたちは大胆に福音を宣教し、悔い改める者が三千人も加わる。この喜ばしい日を覚え、感謝して礼拝しよう。



5月26日 過越の成就—キリスト 教理説教のための聖書黙想

テキスト	出エジプト記 20章2節
子どもカテキズム	問41, 42
参照教理問答	ウエストミンスター小教理問答 問39~44 ウエストミンスター大教理問答 問91~101

問41 十戒の前書きは何ですか。

答 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」です。

問42 この意味は何ですか。

答 かつては神の民をエジプトから救い出すことによって、今は主イエス・キリストの十字架と復活の御業によって、神さまは私たちの神さまとなってくださいました。ここにすでに、神さまの愛の御心があらわれ出ています。この神さまの愛の支配のもとではじめて、私たちは幸せに、また自由に、生きることができるのです。

子どもカテキズムに告白される教理は、信仰のいかなる論理を内包しているか。その論理を根拠づけ、豊かに物語るために選択すべき聖書箇所はどれか。その箇所の中で、特にどの要素に注目して黙想を深めるべきか。その黙想の結果は、教会学校の礼拝に集う子どもたちのいかなる生活の座にアピールできるか。

〈主題教理が内包する信仰の論理〉

◇主題教理である問41, 42は、道徳律法（十戒）の序文を暗唱させ、そこに啓示されている救いの神を告白させる。かつて（過越の小羊によって）イスラエルをエジプトから救い出された神が、いまや（十字架のキリストによって）異邦人である私たちをも罪と死の支配から贖い出してください。このように聖書の救済史を展望させるところに、主題教理が告白させたい信仰の論理がある。◇道徳律法（十戒）が置かれている教理の文脈に注意しなければならない。

子どもカテキズムは、第一部（人生）で「人生の目的」「聖書」について、第二部（信仰）で「三位一体の神」「父なる神」「人間」「御子なる神」「聖霊なる神」について、第三部（生活）で「感謝」「感謝に生きる」「教会に生きる」「祈りに生きる」について、ウエストミンスター大小教理の順序に倣って問いかけ、答えさせてゆく。

御父が「創造と摂理」の御業によって「聖定」を遂行なさること、御子が「預言者、祭司、王」の職務によって「贖い」を成就されたこと、聖霊が「義認、聖化」の恩恵によって「救い」を適用なさること。この福音を前提にして、道徳律法が告白される。そこで十戒が占める位置は、「感謝に生きる道」である。ここに福音から律法へ方向があり、救われた者を感謝の生活へ方向づける、道徳律法の第三効用（ローマ6:12~14および12:1~2、ウ大教理97）が期待される。

これに続いて、十戒を完全には守れない私たちは「罪人」であること、罪人が救われる根拠は律法遵守ではなく「キリストへの信仰と悔い改め」であること、この恵みに与かる手段として「御言葉、聖礼典、祈り」が不可欠であること。ここに律法から福音へ方向があり、救われていない者に罪を自覚させてキリストへと駆り立てる、道徳律法の第二効用（ガラテヤ3:23~24、ウ大教理96）が期待される。

◇神はイスラエルをエジプトから救出した後、十戒を契約として御自分の民に与えた。この歴史的経緯は、道徳律法の第三効用（感謝の生活の規準）を指示する。しかし、十戒の序文に啓示された救済史の展望、過越の小羊から十字架のキリストへの経緯は、むしろ道徳律法の第二効用（キリストのもとへ導く養育係）を指示する。

〈信仰の論理を物語るための聖書箇所〉

◇出エジプト20:2。これがメイン・テキストであることは間違いない。ウ小教理44によれば、十戒の序文は「神が主であり贖い主であるから、私たちは神のすべての戒めを守らねばならないことを教えている」として、イスラエルに与えられた契約を、異邦人である私たちにも当てはめる。これには救済史の進展が前提されており、贖い主がキリストであることを暗示する。この暗示について、ウ大教理101は「神が昔のイスラエルとそうであったように、御自分の民すべてと契約関係にある神であり、かくしてイスラエルをエジプトにおける奴隷状態から導き出したように、私たちを霊的隷属状態から救い出される」として、過越の小羊による贖いが十字架のキリストによる贖いへと進展した救済史を展望させる。

◇出エジプト12:1~20。このテキストは、救済史における贖いの発端、すなわち過越の出来事と、それを記念する祭りの規定とを啓示する。イスラエルがエジプトを脱出する前夜、1歳の傷のない雄の小羊が選ばれ、それが屠られ、その血を自宅の門柱と鴨居に塗らねばならなかった。そして出立の装いをし、家族単位で小羊の肉を食さねばならなかった。これは神への従順を示す信仰であり、感謝をささげることであり、神の加護と祝福を求めるものであった。小羊の血を塗った家は、滅ぼす者から守られた。

◇マルコ14:12~26。このテキストは、救済史における贖いの帰結、すなわち最後の晩餐の出来事と、そこに想起される救いの成就を啓示する。共観福音書は、キリストの最後の晩餐が過越の食事であったことを明示している。過越の祭りは、出エジプトというイスラエルの歴史において決定的な意味を持つ救済の出来事を記念するもので、過去の事実がそれを祝う者と同時的な経験になる祭儀であり、交わりの食事において贖いの犠牲を想起させる祝祭であった。その席上で、キリストはパンを裂いて弟子たちに与え「これはわたしの体である」と語ることで、御自身が過越の小羊であることを宣言された。また杯を取って弟子たちに渡し「これは多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」と語ることで、十字架の犠牲によって成就される第二の出エジプト、新しい

贖いの契約を宣言された。キリスト教会は、最後の晩餐と十字架の出来事を記念して聖餐の礼典を祝い、キリストの贖いの御業という過去の恩寵への感謝とともに、パンと葡萄酒に与かる者のうちに現在化される恩寵を味わってきた。その恩寵とは、罪の赦しと神との和解、またそこから流れ出るあらゆる祝福であり、性別や身分や民族を越えて、キリストを贖い主とするすべての人に提供されるものとなっている。

◇コリント一5:7「キリストが私たちの過越の小羊として屠られた」との証言は、贖いの発端と帰結を結び付ける「使徒教理の精髓」である。続く5:8「だから、古いパン種や悪意と邪悪のパン種を用いなくて、パン種の入っていない、純粋で真実のパン種で過越祭を祝おう」との勧告は、聖餐の礼典に与かる準備として、陪餐者に信仰と生活に対する自己吟味を要求する。

◇ペトロ一1:18,19「あなた方が先祖伝来の空しい生活から贖われたのは、傷や汚れのない小羊のようなキリストの尊い血による」との証言は、キリストの教会を新しいイスラエルとして救済史に位置づける「福音理解の根幹」である。神の前に全く罪なき御ひとり子が、罪ある人間のために傷を負われ有罪とされた事実、贖罪の有効性の根拠が確保されている。

〈CS 生徒たちが置かれている学校現場〉

◇教室で机を並べ、給食のテーブルを囲む学友とともに生活する学校。そこには、多数者が少数者を嘲笑し、富める者が貧しい者を恐喝し、強い者が弱い者を虐待する、大人社会の縮図がある。嘲笑に晒され、恐喝に脅かされ、虐待に傷ついた子どもが、比喻ではなく現実において、その命が無残に失われてゆく。ファラオとモーセが対峙した時代さながらの光景を、私たちは見ている。家庭も学校も地域も、その悲惨を目にしなが、救う手立てを見出せていない。親も教師もご近所さんも、子どもたちの叫び声に傾聴できているとは、到底言えない。その只中で、主なる神が身を乗り出すようにして語り出される。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追いつめる者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った」(出エジプト3:7)と。(二宮 創)

テキスト 出エジプト記 20章2節
子どもカテキズム 問41, 42

〔単元のねらい〕

子どもカテキズム41～42問において告白される主題教理、それが内包している信仰の論理を、聖書の御言葉によって根拠づけ、神の贖いの歴史的展開として物語る。CS生徒が週日生活する小中学校の教室や校庭に、少数者への嘲笑、貧しい者への恐喝、弱い者への虐待が大人社会さながらに蔓延する。子どもたちの叫び声に確かに耳を傾けてくださる、命の源なる神を証ししたい。神の御言葉として世に來られ、過越の小羊として引き裂かれた十字架のキリスト、私たちの唯一の贖い主を指し示したい。

傷と汚れをひきうける小羊

小学校や中学校では、先月、入学式がありましたね。その少し前には卒業式もあったでしょう。入学式から卒業式までの6年間、そして3年間。あなたが善い先生と友だちに恵まれますように。そして素晴らしい学びと交わりに恵まれますようにと、いつもお祈りしています。そして少しだけ心配もしています。

学校の教室や校庭で、大勢の子が少数の子を笑うようなこと、見たことはありませんか。あるいは、豊かな子が貧しい子を脅かすようなこと、聞いたことはありませんか。それとも、強い子が弱い子を痛めつけるようなこと、起こっていないでしょうか。

たとえば、みんなと違う話し方をするだけで、笑われたりしませんか。あるいは、みんなと違う考え方をするだけで、脅かされたりしませんか。それとも、みんなと違う生き方をするだけで、痛めつけられたりしませんか。

日曜日に教会へ行っていることで、みんなから笑われる。あるいは、お寺や神社に参拝しないことで、みんなから脅かされる。それとも、イエスキリストだけが神さまだと信じることで、みんなから痛めつけられる。このようなことが起こってはいないかと、心配しているのです。

もしもそのような体験をしているなら、どうか隠さないで、知らせてください。それは恥ずかしいことではありません。どうして、あなたの心が

汚されてよいでしょうか。どうか我慢しないで、逃げてください。それは格好悪いことではありません。どうして、あなたの体が傷つけられてよいでしょうか。誰よりも、あなたに命をお与えになった神さまが、あなたの悲しみと痛みを目を留めて、耳を澄ましておられます。どうか叫び声をあげて、助けを求めてください。神さまのふところへ逃れて、そこに隠れてください。どうして、あなたの命が失われてよいでしょうか。

昔々の大昔、叫び声を上げて、神さまのふところへ逃れた人びとがありました。エジプトで奴隷状態にあったイスラエルの人びとです。彼らの姿は、もしかすると、今のあなたにそっくりなのかもしれません。イスラエル、すなわち神の民だというだけで、目をつけられる。何もしていないのに、疑いをかけられる。問答無用で引っ張られ、無理難題を吹かけられる。生まれたばかりなのに、男の子だというだけで連れ去られ命を奪われる。

このような過酷な境遇に閉じ込められていた人びとのところへ、神さまは預言者モーセをお遣わしになります。そして御言葉をお告げになります。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見た。追い使う者のゆえに叫ぶ、彼らの叫び声を聞いた。その痛みを知った。それゆえわたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、広々とした素晴らしい土地、乳と蜜の流れる土地へ導き上ろう」。この御言葉は、もし

かすると、今のあなたに呼びかけられているのかもしれない。

モーセが取り次ぐ神さまの言葉に従って、イスラエルの人びとはエジプトを脱出する前夜、1歳の傷のない雄の小羊を選び、その体を引き裂いて、その血を家の門に塗らなければなりません。そして、すぐさま旅立ちの備えをし、家族単位で急いで小羊の肉を食べなければなりません。これは、奴隷状態から助け出してくださる神さまにお従いする、自分たちの信仰をあらわすことでした。しかもそれは、感謝を捧げること、神さまの守りと祝福を求めることでもありました。するとどうでしょう。命を滅ぼす災いは、小羊の血を塗った家の前を通り過ぎ、その家の子どもは救われたのです。これが「過越」の出来事です。この出来事は、もしかすると、今のあなたに無関係ではないかもしれません。

こうしてイスラエルの人々は、モーセに率いられてエジプトを脱出します。昼は雲の柱、夜は火の柱に守られ、葦の海を渡り、神の山ホレブに到着します。するとそこで、神さまの声が響きます。「あなたたちは見た。わたしがエジプト人にしたことを。また、あなたたちを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来たことを。今、わたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたたちはすべての民の間において、わたしの宝となる」。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。こう仰せになって、イスラエルの人びとに十戒をお授けになります。神さまは彼らの救い主となられ、彼らを救われたしもべとなさいます。この一連の出来事は、イスラエルの人々にとって、決して忘れられない、絶対に忘れてはならない「贖(あがな)い」の出来事でした。この贖いこそ、もしかすると、今のあなたに必要なことではありませんか。もしもそうなら、どうか遠慮しないでください。神さまがあなたの生まれる前から、あなたのために備えておられた救いのご計画を知ってください。

神さまのご命令に従って、イスラエルの人々は、毎年春に過越の祭を祝います。出エジプトの前夜と同じように小羊を屠り、その血を家の門に塗り、その肉を焼いて食べます。出エジプトを記念するためです。大昔の救いの出来事が、今の人の救いとなるために祝うのです。過越の小羊(贖いの犠牲)を想起するために食卓を囲むのです。

イスラエルのお祭りは、やがてキリスト教会のお祝いになります。過越の食事の席で、主イエスさまはパンを裂いて弟子たちに与え「これはわたしの体である」と仰せになって、御自身が過越の小羊であることを宣言されます。また杯を取って弟子たちに渡し「これは多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」と仰せになり、第二の出エジプト、新しい贖いの出来事を予告されます。十字架の犠牲によって「キリストが私たちの過越の小羊として屠られた」のです。

この出来事を忘れないようにと、キリスト教会は日曜日の礼拝を捧げます。キリストの体が引き裂かれて、主イエスの血が流された出来事を想起こすために、聖餐式を祝います。その血を、あなたの心の門に塗ってください。そして今すぐ、逃げる用意をしてください。神さまの御言葉を信じて、神さまが臨在なさる所へ逃げてください。キリストのふところに隠れてください。

あなたを笑う人は、その人も誰かから笑われることを恐れているのです。あなたを脅かす人は、その人も誰かから脅かされることに怯えているのです。あなたを痛めつける人は、その人も誰かから痛めつけられることが怖いのです。みんな、エジプトに囚われていたイスラエルの人々そっくりです。罪と死の奴隷状態にあるのです。自分では自分のことをどうしようもないのです。だから、みんなで叫びましょう。「主なる神さま、私たちを憐れんでください」「贖い主イエスさま、私たちを罪と死の縄目から解き放ってください」と。イエスさまこそ、私たちの傷と汚れをひきうけてくださる過越の小羊、贖いの犠牲です。

(二宮 創)

[今週の暗唱聖句] ペトロの手紙 一 1章18,19節

あなたがたが先祖伝来の空しい生活から贖われたのは、
傷や汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。

〈ねらい〉

十戒の序文（序言）の構造を知り、わたしたちの主であり、神であり、贖い主であられる神様のくださった戒めを感謝して受け取る。

〈展開例〉

(1) ウ小教理の問43～44を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

分からない言葉はないか質問する。

「序言」「エジプトの地、奴隸の家」「導き出した」「主」「あがない主」「すべての戒めを守る義務がある」など、分からない言葉、どう解釈していいか分からない言葉を挙げさせる。

(2) 十戒の序言は、それに続く十の戒めの根拠となる。「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隸の家から導き出した者である。だから、以下の戒めを守りなさい。」とい

う意味である。

(3) 問44「神が主、また私たちの神でもあがない主でもあられる」とは、どういう意味か？ 「主」は「しゅ」と読み、「あがない主」は「ぬし」と読む（当たり前のことだけれど、しっかり押さえる）。いっそ、「贖い主」と漢字で書かせた方が、意味がよく分かるかも知れない。

「贖い主」とは誰？ もちろんイエス様。私たちの罪のために十字架について、血の贖いで私たちを買い取ってくださった方。ということをおそらく生徒たちは言えるはず。

(4) 「わたしはあなたの神、主」と名乗られる方は、わたしたちの主であり、神であり、贖い主であられる。だからこそ、わたしたちは神様の戒めを必ず守るのである。

月 日 名前

十戒の序言

わたしはあなたの神、主であって、
あなたをエジプトの地、奴隸の家から導き出した者である。

主 神 贖い主	}	{	主権者 創造者 罪の奴隸であるわたしを買い取ってくださった方
---------------	---	---	-----------------------------------

↓

だから、これら十の戒めを守りなさい。

6月2日 第一戒 神を神とする 教理説教のための聖書黙想

テキスト	出エジプト記 20章3節
子どもカテキズム	問43, 44
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問45～47 ハイデルベルク信仰問答 問94, 95

問43 第一戒は何ですか。

答 「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」、です。

問44 第一戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちの真の神さまだけを心から礼拝しなければならない、ということです。

これがもっとも大切な戒めです。

ですから、私たちは喜んで礼拝をささげます。

この日、与えられているのは十戒の第一戒「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」(出エジプト記20章3節)である。

この御言葉を、子どもたちに説教として語る道を尋ねたい。しかし、子どもたちに十戒の第一戒を説教するということは、誰にとっても、それほど容易なことではないと思う。一般的に第一戒について教えることや知識を提供することなら、それほど難しいことではないかもしれない。でも説教することは、子どもたちの心深くに届くように神の言葉を取りつぐことである。さらに、語るべき神の言葉は福音の言葉なのである。十戒を説教することは、律法を語ることであるが、この律法の言葉を律法としてではなく、福音(喜びの知らせ)として子どもたちに語る事が私たちに与えられた使命である。しかし、途方に暮れつつも、祈りつつ、繰り返し、この御言葉そのものをまずは口ずさみ、味わう、そこから準備をはじめたい。

まず最初に、第一戒がどのような戒めであるのかをよく確認しておきたい。十戒は決して、「これを守れば、神の救いをいただくことができる」という「掟」ではない。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」という最初の言葉が語っているように、エジプトの奴隷状態からの解放という神の恵みは既に与えられている。第一戒も「あなたが、わたし以外のほかのものを神としないで、信じて従う

なら、おまえに救いを与えてやる」という救いの条件のようなものではない。また「～ならない」という単なる厳しい命令というものでもない。「～ならない」というのは、「～するはずがない」というニュアンスをもったことばで、強い確信、信頼に基づく言葉である。つまり、「あなたを奴隷の地であるエジプトを導き出した私という神がいるのだから、あなたがほかの神々に頼ったり、拝んだりするはずがない。そんな必要はないはずだ」。このことが、よくわかっているかどうかということはおそらく決定的な意味を持つ。

神は、契約によってご自身の民となった「あなた」つまり「神の民」に、どこまでも真実であり続けられる。この神はまた、「神の民」にも真実であり続けることを求められ、それを呼びかけられる。それが第一戒である。この神こそ、私たちが造り、担い、背負い、救い出してくださるお方、私たちが母の胎から、白髪になるまで背負ってくださるお方である(イザヤ46:3,4)。第一戒で、この神は、生涯をとおして、私たちが神をあがめ、お仕えし、御言葉に従って生きることをお求めになっておられる。それは、神ご自身のためというよりも、私たち自身のためである。神はすべての良きものの源であられ、私たちはこの神を離れては生きることができないからである。私たちが生きるために、神はその愛によって語りかけられる。「わたしから離れるな」と。第一戒は、そういう

牧会的な言葉、愛の呼びかけなのである。

神がこのように呼びかけられるのは、私たちが世の偽りの神々のただ中に生きているからである。また、私たちはまことの神ではないものを神としてしまう罪を、なお抱えているからである。私たちは異教社会に生きている。子どもたちにもこのことは経験としても、よくわかるのではないか。聖書の語っていることが、まさに私たちの日常と深くかかわっていることを、子どもたちは実感できるように思う。

筆者の住む町にも、あちこちに偶像は存在する。異教的な祭礼と接する機会も多い。子どもたちもそうであろう。「かたちだけでも拝めばよい」というような声もあるかもしれない。また神はおひとりであって、ほかに神はないと信じて生きることは、排他的で、狭い信仰であるかのように思われるかもしれない。もっとおおらかに、ほかの神を拜んで生きてもいいのではないか。そういう考えが日本的な感覚であろう。しかし、やはり聖書においてはそうではない。

この頃、気になるのは、「神」という言葉が日常でもほんとうに簡単に使われていることだ。ちょっと何か人より秀でたところがあると「神だ」と言われる。子どもたちの世界でも同じである。子どもたちに「それはいけない」というだけではなく、それがなぜ、どうしていけないことなのかを私たちは伝えなければならないであろう。

同時に覚えたたいのは、偶像とは、そうした異教の神々のことだけではないことである。人間は神の代わりに、さまざまなものに囚われて、それに大きな信頼を寄せて生きようとする。それは金銭であったり、仕事であったり、学校の成績などでもあろう。偶像礼拝との戦いは自分自身との戦いでもあることを覚えたたい。

それにしてもなぜ、どうしてこんなにもこの国には、多くの偶像が存在するのであろうか。私たちの周りにこんなに多くの神々が存在するのはなぜであろうか。それは神をどういう神として知るかということと深く関わると言った人がいる。つまり、神を「～してください」、「～をください」という人間の願いに、答えてくださる便利な神とするならば、そういう神はできるだけ多くいた方がよいということになる。そこで次々と神が生まれてくるというのである。言い換えるとまったく人間中心なのである。しかし、聖書の神はそうではない。神は「契約の神」なのである。契約の関係は、お互いに信頼して、義務と責任を負っていくということがそこにある。結婚と同じである。だとすれば、あの人もこの人も関係を結ぶというわけにはゆかない。その人のみに集中し、その人以外に心を向けないということが大切なのである。信仰も同じである。神と契約が結ばれ、愛の関係のなかに生きていく。だから第一戒は偏狭な生き方ではなく、神との愛の関係、人格的な関係を本当に大切に生きていくことに私たちを招いている。

「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」と神は呼びかけられる。「あなた」という呼びかけが、神との人格的な関係を示す。ちなみに「あなた」は単数であるが、それは「神の民イスラエル」を意味する。

共同体が「あなた」と呼びかけられる。子どもたちも、まさに子どもの教会として、呼びかけられる。私たちも子どもたち一人一人と共に、子どもたちの群れに、愛をもってみ言葉を伝えたい。

礼拝にはキリスト者の家庭の子ども以外の子どもたちも集っていることに注意したい。そうではなくても、異教社会にあって子どもたちはキリスト者のなかだけで生きているのではない。そういうなかで、偶像礼拝のなかに生きている人たちを見下したり、ただ一方的に責めたりする、そういう言葉には注意を払う必要があろう。(橋谷英徳)



テキスト 出エジプト記 20章3節
子どもカテキズム 問43, 44

〔単元のねらい〕

第一戒にある神の愛の御旨を示し、子どもたちを御言葉によって慰め、励ましたい。

まことの神さまが一緒です

私は小学校の時、神さまのことを全然知りませんでした。教会に行ったこともありません。聖書を読んだこともありません。

その頃、夏休みになると、毎朝、ランニングをしていました。その途中で、近くの神社に行きお参りをしていました。お寺に行くこともありました。そこでもお祈りをしました。でも、大人になって教会に行き、聖書を読み、神さまを信じるようになってからは、神社に行っても、お寺に行っても、そこでお祈りをするのはもうなくなりました。

教会で聖書を読んで、「まことの神さまはおひとり、もうあなたは神さまのことを知ったのだから、ほかの神さまのことを礼拝する必要はないのだ」ということを教わったからです。

実は、私たちが住んでいるこの世界には、宗教がものすごくたくさんあります。

でもみんなはどうしてこんなにたくさんの神さまがいるのか、不思議に思ったことはないでしょうか？

神社には神さまが住んでいると言う人もいます。人間は死んだら神さまになると言う人もいます。太陽や月、山や木を神さまとして拝む人もいます。

最近、よく聞くかもしれませんが、野球やサッカーなどが特別にほかの人より上手な人が、「神」と呼ばれることもあるようです。特別勉強ができる人がいたら、「あの人は神だ！」なんて言うのです。みんなもきっと聞いたことがあるのではないのでしょうか。

みんなの周りの人たちも、ほとんどの人は、神さまはたくさんいる、と考えているようです。

ものすごくピンチになった人が、「神さま、仏さま、イエスさま、～さま、～さま」と、自分の知っている神さまの名前を全部呼んで、お祈りするということもあるようです。どれかの神さまが、きっと聞いてくださると思って、たくさんの神さまの名前を呼ぶわけです。

まるで「下手な鉄砲、数打ちや当たる」というわけです。

でも本当は、そんなことをする必要はないのです。本当の神さまはただおひとりなのです。たくさんの神さまを拝まなくてもいいのです。神さまは天と地にあるすべてのものをお造りくださった神さまです。神さまは、イエスさまを送ってくださって、私たちを罪から救ってくださいました。そして、この神さまが私たちとずっと一緒にいてくださって、守って支えてくださいます。この神さまは、イエスさまの父なる神さまです。そして、イエスさまによって、私たちの父となってくださった神さまです。私たちがイエスさまによって「天にいます父なる神さま！」とお祈りすることができます。

ですから、もうほかの神さまに頼む必要はありません。困ったときに、たくさんの神さまの名前を呼ばなければいけないということはないのです。安心して、ただおひとりの神さまだけにお願いすればいいのです。

これは、とてもうれしいことです。

でも、このおひとりの神さまだけを信じて生きていこうとするときに、さびしいことや、つらいこともあるかもしれません。

少し昔の話をしましょう。ひろし君という小学生がいました。ひろし君の学校から修学旅行に行きました。そのときに歴史上の有名な人を祀った神社に行ったそうです。その建物を見学した後に、先生が「お参りしましょう」と勧められたそうです。みんなが次々に、手を「バン！バン！」と打ってお参りはじめたそうです。

でもひろし君は「僕はお参りしません」と言いました。とても勇気がいることで心臓がドキン、ドキンとしましたが、断りました。ひろしくんは、お家の人と一緒に教会にいて、イエスさまの教えを小さな頃からずっと聞いていました。他の神さまにお祈りすることは、イエスさまが悲しまれる、だからそんなことはしたくないと思ったのです。

先生は、「いいよ」と言ってくださったのですが、「そんなに難しく考える必要はない。もっと気楽でいいじゃないか」とも言われたそうです。

ひろし君は少しさびしく思いました。
お家に帰ってそのことをお父さんとお母さんに

お話ししました。お父さんとお母さんは、そのことを喜んでくださいました。

ひろし君だけではありません。たくさんのイエスさまを信じる人たちが、同じような困難を経験してきました。もしかしたら、みんなにも同じようなことがあるかもしれません。

ほかのみんなと違うことすることは、ほんとうに勇気のいることですね。

つらいことかもしれません。

でも、みんなと同じことをすることがいつも良いことではないように思います。みんなと違っていてもいいのです。同じことをする必要はありません。

でもつらい気持ちもあるかもしれません。そんな気持ちも、神さまはよくわかっていてくださいます。そして、必ず守って、助けてくださいます。

神さまは今日も、「わたしはあなたと一緒にいる」と約束してくださいます。

みんなと一緒にこの神さまを礼拝して、この神さまに従って生活していきたいです。

お祈りしましょう。 (橋谷英徳)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 20章3節

あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。



〈ねらい〉

第一戒について考え、イエス様がこの戒めを完全に守ってくださったことを感謝しつつ、自分の生活を振り返り、聖霊なる神さまがこの戒めを守ることができるように導いてくださることを信じて祈ることができる。

〈展開例〉

(1) ウ小教理の問45～47を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

分からない言葉はないか質問する。

「あなた」「わたし」はそれぞれ誰か？

「なにものをも」「神とする」という言葉の意味は分かっているか？

「神を」「唯一のまことの神として」「私たちの神として」「知り、認める」とはどういう意味か？

「それにふさわしく」とは、どれにふさわしく？

「ふさわしく神を礼拝する」「ふさわしく神の栄光をあらわす」とはどういうことか？

「まことの神を否定する」「神として礼拝せず栄光をあらわさない」「私たちの神として礼拝せず栄光をあらわさない」とは、それぞれどんな状況か？

「神だけにふさわしい礼拝と栄光」を「他の何ものにもささげる」とは、どんな状況か？

等々について生徒間で意見を交換させる。特に、最後の二つの質問は、自分の生活の中で具体的にどんな状況が考えられるか丁寧に話し合えるとよ

い。

(2) 5月5日から使い始めたプリントの「第一戒」の「求められていること」と「禁じられていること」を書き入れる。問46、47を写して書いても、自分の言葉でまとめて書いてもよい。

求められていることができず、禁じられていることをしてしまうのが罪。しかし、イエス様はこの戒めを完全に守ってくださった。

(3) 問48を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

「わたしのほか（面前）に」は、

You shall have no other gods before Me. の before Me を指す。文語訳では「汝、わが顔の前に、我のほか何者をも神とすべからず」と訳されていた。（讚美歌巻末の交読文34参照）

「わが顔の前に」。「万事を見ておられる神」。

この言葉におののかないわけにはいかない。

(4) 第一戒は、「天にまします我らの父よ」と呼びかける祈りにわたしたちを導く。八百万の神々を信仰する異教の土地に生きる者として、まことの神さまを私たちの神さまとして礼拝できる恵みに感謝して、生徒たちと共に祈ろう。

59頁のプリントを使用する。5月5日参照。



6月9日 第二戒 刻んだ像の禁止 教理説教のための聖書黙想

テキスト	出エジプト記 32章1～24節
子どもカテキズム	問45, 46
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問50～52 ハイデルベルク信仰問答 問96～98

問45 第二戒は何ですか。

答 「あなたはいかなる像も造ってはならない」、です。

問46 第二戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちは、真の神さまを忘れるときに、
必ず、自分のために神々を造り出します。

私たちは、お守りや占いに頼ったり、
自分を喜ばせるために礼拝してはいけない、ということです。

〈子どもカテキズムの解説〉

第二戒は、改革派・長老派の伝統的なカテキズムにおいて、通常、聖書で定められた方法以外の仕方では礼拝することを禁じていると解釈されています（ウ小教理50-51、ハイデ96-98など）。つまり、礼拝する対象について定めているのではなく（この点については、第一戒で取り扱われている）、礼拝の方法について定めているということです。具体的には、何らかの像や絵画によって神をあらわそうとすべきではなく、またそのような像を拜むべきではないということです。この理解は、ローマ・カトリック教会の礼拝様式（像を用いた礼拝）に対する反対としてあらわされました。

私たちの神様は、霊であられ、目で見ることができません。見える形で捉えられるようなお方ではありません。私たちは、聖書の御言葉によって指し示された生ける神として、そのままに（見えないままに）礼拝します。何らかの被造物の像を作り、それを主であるかのように拜むということは、すべてを創造された主を貶めることです。また、神の形に造られた人間を他の被造物以下のものにおとしめるということにもなります。

最近では、仏像を見てまわる旅行などが流行っているそうです。多くの方が、職人が作り出した荘厳な像を見ると、畏敬の念にとらわれます。見事な像があれば、それを拜みたくなるというのが人

間の心理であるのでしょうか。しかし、そのような仕方では、生ける神を拜むことはできないのです。

子どもカテキズムにおいては、日本の文脈に即して、礼拝の様式にとどまらず、偶像礼拝全般を禁じるものとして解説されています。そして、そのような偶像礼拝の背景には、人間が自分の願望を実現するために拜むという、人間の傲慢さがあることを教えます。

ただし、このことは、礼拝堂にスタンドグラスや生け花をおいてはいけないとか、子ども向けのメッセージで紙芝居を用いてはいけないとか、プロジェクタで映像を流してはいけないということの意味するものではありません。あくまでも、拜む対象として像を用いてはいけないということです。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

【KEY1 聖書本文を語る】

〔STEP1〕 聖書本文を読む。

出エジプト記32:1～24を数回読みます。

〔STEP2〕 この個所のテーマは何か？

十戒の第二戒との関連で考えるならば、像を作って、それを主であるかのように拜むとき、主は激しく怒りを燃やされるということ。

〔STEP3〕 それをどのように展開しているか？

モーセがシナイ山から40日間も戻らなかったため（24:18）、イスラエルの民は不安になり、ア

ロンに神の像を作ることを要求します(1節)。アロンは、その要求に応じて、民に金の耳輪を持ち寄せ、若い雄牛を鑄造します(2~4節)。そして、その雄牛を主として拝む祭りをを行うことを宣言します(5節)。像を用いた礼拝方法は、イスラエルの民がエジプトで慣れ親しんだ偶像礼拝の方法であったと推測されます。

主は、その祭りに対して激しく怒りを燃やされ、民を滅ぼそうとしますが(7~10節)、モーセのとりなしによって、災いを下すことを思いとどまってくれました(11~14節)。アロンは、モーセからの厳しい糾弾に対して、偽りをもって言い訳せざるを得ませんでした(24節)。

【KEY2 神の福音を語る】

【STEP1】この箇所では神はご自身について何を表されたか？

神は、像を用いてご自身を礼拝することを激しく嫌われます。

【STEP2】前後の章は、神について何と言っているか？

神は、20章でイスラエルの民に十戒を与えられました。24章では契約締結の儀式が行われ、民は「主が語られたことをすべて行い、守ります」と誓約しています。それにも関わらず、「早くも」主が命じた道からそれたことに、主は怒られます(32:8)。

主は、この罪のゆえに、ご自身がイスラエルの民と共に行くことを拒まれます。しかし、主が共に行ってくださることこそ、主の民に必要なことです(33:16)。モーセのとりなしによって、主は共に行ってくださるのですが、この罪が主にとってどれほど重いものであるかを思わされます。

【STEP3】聖書全体を通しての神の働きに、この箇所はどのように関係しているか？

天地を造られた主は、雄牛のような被造物の像におとしめられるようなお方ではありません。主は、人が真の礼拝者として回復されることを願われます。それは、キリストにおいて実現し、終わりの日に完成することになります。

【KEY3 子ども達の信仰と生活のために語る】

【STEP1】この箇所では登場するイスラエルの民の必要は何だったか？

生きた真の神を礼拝するのに、像を用いること

がどれほど大きな罪であるかを知ること。神が命じられた通りに、礼拝することがどれほど大切かということ。

【STEP2】私たちの教会の子どもたちに似たような必要があるか？

改革派教会の日曜学校に通う子どもたちが、像を用いて主を礼拝する誘惑に駆られることは少ないのではないのでしょうか。むしろ、像であらざるわことのできるような神々を拝むことと、像であらわすことのできない偉大な神を礼拝することの違いに焦点を当てるのがよいでしょう。

現代の日本の子どもたちが置かれている状況は、宗教改革期のヨーロッパの状況と違います。むしろ異教的偶像礼拝を行う民族に囲まれていた旧約時代のイスラエルの状況に近いと言ってよいでしょう。見える物に思いを寄せ、拝み、自分を守らせ、自分の願いを実現しようとする宗教的姿勢に囲まれ、子どもたちも影響を受けます。

【STEP3】この聖書箇所「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

イスラエルの民は、モーセが山から下りてこないということに不安を抱き、自分勝手な方法(雄牛の像を用いる)での礼拝を始めました。そのほうが分かりやすく、願いを聞いてもらえるという感じがしたのかもしれませんが。

私たちの周りにいる多くの人たちも、見えているもの(仏像、お守り、流れ星など)を拝んで、「願い事」を実現しようとしています。見えているもののほうが、自分の願いを聞いてもらえる感じがするのでしょう。

しかし、私たちの信じる聖書の神は、目で見ることのできない偉大なお方です。このお方を目で見ることのできるものであらわそうとするならば、神を低めてしまうことになります。それは、神への冒瀆であり、神がお怒りになることです。

私たちの信じる神は、私たちをはるかに超えて偉大なお方です。私たちがが見通せる範囲を超えて、私たちのために良い計画を持っていらっしゃる。見えない神を見えないままに礼拝することは、私たちを愛してくださる偉大な神に信頼して歩むことです。

(テモテ指導者訓練「聖書的説教」モジュールを参考に項目を立てました。) (大西良嗣)

テキスト 出エジプト記 32章1～24節
子どもカテキズム 問45, 46

〔単元のねらい〕

イスラエルの民に十戒が与えられた直後、早くも第二戒に違反する罪をイスラエルは犯します。それが今日の聖書箇所です。多くの説明を加えなくても、この箇所の物語を印象深く語っていけば、第二戒に違反することの重大さが、十分に子どもたちに伝わることでしょう。見えるもの、自分がコントロールできるものに頼ろうとする社会にあって、目に見えない主に信頼することにある真の平和を、子どもたちと分かち合うことができればと願います。

目に見えない神さまを礼拝しよう

〈序〉

みんなは、仏像を見たことがありますか？京都のお寺などに行くと、ほんとうに立派な仏像があります。生きているみたいに思えるほど、よくできています。一流の職人さんが、造り上げた見事なものです。

多くの人が、それを見て、「ありがたや～」と思うんですね。「何か、不思議な力がありそうだなあ。お願い事を聞いてくれそうだなあ」と思って、拜んで、お願い事をします。

先週のお話を聞いていた人は、どんなに立派な仏像であったとしても、それは本当の神様ではないんだということが、よく分かっていると思います。けれども、その立派な姿・形を見ると、多くの人が、「すごいなあ」と思って、思わず、拜んでしまうんだね。

〈物語〉

実は、イスラエルの人たちも、神様のことを拜むのに、「何か目に見える形がほしい」と言って、子牛の像を造ったことがありました。

イスラエルの人たちは、モーセさんに連れられて、エジプトから出て、荒れ野を旅して、シナイ山というところまで来ました。そこで、神様は、イスラエルの人たちに、「十戒」という十の戒めを与えられました。イスラエルの人たちは、「神様の与えられた戒めを、しっかり守ります!」と

約束しました。

ところが、モーセさんがもう一度、シナイ山に戻って行った後、イスラエルの人たちは、だんだん不安になってきました。「モーセさん、なかなか帰って来ないなあ。もう何日も帰って来ないよ。途中で何か事故でもあったんじゃないかなあ。もう帰って来ないんじゃないかなあ。」

そうして、イスラエルの人たちは、相談して、モーセさんが留守の間のリーダーだったアロンさんのところへ行きました。「アロンさん、モーセさんはなかなか帰って来ません。どうなってしまったかわかりません。だから、私たちが拜むために神様の像を作ってください。」

モーセさんが帰って来なくて心配になったイスラエルの人たちは、目に見える拜むものを造ってほしいと、アロンさんをお願いしました。そのほうが、拜みやすいし、お願い事もしやすそうだから。

アロンさんは、それを聞いて、「みんな、金の耳輪を持って来なさい」と言いました。そして、それを火で溶かして、型に入れて、金の子牛の像を作りました。

そして、それだけではなく、「明日は、この金の子牛を使って、神様を礼拝するお祭りをする」と宣言しました。次の朝早くから、イスラエルの人たちは、大喜びで、お祭りをしました。

けれども、ちょっと待ってよ。少し前に与えられたばかりの十戒には、どんなことが書いてあった？

子どもカテキズム問45「第二戒は何ですか」

答「あなたはいかなる像も造ってはならない」

神様は、霊であられるお方で、目に見えません。

目に見えない神様を、勝手に、何かの形であらわそうとしてはいけないのです。神様は、全世界を造られた方です。人間も、牛も造られました。それなのに、神様を牛の形にしまったら、どうでしょうか？

〇〇君が、粘土でいろんな動物を作ったとするね。その中の一つの動物を真似て、××ちゃんが動物を作って、その動物に向かって、「〇〇君、元気？」なんて話しかけていたら、おかしいよねえ。気持ち悪いよねえ。〇〇君は、「本当の僕はこっちだよ！」て叫びたくなるね。

だから、それと同じで、生きていっしょやる本当の神様のことは、人間が作ったものであらわすことができないうだねえ。

神様は、イスラエルの人たちが、金の子牛を使って神様を礼拝し、お祭りをしているのをご覧になって、激しくお怒りになりました。

そして、シナイ山にいたモーセさんに言われました。「すぐに山を下りなさい！イスラエルの民は、早くも、わたしが与えた十戒を破ってしまった。わたしは、あのイスラエルの民を、全員、殺してしまうことにする！」

モーセさんは、あわてましたねえ。一生懸命に神様にお願いをしました。「どうか、あなたの民イスラエルを滅ぼさないでください」。一生懸命、お願いをしたので、神様は滅ぼすことを思い直してくださいました。

モーセさんは、急いで山を下りていきます。近

づいてくると、イスラエルの人たちが大声で騒いでいる声が聞こえます。何と歌を歌って、お祭り騒ぎをしていたんですね。

イスラエルの人たちのところに着くと、たいへんなものを見つけてしまいました。そう、あの金の子牛です。

モーセさんは、激しく怒って、金の子牛を火で焼き、粉々に壊して、それを水の上に撒き散らし、イスラエルの人たちにその水を飲ませました。そして、アロンさんに、「あなたは、なぜ、こんな大きな罪をイスラエルの人たちに犯させたのか！」と怒りを爆発させました。

〈結〉

人間は、目に見えるものを拝みたくになります。本当の神様でないものを拝んでしまうのは、私たちの罪の性質です。イスラエルの人たちが金の子牛を作って拝んだのもそう。多くの日本人が、立派な仏像を見ると拝んでしまうのもそう。流れ星を見ると願い事をしたり、お守りを身につけているのも、見えるものに何か力があるかのように感じてしまうから。

けれども、本当に力のあるお方は、目で見ることができません。見える形であらわそうとしても、あらわすことができません。そんなことをすれば、神様を小さく、低い者にしてしまうことになります。神様は、目に見える形ではあらわせないほどに、偉大なお方です。

目に見えるものを拝むほうが、拝みやすい、願い事を聞いてくれやすい感じがするかもしれない。けれども、見えるものであらわせないお方にこそ、本当の力があります。見えないお方を、見えないままに拝み、礼拝して行きましょう。

(大西良嗣)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 20章4節 前半

あなたはいかなる像も造ってはならない。

〈ねらい〉

第二戒について考え、イエス様がこの戒めを完全に守ってくださったことを感謝しつつ、自分の生活を振り返り、聖霊なる神さまがこの戒めを守ることができるように導いてくださることを信じて祈ることができる。

〈展開例〉

(1) ウ小教理の間49～51を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

分からない言葉はないか質問する。

「刻んだ像」「ねたむ神」「報いて」「及ぼす」「恵みを施す」「千代に至る」「御言葉のうちに指定された」「宗教的礼拝と規定」「純正完全に保つ」「像による神礼拝」などの言葉について疑問をもてるとよい。質問が出なければ、こちらから質問して答えさせる。

「刻んだ像」には具体的にどんなものがあるか？「上は天にあるもの、下は地にあるもの、地の下の水の中にあるもの、どんな形」を人々は造ってきただろうか？（時期的に、照る照る坊主？）「それらにひれ伏し、仕える」姿を、どれだけ想像できるだろうか？

堕落した人々は「霊」である神様を正しく礼拝する方法が分からないから、目に見える、手で触れる「形」を欲する。

また、自分が神様に仕えるのではなく、神様に自分に仕えるものと考えてしまいがちなので、「自分がコントロールできる存在」を欲する。

神様を正しく礼拝する方法は神様が教えてくださっている。

神様が教えてくださった礼拝と規定のすべてを、「受け入れ、実行し、純正完全に保つ」とは、どういうことか話し合おう。

歴史的な教会の腐敗や堕落についても、話し合うことができる。

(2) 5月5日から使い始めたプリントの「第二戒」の「求められていること」と「禁じられていること」を書き入れる。問50、51を写して書いても、自分の言葉でまとめて書いてもよい。

(3) 問52を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

第二戒～第五戒には、理由が加えられている。第二戒に加えられている理由は、「わたしはねたむ神だから」という大変ショッキングな表現で述べられている。「ねたむ」「熱情の」「熱心をもっておられる」神様に愛されていることに感謝しよう。憎むものへの報いは三、四代だけれど、恵みを施すのは千代に至るところにも気がついて欲しい。

(4) 「第一戒と第二戒は何が違うの？」という質問が生徒から出たら、すごく嬉しい。もし、そんな質問が出たら、第一戒は礼拝の対象、第二戒は礼拝の方法であることを教えてあげよう。

59頁のプリントを使用する。5月5日参照。



テキスト	出エジプト記 3章7～15節
子どもカテキズム	問47, 48
参照教理問答	ハイデルベルク教理問答 問99 ウェストミンスター大教理問答 問112、同小教理問答 問54

問47 第三戒は何ですか。

答 「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」、です。

問48 第三戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまのお名前や教会の教え、そのほか、神さまにかかわるものを、ふざけて用いたり、自分勝手に変えて用いてはいけない、ということです。愛の神さまは優しい神さまですが、これらを厳しく裁かれます。ですから、私たちは主の御名を正しくほめたたえます。

1. 神の御名を聖とする生き方への招き

古代では、条約や契約は神々の名によって締結され、その名を呼び求められた神が保証者として立てられました。そこでは神の名がいとも手軽に濫用され、人間の都合に合わせて用いられました。第三戒が禁じることは、このように神の御名を、神への恐れもなく軽々しく濫用することです。この神の御名を軽々しく扱う人間の神への姿勢が問われます。それは神ご自身を軽々しく扱う人間の心のあらわれに他ならないからです。そこにあらわされてくる神に対する姿勢とは「神への恐れ」の欠如です。神の御名をみだりに唱えるとは、神を自分の都合のよいときだけ呼び出して、自分のために利用しようとすることです。神を自分の都合よいものとして利用しようとする心です。神を神として崇め、礼拝し、従うのではなく、利用できる便利屋として利用する、そこでは自分が主であり、己自身を神とする心が問題となっています。

2. 神の御名が意味するのは、神の臨在と祝福

主なる神は、ソロモンの建立したエルサレムの神殿を聖別して、「そこにわたしの名をどこしえに置く。わたしは絶えずこれに目を向け、心を寄せる」(王上9:9、下21:4,7)と約束されました。神の御名とは、単なる神の名称ではなく、神を呼び出すことができる実体をもったものです。つま

り神の御名とは神ご自身を指し、神が御名を置くとはそこに神が臨在されるということです。だからその神の御名を軽んじるとは、神ご自身を侮り軽んじることなのです。神の御名が呼ばれるその所で神を軽んじる、神の名において不正義が行われ、不真実がまかり通る、神の目の前でそれがなされるということです。神がそこにおられるその場で、そのような不真実がなされるのです。神への恐れ欠如は、隣人への不真実につながっていきます。この戒めは神の臨在を覚え、神を畏れて、隣人に真実を尽くすということです。神が見ておられることを畏れて生きるのです。それはただ独り心を探る方である神に真実であるということ、神の臨在を畏れて生きるということです。隣人に対して、いつもそこに神ご自身がおられるかのような厳粛な思いで真実に生きること、コーラム・デオ(神の御前)で生きるということです。

ご自身の「像」を刻むことで人間が神を好き勝手に呼び出し、そうやって人間が神を支配することを拒絶された見えない神は、「像」によってではなく「御名」によって呼び出され、臨在し、私たちと共にいてくださる神です。そして御名において臨在される神は、その御名自身がそのことを表す名でした。「わたしはある」という、その共在の神は「共にいる」だけではなく、私たちに「祝福」してくださる神でもあります。神はモーセに「わたしの名の唱えられるすべての場所において、

わたしはあなたに臨み、あなたを祝福する」と約束されました（出20:24）。アロンの祝祷の後、神は祭司が「わたしの名をイスラエルの人々の上に置くと、わたしは彼らを祝福する」と約束されます（民6:27）。私たちは「父・子・聖霊」の御名によって洗礼を授けられて神との交わりに入れられ、キリストの名のゆえに聖餐にもあずかることで、神の恵みと交わりを享受します。私たちは「父」の御名を崇めて祈り、それはキリストの御名のゆえに聞き届けられます。こうして私たちの礼拝も祈りも働きも、そのすべては神の御名によるものであり、私たちは神の御名によって神からの祝福にあずかるのです。神の御名は、わたしたちからの正しい礼拝と祈りの道であり、神からの恵みと祝福の通路なのです。

3. 御名を呼び求めさせ、交わりを求める神

古代の神々は、自分の名を明らかにしませんでした。名を明らかにするということは、名を呼ばれる（呪文を唱える）ことで、相手に自分を出すことを可能にし、相手に支配されることになるからでした。古代では相手に名を与えたり、名を変えさせることで相手に対する支配をあらわしました。「神の名を濫りに唱える」とは、つまり神ご自身を把握し、支配し、自らの意のままに用いようとすることであり、そんな人間の神に対する姿勢が拒否されるのです。ところが聖書の神は、ご自身の名をおしげもなく私たちに明らかにされ、ご自分の名を教えて、いつでもご自身を呼び出すよう求められたのです。それは私たちとの交わりを求められたからでした。全能の主権者が、被造物にすぎない私たちの自由にされ、勝手に利用される危険を犯しても、いつでも私たちが御名を呼び求めるようにしてくださったのです。いつでも好きなときに神を呼び出して、神との交わりを持つようにと願われたのです。

生けるまことの神は「語りかける」神です。人間が神に命令し、指示を与えるのではなく、神が人間に命令し、指示を与えるのです。人間が自分の好みと都合で神を選び、その神を呼び出すのではなく、神が人間を選び、呼び出されます。そこで神は私たちの名を呼ばれる方なのです。名を呼

ぶことで、私たちが存在へと呼び出し、ご自身との共なる生、生ける交わりへと招いてくださるのです。人間が名付ける神は、人間を真に生かし、在らしめることはできません。それは無力な人間自身にすぎないからです。そうではなく神が私たちが名付け、その名を呼んでご自身の御許へと召し出してくださるのです。「わたしはあなたの名を呼び、称号（名）を与えた」（イザ45:4）と。神はご自身の名を惜し気もなく教えられることによって、私たちとの交わりを求められたのでした。だから「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるであろう」（詩50:15、口語訳）と求められます。神の御名を聖とすることは、この生ける神の「語りかけ」に聞き従い、神からの「呼び掛け」に応じて、神との「交わり」に生きることです。そして危急の時には、この神の御名を呼び求めて祈り、神に信頼して生きることです。そうして私たちが神に対して真実に生きていくとき、神の御名は崇められ、聖とされていくのです。神の御名にどれほどの力強い助けがあるかに信頼して、いっそう神の御名を呼び求めていくことこそ、この戒めに生きることになるのです。

私たちに口が与えられ、言葉を語ることが許された目的は、隣人に偽りを語り、不真実をつくり、呪いをかけるためではなく、語る口と共に語る言葉を与えたもう神を賛美し、感謝するためです。この神を正しく告白し、隣人に真実を尽くすことです。同じ口から「賛美と呪い」が出て来ることが、私たちに口が与えられた目的ではなく（ヤコ3:9～12）、むしろ「あなたのすることはすべて、言葉によると業によるとを問わず、いっさい主イエスの名によってなし、彼によって父なる神に感謝」することです（コロ3:17）。「詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌」うことです（エフェ5:19）。第三戒が私たちに求める積極的なこととは、神の臨在の前で、神への畏れのうちに、神と隣人に対して真実に生きるということであり、私たちをご自身との交わりへと招いてくださる恵みの神を正しく告白し、感謝し、賛美して生きるということなのです。

（三川栄二）

テキスト 出エジプト記 3章7～15節
子どもカテキズム 問47, 48

〔単元のねらい〕

第三戒が禁じることは、単に神の名を用いないという外面的なことではなくて、それを自分のために利用しようとする人間の利己心が戒められていることに気付かせてください。むしろ神は、私たちに自分の名を啓示されました。「わたしはある」がそれで、その三人称が主（ヤハウェ）です。その目的は、私たちが神を畏れ敬うと共に、その神を心から信頼して、神の助けにより頼むことにありました。神への真実な祈りと隣人への真実な言葉、それがここで求められていることなのです。

神さまを畏れて信頼すること

皆さんは「アラジンの魔法のランプ」というお話を知っていますか。不思議なランプをこすって呪文を唱えると、そのランプからランプの精の巨人が出てきて、自分を呼び出した人を「ご主人様」と呼び、何でも願いをかなえてくれるというものです。呪文とは、自分がしてほしいと思うことを、それを実現してくれる何か不思議な存在にお願いして、かなえてもらえる魔法の言葉のことです。

今は十戒を学んでいて、今日は第三戒です。第三戒は、「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」。つまり神さまのお名前を、むやみやたらに使ったりしてはいけないというものです。しかしどうして神さまのお名前を使ったりするのでしょうか。実は聖書の時代は、神さまの名前が呪文のように考えられていました。神さまのお名前を呼ぶと、その神さまが現れて、お祈りをきいてくれると考えられたのです。神さまの名前には、そのような効果があると考えられていました。そこで神さまも、祈りに答えて欲しいとばかりに、そんなにひんぱんに呼び出されてはたまらないので、なかなか呼び出されないようにしていたそうです。そのために名前をたくさん持ったり、覚えられないような難しい名前にしたのです。昔ユダ王国を滅ぼしたバビロニア帝国ではマルドックという神さまが拝まれていましたが、この神さまは30もの名前を持っていたそうです。も

ちろん本当の神さまではなく、木や石で作られた偶像にすぎませんでした。そうやって神さまの名前を唱えるのは、その神様を呼び出して用事を言いつけることができる呪文だと考えられていました。だから、まことの神さまは、「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」と命じられたのです。

もちろんまことの神さまは、偶像と違って、ご自分の名前を呼び出されたところで、その言いなりにならなければならないような無力な神さまではありません。問題なのは、そうやって神さまの名前を唱えれば、神さまを自分の言いなりにすることができる考える、私たち人間の側にありました。そうやって神さまを、まるで自分の僕でもあるかのように呼び出したり、用事を言いつけたりできると考えること自体が、間違っています。なぜならまことの神さまは、私たちの言いなりになるような無力な神さまではないからです。むしろ私たちが、神さまのお言いつけに従って生きるのです。神さまこそ、私たちのご主人であって、私たちが神さまの主人ではないからです。こうして神さまが私たちに、「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」と命じられたのは、神さまを自分の僕のようにして、自分の好きなように使おうとする、私たちの身勝手な心を戒められたものなのでした。私たちのお祈りはどうでしょ

うか。神さまをまるでコンビニエンス・ストアでもあるかのようにして、自分の好き勝手なお願いばかりを祈るということはないでしょうか。そしてちっとも自分の願いどおりに祈りが聞かれないと、怒ったり、神さまなんか信じられないなどと考えたりしないででしょうか。実は、そういう身勝手な心が、この第三戒で戒められていることなのです。あなたはどうでしょうか？

しかしまことの神さまは、「わたしはある」というただ一つのお名前しか持っておられない方でもありました（出3:14）。それは30もの名前を持ったバビロニアのマルドゥクとは大違いですね。どうして神さまは、ただ一つのお名前しか持っておられないのでしょうか。それでは簡単に呼び出されてしまうことにならないでしょうか。実はまことの神さまは、むしろそのことを望まれたのです。神さまは私たちに「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるであろう」（詩50:15、口語訳）と約束してくださいました。悩んでいるときは、わたしを呼びなさい。苦しんでいるときは、わたしに祈りなさい。そうすればあなたを必ず助けるからと、約束してくださいました。そして私たちが神さまを呼びやすいようにと、ただ一つの名前だけを教えてくださいました。

ですから「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」という戒めは、神さまの名前を呼んだり、使わなければ大丈夫ということではなくて、わたしたちの神さまに対する心が問われているのです。心から神さまを恐れ、神さまを神さまとして礼拝し、従っていくのか、それとも神さまを自分の僕のように、自分の好き勝手に使おうとするのかどうかという、心です。そしてそれは、神さまの名前を使わなければいいということではなくて、むしろ心からの信頼を込めて神さまを呼び、様々な悩んだり、困ったりすることの中で神さまに助けてもらうように祈るということでもあ

るのです。それが本当に神さまを信頼することだからです。「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるであろう」と約束してくださる神さまに向かって、心から助けを求めて祈ることこそ、この戒めが私たちに求めていることなのです。

昔モーセが、この神さまのお名前を教えてもらったとき、モーセは神さまから、イスラエルの人たちをエジプトから救い出す使命を与えられます。しかし自分に自信のなかったモーセは、自分にはできないからと、固く拒みました。自分は口が重くて、人にうまく話せないから、誰か別の人を遣わしてくださいと。しかしそのモーセに神さまは言われました。「一体、誰が人間に口を与えたのか。一体、誰が口を利けないようにし、耳を聞こえないようにし、目を見えるようにし、また見えなくするのか。主なるわたしではないか。さあ、行くがよい。このわたしがあなたの口と共にあって、あなたが語るべきことを教えよう」と（出4:11,12）。神さまが私たちに口をくださったのは、私たちが神さまに自分勝手なお祈りをして、神さまを軽んじるためではありませんでした。またお友だちの悪口を言うためではなく、お友だちに嘘をつくためでもありません。言葉を話すことができるこの口をくださった神さまを喜び、感謝し、賛美するためです。またお友だちに対して真実な言葉を話すためです。そしてみんなの心を豊かにする素敵な言葉を話すために、私たちに口が与えられました。私たちは、この口をもって、神さまを喜び、感謝し、賛美し、また自分の周りにいる人たちの心を豊かにし、明るくするような素敵な言葉を話すようにしていきたいと思います。それが「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」という戒めが、私たちに求めていることであり、私たちに話すことができる口を与えてくださった、神さまが願っておられることなのです。

（三川栄二）

〔今週の暗唱聖句〕 出エジプト記 20章7節 前半

あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。

〈ねらい〉

第三戒について考え、イエス様がこの戒めを完全に守ってくださったことを感謝しつつ、自分の生活を振り返り、聖霊なる神さまがこの戒めを守ることができるように導いてくださることを信じて祈ることができる。

〈展開例〉

(1) ウ小教理の問53～55を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

分からない言葉はないか質問する。

「みだり」「御名」「称号」「属性」「規定」「御言葉」「御業」「きよく敬虔に用いる」「汚す」「濫用」などの言葉について疑問をもてるとよい。質問が出なければ、こちらから質問して答えさせる。

（これらの語句の説明として、水垣渉・袴田康裕『ウエストミンスター小教理問答講解』が分かりやすいので参照されたい。）

神様の御名と称号の豊かさについては、書き出して「様々が言い方がある」と言うことを、目で見て確認させてもいい。

きよく敬虔に用いることと、汚したり濫用した

りすることを対比させながら、具体的にどんな場面が想定できるかの意見交換をしても面白い。

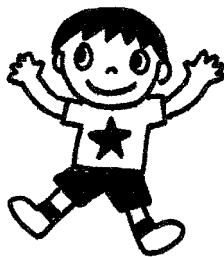
(2) 5月5日から使い始めたプリントの「第三戒」の「求められていること」と「禁じられていること」を書き入れる。問54、55を写して書いても、自分の言葉でまとめて書いてもよい。

(3) 問56を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

そうか、これ脅しじゃなくて理由だったんだね！という感想を誰かもつといい。

(4) 第三戒は、「天にまします我らの父よ、御名をあげさせたまえ」との祈りにわたしたちを導く。「神」という言葉が大変軽い言葉として使われる異教の土地に生きる者として、まことの神さまを「父」と呼び礼拝できる恵みに感謝して、生徒たちと共に祈ろう。

59頁のプリントを使用する。5月5日参照。



6月23日 第四戒 安息日の聖別 教理説教のための聖書黙想

テキスト 出エジプト記20章8～11節
子どもカテキズム 問49, 50
参照教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問57～62
ハイデルベルグ信仰問答 問103

問49 第四戒は何ですか。

答 「安息日を心に留め、これを聖別せよ」、です。

問50 第四戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちの安息日は、主イエスさまの復活された日曜日です。

私たちは、この日を主の日として、礼拝のために特別に取り分け、
この日を目指して一週間を歩みます。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである」(出エジプト20:8～11)

「安息日を心に留め、この日を聖別する」とは、いつもこの日に向かって生きるように、そして、この日は他の六日間とは区別して、神との交わりのために取り分けるように、ということです。「聖別する」とは「聖なるものとする」ということで、それは、神様のために「取り分ける」ということです。

ですから、六日間は働いてもいい、自分のために用いてもいい。だけど、七日目、すなわち、安息日は「あなたの神、主の安息であるから、いかなる仕事もしてはならない」と、この日の用途が神との交わりのために指定されています。

その根拠として、「六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである」と、神の創造の御業を挙げています。

神は天地を創造された時、はじめの六日間で、天と地にあるすべてのものを造り、七日目は休ま

れました。そして、その日を祝福して他の日とは区別されました。その日を「創造の冠」たる人間と共に喜び祝うために、「主は安息日を祝福」されたのです。

主は六日目に人を造り、御自身の創造の御業に参画するパートナーとしておたていただきました。ですから、安息日に神との交わりのために一日を取り分ける時、私たちは、神の創造の御業に参画する光栄な任務が与えられていることに思いを向けることができます。

六日間の地上の歩みの中で、自分が神の創造の御業に参画する光栄な存在である事実を見失うことがあります。身も心も生活も六日間の働きの中に埋没してしまい、神の創造がやがて完成するために私たちが召しだされている事実も見失ってしまうことがしばしばあるのです。

だから、主は、安息日を心に留め、これを聖別し、造り主と向き合う時間を、神御自身が私たち人間のために取り分けてくださったのです。

この安息日の恵みに浴するため、自分自身だけではなく、自分の配慮の中に入れられている人びとに対しても心を配るようにと、主は命じておられます。

複雑になっている現代社会において、すべての人が安息日に職場から離れたなら、世の中が成り立たないのも現実です。そのような現実の中でも、安息日に主と向かい合う恵みに浴する幸いを、神の民は励まし合いながら確認し合うことが大切で

しょう。

〈子どもカテキズムの解説と黙想〉

子どもカテキズムでは、「私たちの安息日は、主イエスさまの復活された日曜日です」と説明しています。そのことをウェストミンスター小教理問答問59ではこう答えています。「神は、世の初めからキリストの復活までは、週の第七日を週ごとの安息日と指定されました。そして、キリストの復活からは、週の第一日を世の終わりまで続けるように指定されました。これがキリスト教安息日です」。

週の七日目が安息日であったのに、それが週の第一日に変わるほどに、キリストの復活は私たちにとって大きな出来事であった、という事実を伝える必要があるでしょう。子どもカテキズムで、「私たちは、この日を主の日として……」と、説明しているとおりです。

ウェストミンスター信仰告白第21章7節では、こう言われています。「……それ（安息日）は世の初めからキリストの復活までは週の終りの日であったが、キリストの復活以後は週の初めの日に変わった。これは、聖書で主の日と呼ばれ、キリスト教安息日として世の終わりまで継続されねばならない」。

主イエスの復活によって、時代は大きく変わり、「安息日」という用語と共に「主の日」という言葉、また、用語がキリスト教会では使われるようになりました。

また、出エジプト記31章14,15節では、こうあります。「安息日を守りなさい。それは、あなたたちにとって聖なる日である。それを汚す者は必ず死刑に処せられる。だれでもこの日に仕事をする者は、民の中から断たれる」。これほど厳粛な旧約の安息日の戒めが、いまや、キリストの十字架と復活により、新しい意味を持つようになりました。

申命記5章15節ではこう言っています。「あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう

命じられたのである」。

この申命記の安息日解説によると、安息日が救いと結びついています。新約の光を当ててこのことを考えると、キリストの十字架と復活により、私たちは罪と滅びの奴隷状態から解放され、救われ、今やキリストによって平安と休息が約束されています。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。私は柔和で謙遜な者だから、わたしの轡を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」（マタイ11:29～30）

キリストによるこの救いと安らぎを週ごとに確認するために、キリストは私たちを教会の礼拝へと招いて下さっています。そこで、子どもカテキズムはこう言っています。「私たちは、この日を主の日として、礼拝のために特別に取り分け、この日を目指して一週間を歩みます」。

〈子どもたちに対して〉

日曜日に教会に行く理由はおもに二つあります。

一つは、私たちが神様から創造の御業の完成のために、神様のパートナーとして作られている事実を確認するためです。もう一つは、私たちが主イエスの十字架と復活によって、もう罪と滅びから解放されている事実を確認するためです。

この二つの大切なことを私たちは、教会の礼拝に行くことによって毎週確認できます。それがちょうど七日目ごとにはできるのは、神様がちょうどよい間隔を知っておられるからです。神様が私たちを造って下さいました。だから、ちょうど七日ごとに集まって、神様の創造と救いの出来事を確認するのが、いちばんふさわしい間隔であることを神様が知っておられます。だから、旧約時代も新約時代も、七日ごとに神の民、神の家族は集まって礼拝をささげるのです。

神様がせっかく用意された「安息日」また「主の日」です。みんなで励まし合いながら、この日を他の日とは区別して、大切に守って行きましょう。（芦田高之）

テキスト 出エジプト記 20章8～11節
子どもカテキズム 問49, 50

〔単元のねらい〕

安息日を守ることで、私たちが造られている意味と、救われていることの感謝を週ごとに確認することができる。だから、みんなで励まし合って教会の礼拝に出席し続けることが大切。

日曜日は私たちのためのもの

〈序〉

私は、大人になってから教会に行くようになりました。子どもの頃は教会に行っていなかったのです。だから、みんなが子どもの時から、こうして教会の礼拝に来ているのを見て、「本当に素晴らしいなあ」と思います。

まず教会に行くようになって、私には変わったことがあります。教会に行く前には、私は一週間が七日間だということに、あまり大切な意味を感じていませんでした。

でも教会に行くようになってから、不思議なことに、日曜日が待ち遠しくなったのです。何で日曜日が待ち遠しくなったのでしょうか。それは、教会のみんなに会えるのが私には、本当に楽しみだったのです。

だから、土曜日になったら私はいつもこうお祈りしていました。「神様、明日も日曜日です。明日も教会に行かれるようにしてください。寝過ごして教会を休むようなことがないように助けてください……」って、祈っていました。

神様は私の祈りを聞いてくださり、毎週教会に行かれるようにしてくださいました。

〈創造の御業に参加する〉

日曜日に教会に行くようになって、私は大切なことを教えていただきました。それは、神様が私を、目的をもって造ってくださった、ということです。神様が造ってくださった世界が、やがて完成するために、神様と一緒に働かせていただける。そんな光栄な、ありがたいつとめを、神様は私に

与えてくださった。そのことを教会に行くようになって教えていただいたのです。私はそのことがとても嬉しかったのです。

私は教会に行くまで、何のために生まれて、何のために生きるのか、全然分からないで生きていました。でも、教会に行くようになって、私は知らされたのです。私が生まれて生かされているのは、意味がある。私を造ってくださった御方は、その意味をよく知っておられる。だから、この御方と一緒に生きていれば、私は、自分が造られた目的や、生かされている意味を知らされて、本当の生きる道を歩める。そう思えたのです。

だから、毎週教会に行って、自分が何のために生まれて、何のために生きるのか、いつもいつも神様から教え続けていただく必要がある、って思えたのです。そうして、私は毎週教会に行くようになりました。

〈罪の赦し・罪からの解放〉

教会に行くうちに、私は、「教会の他の方々のように、洗礼を受けてクリスチャンになりたい」と願うようになりました。でも、自分のような者が洗礼を受けてもいいのかなあ……と、何度も思いました。でも、やっぱり洗礼を受けたいなあ……という気持ちは変わりません。それでも、こんな私が洗礼を受ける資格はない、とも思っていたのです。

「どうしたら洗礼を受けることができるのだら

う……」と、ずいぶん悩みました。でもある時、神様は私の心に教えてくださったのです。それはこういうことだったのです。

「とにかく、私は、罪人だ。罪を赦していただかなくてはいけない罪人だ。私の考え方、生き方、生きている方向……。そのすべてが、神様から離れているものだ。だから、神様の方に戻って、帰って行かなければならない。」そう思えたのです。

その時、私は罪について知らされました。私が罪人だということが知らされました。そして、私は赦していただかなければならない存在だ、という事実を知らされました。

それで、決心ができました。私は洗礼を受けて、罪を赦していただき、神様の側について生きよう、と。罪が知らされ、イエス・キリストによって罪を赦していただき、罪から解放される。そのことを知らされたのは、毎日の日曜の礼拝においてでした。

〈復活の主イエスの招き〉

主イエス・キリストは、私たちのために十字架にかかって、死んで、甦ってくださいました。それは、私たちの罪を赦し、私たちを罪の奴隷状態から救い出すためです。

その主イエス・キリストが、今復活されて生きておられます。そして、私たちが日曜日ごとに教会に来るようにと招いてくださっています。

なぜ主イエスは私たちを毎週、礼拝へと招いてくださっているのでしょうか。

それは第一に、私たちが神様によって造られた存在であることを知らせるためです。アンパンマンのテーマソングにこういう言葉があります。

「何のために生まれて、何のために生きるのか、答えられないなんて、そんなのはいやだ！」

私たちは、神様によって造られ、神様から生きる目的やそれぞれに与えられている務めがあります。でも、神様から離れてしまった私たちは、そのことが分からなくなってしまっているのです。何のために生まれて、何のために生きるのか、答えられなくなってしまったのです。そんな私たちに、私たちが生まれて来た理由、生かされている目的を知らせるために、主イエス・キリストは毎週、日曜日に私たちを呼び出してくださっているのです。

私たちが生きる意味や目的を見失ってしまったのは、神様から離れてしまったからです。罪というのは、神様から離れて、神様と関係なく、自分で好き勝手に生きていきたいという心のあり方のことを言っています。

そんな私たちが、神様のところに戻って行って、神様の子どもとして、父である神様に、「何のために私は生まれたの？ 何のために私は生きていいの？」と尋ねることができる間柄にするために、主イエス・キリストは十字架にかかって、死んで、復活して下さいました。

私たちがいつでもどこでもイエス様の十字架と復活によって罪赦され、神様のもとに戻って行かれるのです。そうして、何度も、何度も、私たちは父なる神様に聞くことができるのです。「何のために生まれて、何のために生きていいの？」と。

こうして、イエス様の招きに従って、造り主である神様のところに、神様の子どもとして帰って行く。そして、私たちが造られ、生かされている理由を尋ねる。毎週、日曜、主の日に、私たちはイエス様から招かれて、そのことを確認させていただいているのです。 (芦田高之)

[今週の暗唱聖句]

出エジプト記 20章8節

安息日を心に留め、これを聖別せよ。

〈ねらい〉

第四戒について考え、イエス様がこの戒めを完全に守ってくださったことを感謝しつつ、自分の生活を振り返り、聖霊なる神さまがこの戒めを守ることができるように導いてくださることを信じて祈ることができる。

口を閉ざしてしまう生徒がいないように注意。

〈展開例〉

(1) ウ小教理の問57～61を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

分からない言葉はないか質問する。今回は範囲が広いので、少しずつ聞いた方がよいかも知れない。

「安息日」「聖とする」分かっていると思うでしょ。生徒本人もそう思っているかも。しかし、案外説明できないかも知れないので、聞いてみる価値はある。

問59 安息日は何曜日？ という質問があるということに驚きを感じるかも。

問60 安息日の聖別の仕方。「終日」「きよく休む」「他の日なら正当な世俗の職や娯楽」「公私の礼拝」「必用やむを得ない業」「あわれみの業」など、意味を確認する言葉がたくさん。

問61 「怠る」「不注意に果たす」「怠惰」「それ自体罪である事を犯す」などの語句の確認。「思い語り行うことによって安息日を汚す」とは、どんな状況なのか話し合ってみる。自分の安息日の過ごし方とのギャップに、

(2) 5月5日から使い始めたプリントの「第四戒」の「求められていること」と「禁じられていること」を書き入れる。問60、61を写して書いても、自分の言葉でまとめて書いてもよい。

(3) 問62を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

この世の働きのために使える6日間、神様が特別の所有権を主張される7日目。その根拠は天地創造にある。そして、神様は安息日を祝福しておられる。

(4) 日曜日に部活があるのが当たり前という地域に住んでいるなら、「部活で余剰に勤務している先生の健康や家庭のために祈る」ということをしてみるとよい。

主の日に教会にいる（とりあえず公的な礼拝の場集っている）ことは本当に感謝なことであるが、おそらくどの生徒も教師も、その場で心を込めて神様を礼拝しているかどうかは反省の余地が十分あるであろう。いたずらに自分を責めたり、十戒の内容に不愉快さを喚起されたりすることなく、素直に反省し、今与えられている恵みに感謝しつつ、さらに豊かな恵みを与えられるよう、共に祈りたい。

59頁のプリントを使用する。5月5日参照。



6月30日 第五戒 父母を敬う 教理説教のための聖書黙想

テキスト	エフェソの信徒への手紙 6章1～3節
子どもカテキズム	問51, 52
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問63～66、 同大教理問答 問123～133 ハイデルベルク信仰問答 問104

問51 第五戒は何ですか。

答 「あなたの父母を敬え」、です。

問52 第五戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまは、私たちに、

お父さんやお母さん、先生やお友だちを与えてくださいました。

ですから、私たちは、神さまの故に、

お父さんやお母さん、先生の教えてくださることを素直に聞き、

お友だちを大切にします。

神さまは、そのような人に祝福を豊かに与えると、

特別に約束してくださいました。

〈主に結ばれた者たちへの「第一の掟」〉

エフェソ書は異邦人キリスト者とユダヤ人キリスト者が一致して信仰生活をするを考慮して書かれています。旧約聖書の十戒そのものを引用するのは、第五戒のみです。同じくコロサイ書と共通しているのは、妻と夫（夫婦）への呼びかけ（エフェソ5:22以下、コロサイ3:18,19）の後に、子どもたちへの呼びかけ（エフェソ6:1以下、コロサイ3:20）が続くことです。このことから、父母とは、当然のこととして、本来、正しい結婚関係において生まれた子どものことを指しますが、家庭は、結婚（関係）の神聖さをその土台・要とするものであることを銘記することが大切です。

そして、より生命的かつ根本的なことは、救い主イエス・キリストにある霊的な結びつきです。エフェソ書5章1節には、「あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい」とあり、同章8節には、「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい」とあります。そして、同章21節には、「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい」と命じられて

いるとおりです。

このように、第五戒は、旧約の時代、出エジプト記20章から申命記5章で新たに命じられたように、主イエス・キリストの救いにあずかる者として、その光を受けとめることが重要です。

今日の日本同様に、多分、当時のエフェソの教会においても、片親が信者であることも少なくなかったでしょう（コリント一7:14）。しかしながら、「子供たちよ」と呼びかけられ命じられることは、「主に結ばれている者として両親に従いなさい」であり、「それは正しいことです」と明言されます。そして、再び、「父と母を敬いなさい。これは約束を伴う最初の（第一の）掟です」と続きます。

まことの神を愛し、キリストの救いにあずかる者にとって、「主に結ばれている者として」という言葉は、真実に神に従うことそのものであり、第一戒～第四戒の神礼拝における愛の証しとしての隣人愛における結実こそ、神の愛の実りと言うことができるでしょう（マタイ7:17）。

そして、この愛の掟に伴う約束とは、「そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きることができる」です。

旧約の時代、主の憐れみの子であったソロモン王の祈りに、「あなたは自分のために長寿を求めず、富を求めず、また敵の命を求めることなく、訴えを正しく聞き分ける知恵を求めた」（列王記上3:10）と主なる神は答えられました。同じように、主を愛し、主の掟に従って、両親（父と母）を「敬う（神の代理者として誠実に尊び、重んじる）」とき、その子らは主の祝福を長く（時間・内容の豊かさを伴う）共にすることが約束されています。

《神の故に》、お父さん、お母さん、先生を……》

第五戒は、モーセの十戒においては、二枚の板の二枚目でありながら、最も大切な戒め（第一の掟）、「神の」掟であると教えることが必要です。

つまり、単なる親孝行を教える人倫の教えではなく、神の権威による掟であり、神の備えられた生命的な秩序を知ることの必要です。そして、答えにある《神さまの故に》という大原則をいつも忘れないようにしましょう。この言葉は言い替えば、《キリストの故に》と同じです。つまり、キリストの救いにあずかる者として、「主に結ばれている者として」ということをいつも生命的、靈的な原則とすることです。

答えの内容から問いに戻りますが、「神さまが願っていること」という言い回しに込められている、私たちの心へのやさしい語りかけと、まことの権威であるお方、わたしたちが素直に聞き、ついていくべきお方である造り主であり、救い主であり、助け主である「神さま」に心を留めたいと思います。

そして、答えでは「お父さん、お母さん」だけでなく、「先生、お友だち」も、神さまが与えてくださったと具体的に展開されています。そして、特に、「お父さん、お母さん、先生」が「教えてくださることを素直に聞く」ことの大切さが教えられています。もっとも、お父さん、お母さん、先生にも弱さがあり、行き過ぎや、間違いもあるかもしれませんが、「おのおの自分が召された務めを熱心に行うこと、両親やすべて上に立つ者、あるいは何かよく指導する者たちに、尊敬、愛、当然の従順と感謝を示すこと、また、彼らの弱さをいっしょに担うこと」です。それは、わたしたち

がこの人生の幸福を神から受けるためであって、それは、わたしたちの救いに役立つのです。（ウルジヌス小教理問答問90、ハイデルベルク信仰問答の準備段階で作成されたもの）と、教えられるとおり、お互いに、主イエスの憐れみによって、神の子、光の子とされた者として、一つの戒めに生きることを求めましょう。

主イエスが、「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。……わたしはあなたがたを友と呼ぶ」（ヨハネ15:14,15）と約束してくださったように、子どもたちが、お友だちを大切にするように導きましょう。

そして、「先生」から展開して、教会的には、御言葉を教える牧師、そして、群れを担う長老への尊敬、また、国家的には、為政者たちへの尊敬も教えることができます。

そして、「神さまは、そのような人に祝福を与えると、特別に約束していただきました」という結びの言葉に心を留めましょう。

《今日の子どもたちに向き合いつつ》

今日、子どもたちの置かれている環境は混沌とし、それぞれの家庭環境において配慮を要しない子の方が少ないかもしれません。しかしながら、主イエスの愛と慈しみは、どのような境遇をも、覆ってあまりある豊かなものであることを信じて、御言葉の説教に備えましょう。また、契約の子たちにおいても、それぞれの家庭の事情は異なることが多いでしょう。その意味では、普段からの教会的な関心と配慮と祈りの中で語られることが望ましいでしょう。そして、この子どもカテキズムが意図している方向性どおりに、いわゆる核家族で想定される「お父さんやお母さん」だけではなく、「おじいちゃんやおばあちゃん」のことも思いを向けつつ、日頃、お世話になっている先生（学校の先生や地域の方々、また、教会の牧師、長老、執事等）にも思いを向けるとよいでしょう。

そして、できるだけ、一人も、孤立感を抱くことなく、主イエスの憐れみの中で、同じ光の子とされる喜びの中に、感謝するように促しつつ、子どもたちとともに、「神の」掟である第五戒に生きましょう。（宮武輝彦）

テキスト エフェソの信徒への手紙 6章1～3節
子どもカテキズム 問51, 52

(単元のねらい)

- 1 「あなたの父母を敬え」との戒めを知る
- 2 「敬う」ことの大切さを幼子イエスさまの成長にならって覚える
- 3 「神さまの故に」とは、主イエスの十字架を知ってともに弱さを担い合うことであると知る
結び 家庭、教会、学校で、「神さまの故に」（神さまの働きの中で）祈ることへと導く。

「神さまの故（ゆえ）に」とは？

おはようございます。今日も、みなさんといっしょに神さまを礼拝することがゆるされて、先生もとてもうれしいです。

これまで、神さまからいただいた十の戒め、十戒について学んできました。今日は、第五戒の「あなたの父母を敬え」です。この戒めは、モーセさんが神さまから石の板に書いてもらったとき、二枚目の板のはじめに書かれていたものといわれます。でも、二枚目だからといって、神さまの次に大切なのが、父母という意味ではありません。そうではなくて、神さまのようにお父さんもお母さんも大切なのです。もちろん、お父さんもお母さんも、神さまがお造りになった人間ですから、神さまが一番なのですが、神さまはお父さんやお母さんをわたしたちと与えてくださって、生まれることができるようにしてくださいました。

また、生まれただけではなくて、お父さんやお母さんといっしょに生活をして、暮らすことのおかげで、大きく成長していくようにしてくださいました。ですから、神さまの次にお父さんやお母さんが大切なのではなく、神さまが与えてくださったから、お父さんやお母さんを大切にしなければいけないのですね。

ところで、この神さまからの戒めには、お父さんやお母さんをどのように愛しなさいと、命じられて、教えられているのでしょうか？

そうですね。「敬え」「敬いなさい」と教えられています。それでは、この「敬う」とはどういう

意味でしょうか？

それは、神さまが与えてくださったお父さんやお母さんだから、ただ大切にするのではなくて、本当に尊敬するように、重んじるように、ということなんです。尊敬するとは、神さまがお父さんやお母さんによって、わたしたちを守ってくださって、食べ物、飲み物、着物を与えてくださるだけではなくて、今、いっしょに、神さまを礼拝しているように、神さまのみ言葉を与えてくださるので、よく言うことを聞くということなんです。

みなさんは、いつも、お父さんやお母さんの言うことを素直に聞いていますか？ もし、聞けなさいときがあるとしたら、それはどんなときですか？そして、そのとき、お父さんやお母さんに、どうして素直に聞けないか、お話ししましたか？また、そのとき、お父さんやお母さんは、みなさんの言うことを聞いてくれたでしょうか？それとも、お父さんやお母さんの言うことが聞けないことについて、怒ったりしたでしょうか？

今日のカテキズムでは、「神さまは、私たちに、お父さんやお母さん、先生やお友だちと与えてくださいました。ですから、私たちは、神さまの故に、お父さんやお母さん、先生の教えてくださることを素直に聞き、お友だちを大切にします」と教えられています。

この「神さまの故に」という言葉は、少し難しいですね。でも、とても大事な言葉なので、しっかり覚えましょう。この「神さまの故に」とは、

私たちがなんでもお父さんやお母さんの言うことに絶対に従うことではなくて、神さま、イエスさまが、私たちを愛してくださっていることをいつも心に覚えてということですよ。

イエスさまのお父さんとお母さんを知っていますね。そうですね。ヨセフさんと、マリヤさんですね。イエスさまは、ヨセフさんとマリヤさんのいうことをよく聞いて大きく成長して、神さまと人から愛されました。そして、12歳のときに、エルサレムの都にのぼったときに、エルサレムの神殿を、ご自分の父の家と呼ばれたのです。

この父とは、イエスさまを私たちに与えてくださった、本当の神さまのことです。イエスさまは、このように、ヨセフさんとマリヤさんといっしょに生活をしながら、本当の神さまに従って生まれ、十字架の死に向かっていかれました。

ですから、この「神さまの故に」という言葉は、ちょうど、イエスさまがヨセフさんとマリヤさんのいうことを聞いて大きく成長したように、そして、神さまのみ言葉のとおり、人々の苦しみや弱さを担って十字架に死んでくださったように、ということを含んでいます。

ですから、ときには、どうしてお父さんやお母さんは自分の気持ちを分かってくれないのだろう、とか、何かを言いたい気持ちになることもあるかもしれません。そのようなときに、自分の気持ちをお父さんやお母さんにお話することはとても良いことですよ。きっと、やさしいお父さんやお母さんは、みなさんの、言にくいことも聞いてくれると思いますよ。それは、決して、お父さんやお母さんを敬っていないことではないから、安心してね。

でも、お父さんやお母さんの言うことが正しいとき、自分がそれについて「いやだな」「めんどくさいな」と思っても、することは大事ですよ。わたしたちはとても、弱いものです。強そうに見える（？）、お父さんやお母さんも、じつは、「弱い」んです。「えっ」て、思った人もいるかもしれませんが、それは本当ですよ。

お父さんやお母さんも、いろいろなことでつらいことや悲しいことを経験しています。人生の少しだけ先輩なだけなんです。でも、子どもたちから見れば、ずっと、ずっと、先輩だけでなく、本当に、いろいろなことを沢山知っていますね。

学校の先生も、教会の牧師先生も、長老さんたちも、わたしたちにいろいろなことを教えてくれます。それは、全部、神さまが、先生に教えてくれたことです。だから、わたしたちは、先生も、本当に敬うことが大事です。もし、そうしなかったら、わたしたちは、先生を失うだけじゃなくて、正しく成長することができなくなってしまいます。それは、先生にとっても、わたしたちにとっても、悲しいことですよ。

学校でも、いじめられている子どもたちがいるかもしれません。学校にいきたくない子どもたちもいるかもしれません。でも、神さまが与えてくださった先生を少しだけ好きになってみてください。そうすると、学校にも、教会にも、行きたくなると思いますよ。どうですか？

お家の人や、まだ、教会に来たことのない子どもたちもいるかもしれません。でも、お家の人やイエスさまのことを知ることができるようにお祈りすることはとても良いことですよ。それは、お家の人や、敬うことと同じことだと、先生は思います。そのようにして、「神さまの故に」という少し難しい言葉を覚えながら、お祈りすることがとても大事です。イエスさまは、ただお一人、「神さまの故に」、お父さんにもお母さんにも悪い思いをもったり、悪い言葉を口にしたり、悪いことを一度もしなかったお方です。そればかりか、私たちの身代わりに、十字架に死んでくださって、天の父である神さまの言うことを全部行ってくださいました。このイエスさまの愛を知るとき、私たちも、「神さまの故に」、お父さんもお母さんも、どんな人にも良い言葉と行いをすることができるように変えられていきます。それでは、お祈りしましょう。

(宮武輝彦)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 20章12節 前半
あなたの父母を敬え。

〈ねらい〉

第五戒について考え、イエス様がこの戒めを完全に守ってくださったことを感謝しつつ、自分の生活を振り返り、聖霊なる神さまがこの戒めを守ることができるように導いてくださることを信じて祈ることができる。

〈展開例〉

(1) ウ小教理の問63～65を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

分からない言葉はないか質問する。

「賜る」「目上」「目下」「対等」「地位」「関係」「名誉」などの意味を適切にとらえているか。

「主の賜る地」ってどこ？→出エジプトの目的地について、生徒は、様々な描写と共に語るができるだろうか。

「目上・目下・対等の関係」について、中学生は3学年しかないのに「先輩・後輩」という非常に狭い人間関係の中で生活している。立場や関係が微妙にねじれており、3年生の先輩の方が、先生より偉いということもあり得る。生徒同士の間人間関係の中にも上下があり、それは成績や人気や雰囲気など当人の力では如何ともしがたく、対等の立場で自分の意見が表明できない場合もある。大人全般に対しては、期待が大きい分、批判も厳しい。相手の名誉を守り、自分の立場（相手から見て目上か目下か対等か）にふさわしい義務を果たすことについて反抗的である場合もあり得る。

ふさわしい義務を果たすとは、行動や言葉だけでなく、心から相手を尊重し相手の存在と自分との関係を神さまに感謝することを前提としている。自ずと感謝できる相手もいれば、いったい、

この人のどこを感謝したらいいのかと悩む人もいる。相手にとって自分が迷惑な存在かも知れないと悩むこともある。しかし、万事を益としてくださる神様を心から信頼するならば、どんな人間関係にも感謝し、相手を喜ぶポイントを見つけ出すことができる。

(2) 5月5日から使い始めたプリントの「第五戒」の「求められていること」と「禁じられていること」を書き入れる。問64, 65を写して書いても、自分の言葉でまとめて書いてもよい。

(3) 問66を読む（教師が問を読んで、生徒が答えを読む）。

第五戒に加えられている理由は、中学生にとって果たして魅力的なご褒美であり得るだろうか？「長寿と繁栄」「主が賜る地で長く生きること」に魅力を感じない生徒の「別にいい、どっちでもいい～」という声が聞こえそうな気がする。

その場合は、あなたにとって魅力的でなくてもイスラエルの人々にとっては「主が賜る地で長く生きること」がとても大切なご褒美であったことを伝える。そして、括弧内の但し書き「神の栄光とその人自身の益になる限り」という言葉の重要性についても話し合えるとよい。

(4) 第五戒的人間関係構築方法は、相手と自分だけを見ては実践できない。いつでも神様を中心に考え、神様に愛され赦されている自分を自覚する。そのとき、自分を愛するように相手を愛し、相手の立場を尊重し、敬うことができる。

59頁のプリントを使用する。5月5日参照。



2013年7～9月カリキュラム（第50号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単 元 の 目 標			
7月7日	第六戒 殺してはならない	問53, 54	ウ小67-69、ハイデ105-107
		マタイ5:21-26	マタイ5:22
命は主のもの。人の命の尊さを知ろう。いじめは殺人の始めであることを知ろう			
14日	第七戒 姦淫してはならない	問55, 56	ウ小70-72
		マルコ10:1-12	創世記2:24
男性と女性との正しい関係を学ぼう。結婚の尊さ、神聖さを知ろう			
21日	第八戒 盗んではならない	問57, 58	ウ小73-75、主は羊飼いか37
		創世記1:26-29	創世記1:26
与えられたものに満足し、神に感謝し、神と人のために用いよう			
28日	第九戒 偽証してはならない	問59, 60	ウ小76-78、ハイデ112他
		サムエル上17:12-30	出エジプト20:16
偽りによって人を陥れてはならない。愛と真実のある言葉を語ろう			
8月4日	第十戒 むさぼってはならない	問61, 62	ウ小79-81、ハイデ113他
		ルカ12:13-21	出エジプト20:17a
むさぼりは偶像礼拝である。人のものを欲する自己中心の罪を悔い改めよう			
11日 (平和)	平和を創り出す	平和カテキズム	ウ大122
		ルカ22:47-53	マタイ5:43
神は平和の神である。互いに祝福を祈り、身の周りで平和を創り出して歩もう			
18日	神のおきてを喜ぶ生活	問63	ウ小39-41, 82-85、ウ大97, 155
		マルコ10:17-27	詩編119:14
聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、主イエスにならう者として歩もう			
25日	十戒の完成者キリスト	問64	ウ大149、ウ小82
		ヨハネ1:5-10	ヨハネ1:9
十戒（律法）を完成するために、主イエスはこられた。十字架の贖いを喜ぼう			
9月1日	教会に生きる（一）	問65	ウ小29-32、ハイデ54, 55
		エフェソ4:12, 13	エフェソ4:13
聖霊によって結ばれた教会と一つにされて、自らを神にささげて歩もう			
8日	教会に生きる（二）	問66	ウ小85
		使徒言行録20:21	使徒20:21
天上の主が教会に豊かな祝福を注いでくださる。主と共に、教会と共に歩もう			
15日 (敬老)	信仰と悔い改め	問67	ウ小86, 87
		使徒言行録2:37-40	使徒2:38
聖霊によって信仰が与えられたことを喜び、日ごとの悔い改めに生きよう			
22日	恵みの手段	問68	ハイデ65、ウ小88
		マタイ28:18-20	マタイ28:20
御言葉と礼典と祈りが信仰生活の土台である。教会の恵みに生きよう			
29日	神の御言葉—聖書—	問69	—
		ヨハネ5:31-40	ヨハネ5:39
書かれた神の御言葉である聖書に日々耳を傾けよう			

2013年度 年間カリキュラム (第49～52号)

(2013年4月～2014年3月)

二年サイクル カテキズム カリキュラム 第2年 (子どもカテキズム問36～85)

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2013年 第49号	4月7日	進級式	復活のときの祝福	問36
	4月14日		感謝の生活	問37
	4月21日		感謝としての服従	問38
	4月28日		十戒—感謝の道しるべ	問39
	5月5日		神と人への愛	問40
	5月12日	母の日	贖いのみわざ—過越—	問41, 42
	5月19日	聖霊降臨祭	聖霊と終わりの時代	—
	5月26日		過越の成就—キリスト	問41, 42
	6月2日		第一戒 神を神とする	問43, 44
	6月9日	花の日	第二戒 刻んだ像の禁止	問45, 46
	6月16日	父の日	第三戒 神の御名	問47, 48
	6月23日		第四戒 安息日の聖別	問49, 50
	6月30日		第五戒 父母を敬う	問51, 52
第50号	7月7日		第六戒 殺してはならない	問53, 54
	7月14日		第七戒 姦淫してはならない	問55, 56
	7月21日		第八戒 盗んではならない	問57, 58
	7月28日		第九戒 偽証してはならない	問59, 60
	8月4日		第十戒 むさぼってはならない	問61, 62
	8月11日	(平和)	平和を創り出す	—
	8月18日		神のおきてを喜ぶ生活	問63
	8月25日		十戒の完成者キリスト	問64
	9月1日		教会に生きる (一)	問65
	9月8日		教会に生きる (二)	問66
	9月15日	(敬老の日)	信仰と悔い改め	問67
	9月22日		恵みの手段	問68
	9月29日		神の御言葉—聖書—	問69

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第51号	10月6日		神の御言葉—説教—	問69
	10月13日		御言葉への聴従	問70
	10月20日		礼典	問71
	10月27日	宗教改革記念	宗教改革	—
	11月3日		洗礼	問72, 73
	11月10日		主の晩餐	問74, 75
	11月17日		祈りとは何か（一）	問76
	11月24日		祈りとは何か（二）	問76
	12月1日	アドベント	待降節	—
	12月8日	アドベント	待降節	—
	12月15日	アドベント	待降節	—
	12月22日	降誕祭	降誕祭	—
	12月29日	年末	一年の感謝	—
2014年	1月5日	新年	新しい一年に向けて	—
第52号	1月12日		祈りのお手本	問77
	1月19日		天の父よ	問78
	1月26日		御名をあげさせたまえ	問79
	2月2日		御国を来たさせたまえ	問80
	2月9日	(11 信教の自由)	御心の天になるごとく	問81
	2月16日		日用の糧を与えたまえ	問82
	2月23日		我らの罪を赦したまえ	問83
	3月2日	(5- レント)	悪より救い出したまえ	問84
	3月9日	レント	頌栄	問85
	3月16日	レント	アーメン	問85
	3月23日	レント	受難節	—
	3月30日	レント	受難節	—

〈執筆よりひとこと〉

●ジュニアサマーキャンプで会う中学生の顔を思い浮かべながら書きました。どうか教会学校で彼ら彼女らがたくさん意見を言うことができますように。(長谷川はるひ)

●教案誌の中心的な編集を行っておられた望月信先生が留学のため編集委員の働きを終えられました。教案誌は同じ水準で継続的に発行することが求められていますが、それが適いません。しばらくの間、分級がひとつとなり、ご迷惑をおかけしますが、お許しください。また、教案誌が継続発行を続けることも、当たり前なことではありません。編集部のため、執筆者のことを覚えて、引き続き、お祈りとご支援を賜りますよう、お願いいたします。(辻 幸宏)

●子どもたちにみ言葉の恵みを届け、子どもたちとともにみ言葉の恵みを分かち合う諸教会のいとなみが、キリストの命のみ霊に導かれつつ、すこやかにいとなまれていきますように。(木下裕也)

〈あとがき〉

●第49号をお届けします。今号も多くの方々のご協力をいただきました。神様と執筆者・読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●分級展開例は、しばらくの間、幼稚科・小学科下級・小学科上級・中学科の4つの分級展開例から、ひとつのみを掲載することになります。今回は長谷川はるひ姉が中学科を執筆してくださいましたが、執筆者によって何科になるか分かりません。分級の準備のために、教師会で話し合っていたことが増えるのではないかと思い、申し訳なく思います。できるだけ早く、元の形に戻せるように体制を整えたいと思います。どうかお祈りください。

●教案誌のためにご奉仕くださる方を募っています。ぜひ、編集部にお気軽に声をかけてください。

問い合わせは相馬伸郎まで。

E-mail: iwanoue@me.ccnw.ne.jp

●子どもたちの信仰の証を募集しています。子ども自身の言葉でも、教師(もしくは親)の言葉でもかまいません。皆さまは、主の日の朝、誰よりもはやく教会の玄関をくぐり、祈りつつ、子どもたちを迎えておられることと思います。皆さまの奉仕の労苦を主の豊かにねぎらってくださいように。そして、子どもたちの信仰告白と受洗の実り以上のねぎらいはないでしょう。喜びをぜひ互いに分かち合しましょう。

●日本キリスト改革派教会の教育機関紙『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。当教案誌編集部より提供させていただきます。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●Soli Deo Gloria!

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、品切れになっていた『子どもカテキズム』を再刷しました。現在のカリキュラムは、『子どもカテキズム』に基づいて編まれています。ぜひお求めください。教案誌はバックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。『子どもカテキズム』(300円)、副読本『主は羊飼』(800円)のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail: yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	望月 信 (高蔵寺教会牧師)
望月 信 (高蔵寺教会牧師)	木下裕也 (名古屋教会牧師)
巻頭説教	二宮 創 (太田伝道所宣教教師)
三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)	橋谷英徳 (関キリスト教会牧師)
日曜学校・教会学校訪問	大西良嗣 (滋賀摂理教会牧師)
中嶋俊治 (大阪教会長老)	三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)
信仰の証	芦田高之 (新浦安教会牧師)
石川真衣 (田無教会会員)	宮武輝彦 (芸陽教会牧師)
聖書黙想・説教展開例	分級展開例
辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	中学科 長谷川はるひ (関キリスト教会会員)
長谷川潤 (四日市教会牧師)	イラスト作画
草野 誠 (恵那教会牧師)	表紙 田口裕美 (尾張旭教会会員)
相馬伸郎 (名古屋岩の上传道所宣教教師)	本文 岡野美佳 (青葉台キリスト教会会員)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上传道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
二宮 創	太田伝道所宣教教師
長谷川潤	四日市教会牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師
安田直人	田無教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2013年4・5・6月号 (季刊)
第49号
2013年2月25日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)
